ヒニヨッテスクハレタノダトキガツクト　ムゴンノママ

【注　意】

（1）　單獨には　タダ。

（2）　又　ヤマデラ。

文字語句

新出文字

救（スクフ）　沒（ボツ）　薄（ウス）

語句と其の解説

稲むらの火（イナ ヒ）　稲むらは稲を刈取つて積重ねたもの、普通藁の儘に積んだものと竿にかけたものとがある。主人公の五兵衞は實は濱口儀兵衞の事で、彼は紀州有田郡廣村の人、名は成則、字は公輿、梧陵と號し、世々鄕村の豪族であつた。墓銘に依れば（別項の今村博士の說とは稍異なるが、墓銘が何より正確と見ねばならぬ。記して識者の考證に俟つ事にする）梧陵人と爲り宏度明達、博く書を讀む。專ら徂徠を慕ひ、夙に志を立て、天下の名士と交り宇內の形勢に於て大に見る所あり。會々德川幕府の外交を聞くや、梧陵人に謂ひて曰く、方今の急務は外交に在り。然して外交の要旨は我に於て德威を以て之に接する能はずんば戰ひて後和するに若ざるなりと。又平生交遊する所の士岩瀨・柴田・田

邊等に就きて遠航の事を謀り、諸士皆之を翼賛すと雖も憚る所ありて終に果さず。是に於て梧陵時勢の止むを得ざるを覺り去りて鄕里に歸り、文は道德經濟を以て主と成し、武は專ら之を洋制に取り、隊を編して操習を試み、耐久學舍を建てゝ子弟を敎育し、別に英人を聘して共立學舍を和歌山に開き、名聲大に著はる。紀伊侯の藩政を改革するや、梧陵の用ふべきを聞き、擢んでゝ參政に任ず。旣にして天下一變王政古に復して後、明治二年を以て和歌山藩少參事と成り、四年權大參事に昇進し、尋いで東京に召されて驛遞正に任ぜられ驛遞頭に進む。後再び和歌山縣大參事と成り、間も無く之を辭す。梧陵平生慈惠を好む。初め安政元年十一月（五日）地大に震ひ、水害を以て廣村の全土殆ど破壞し、水退くと雖も人心恟々たり。時に梧陵百方之を慰諭し、私財を出して賑恤す。當時廣村の地たるや多く厚稅の田圃を有し、民常に賦課に苦む。梧陵私かに謂ふ、海嘯の防禦は堤防を築くに在り。是れ一日も無かるべからず、今若し堤防を築き新に田圃を作らば所謂一舉兩得のものなりと。乃ち同族吉右衞門（東京日本橋の豪商、千葉縣銚子山サ醬油の經營者）と相謀り、（玆が今村博士の說と相違する）官に白して自ら費を出し堤防を造る。其の長さ凡そ十五町、横八間なり。是に於て園村の民始めて兩弊を免かる。其の他民衆に率先して業を導き利を興し、或は橋梁を修し或は道路を治する等亦一にして足らず。明治十二年府縣會を開き議員を徵集するや梧陵選ばれて和歌山縣會議長と爲る。後十四年十月天皇詔して國會の開期を明治二十三年と定む。全國忽ち政黨の論喧しく、各地主義を分ちて黨派を樹立し、以て他日國會の準備を爲す。梧陵亦木國同友會を組織し、擧げられて其の會長と成る。是に於て梧陵大に眼を遠大に放ち、常に急激の脚を失するを說き、沈着以て步を進むべきを諭

す。因りて閥縣の人士自立の方向を定め、自治の計畫を按じ、一も輕躁浮薄の痕跡を露はさずと云ふ。十七年五月梧陵決然歐米の行を企つ。其の意蓋し積年の宿志を遂げ、且つ國會開設の期漸く近きを以て、親しく歐米の制度を視察し、以て大に國家に裨益せんと欲するに在り。而して其の行僅に米の一國に止まり紐育府に歿す。時に十八年四月二十日なり。年六十六、大正四年十一月從五位を贈らる、と。八雲が五兵衞（卽ち儀兵衞）を知つたのは、彼が嘗て和歌山に共立學舍を開き、英人を聘して子弟を敎育させたのに歸因したものと思はれる。もと英國人であつた彼は恐らく英人を介して梧陵の行蹟を傳聞して感激したのであらう。

五兵衞は家から　紀州有田郡廣村であるが、兒童には別段知らせる必要はない。

今の地震　安政元年十一月五日に襲來した地震。濱口梧陵の墓銘に〝安政元年十一月地大に震ひ、水害を以て廣村の全土殆ど破壞し、水退くと雖も人心悵々たり〟とある。

地鳴　地震其の他で地盤の鳴響くこと。ぢひどき。

經驗　實地に得た智識技量。心理學的には感官から得た知覺。こゝろみ。ためし。

無氣味　氣味が惡いこと。怖氣がつくこと。

津波　大津波が俄に海岸を襲ふこと。海底火山の破裂又は海底地震等の際、震動を海水に傳へるに依り起るもの。我が國では明治廿九年六月に起つた三陸地方の海嘯が最も大きい。

猶豫　ためらふこと。躊躇すること。ぐづぐづすること。ぐづつく。

松明　松の脂多き部分、又は竹・葦等を束ねて火を點じ、路を照すに用ひるもの。此處では點火用に供して居る。

夢中　物事に熱中して我を忘れること。心を奪はれること。無我夢中。

失神　氣を失ふこと。ぼんやりすること。きぬけ。喪心。失心。

早鐘　火災や其の他の危急の際に烈しく打鳴す鐘。又其の音。急鐘。じやりば

ん。

莊屋　江戸時代領主が土民の中から命じ、郡代・代官の下に村方の事を統べさせた役。古昔莊園を掌つた莊司・莊官の稱遺であらうと言ふ。

高臺　高い臺地。小高く成つて平坦な土地。たかみ。

たそがれ　たそがれどき（誰彼時）の略。誰彼の見分け難い時の義。夕方の薄暗い時。夕ぐれ・暮れがた。黃昏。たれがれどき。

資料

敎材の出所

生神（小泉八雲著『佛土の落穗』第一章）

有史以前から日本の海岸は、數世紀の不規則なる間を隔てゝ非常に大きな海嘯——地震、或は海底の火山の働きのために起る海嘯のために掃き去られてゐる。この恐ろしい海の不意の膨脹を日本人は津浪と云つてゐる。最後の津浪は一八九六年（明治廿九年）六月十七日の夕方に起つた、その時には殆んど二百哩程の長さの津浪は宮城・岩手及び靑森の東北の諸縣を襲うて數百の都市と村落を破壞し、いくつかの地方を全滅させ、そして殆んど三萬の人命を亡ぼした。濱口五兵衞の話は日本の他の地方の海岸に於て明治時代より遙か以前に起つた同じやうな災害の話である。

彼を有名にした事件の起つた時、彼は老人であつた。彼はその村の最も有名なる住民であつた、長い間村長であつた、そして尊敬され又愛されてゐた。人々はいつも彼をおぢいさんと呼んだ。しかし、その土地の最も富んだ人であつたので、時に公けに長者と呼ばれてゐた。彼は小さい農夫に爲になるやう

な事を云つてきかせ、喧嘩の仲裁をし、必要な時には金をたて替へ、そして最もよい條件で彼等のために米を賣捌いてやるやうな事をいつもしてゐた。

濱口の大きな草葺きの母屋は、灣を見下す小さい高臺の端に建つてゐた。重に米をつくつてあるこの高臺は、森のしげつた山に三方圍まれてゐた。この土地は外に向いた端の方から、水際までゑぐり取つたやうに大きな緣の凹面になつて傾斜してゐた。そして一哩の四分の三程のこの傾斜の全部は、海面から見ると狹い白いうねりくねつた道、一條の山道によつて中央を分けられた緣の大きな階段のやうに見えた。本當の村になつて居る九十の草葺きの家と一つの神社が屈曲した灣に沿うて立つてゐた、そして外の家は長者の家へ通ずるその狹い坂路の兩側にしばらく續いて散在してゐた。

秋の或夕方、濱口五兵衞は下の村でお祭の用意をして居るのを、自分の家の緣側から眺めてゐた。稻の收穫が大層好かつた、そこで村人は氏神の社の境内で踊を催して豐作を祝しようとしてゐた。老人は淋しい町の屋根の上にひるがへつて居る幟や、竹の竿の間に飾つてある提灯の列や、神社の裝飾や、派手な色のなりをした若い人々のむれを見る事ができた。その夕方老人と一緒にゐたのは小さい十歳の孫だけであつた、その他の人々は早くから村の方へ行つてゐた。いつもより少しからだの加減が惡くなかつたら、老人も一緒に出かけるところであつた。

その日はむしあつかつた、そして微風が起つて來たが、未だ何だか重苦しい暑さが殘つてゐた、それが日本の農夫の經驗によると、ある季節には地震の前兆である。そして間もなく地震が來た、人を驚かす程の强さではなかつた、しかしこれまで數百回の地震を感じて來た濱口は變に思つた、――長い、の

ろい、ふわりとしたゆれ樣であつた。多分極めて遠方の或大きな地震のほんの餘波であつたらう。家はぎしぎしと云つて幾度かおだやかにゆれた、それから又靜かになつた。

その地震が終ると、濱口の鋭い思慮深い眼は、氣遣はしさうに村の方へ向いた。或一定の場所や物を見つめて居る人の注意が、全く自覺して見てゐない方へ――明かな視野以外にある無意識な知覺の朦朧たる範圍に於てたゞ少し變な感じのする方へ、不意に氣を取られる事がよくある。そんな風に濱口には沖の方に何かつねならぬ事のあるのに氣がついた。立ち上つて海を見た。海は全く不意に暗くなつてそして變であつた。風と逆行して居るやうであつた。陸から向うへ退いて走つてゐた。

忽ちのうちに全村がその稀有の出來事に氣がついた。明らかに先程の地震を感じた人はなかつた。しかし潮の運動にはたしかに驚いた。一同が浪際へ、そして浪際のもつと先へ、それを見に走つて行つた。人の記憶ではこんなに潮の引いた事はこの海岸であつたためしはない。見た事のないものが現れ出た。これまで知られなかつた肋骨のやうな畦（うね）のある砂の廣場や、海草のからんで居る岩の區域が、濱口の見てゐる間に現はれて來た。そして下の方の人はその巨大なる引潮は何を意味するかを考へる者はないやうであつた。

濱口五兵衞彼自身もこんな物を見た事はなかつた、しかし彼は父の父から幼少の折に聞いた事を疊えてゐた、そして彼は海岸の凡ての傳說を知つてゐた。彼には海がどうなるか分つてゐた。多分彼は村へ使をやるのに要る時間、山のお寺の僧に大きな釣鐘を鳴らして貰ふために要る時間を考へてゐたのであらう。……しかし濱口の考へたらしい事を話す方が、濱口の考へた時間よりもはるかに長くかゝるであ

らう。彼は只傍に向つて言つた。

『忠、すぐ大急ぎだ。　たいまつをつけて來い。』

たいまつは嵐の夜に使ふために、そして又或神事の祭禮に使ふために多くの海邊の家にしまつてある。子供はすぐにたいまつをつけた、そして老人はそれをもつて野原へ急いだ、そこには彼の大部分の投資とも云ふべき數百の稻叢があつて運ばれるばかりになつてゐた。坂の端に一番近い稻叢に近づいて老いた足で急げるだけ急いで交る交るたいまつをつけ始めた。日に乾いた藁はほくちのやうに燃えた。火勢をあほる海風はその稻を岡の方へ吹き上げた、そしてまもなく一叢又一叢、藁は炎になつて天に冲する烟の幾條かを上げたが、それが相集り交つて一つの大きな雲の渦となつた。忠は驚きかつ恐れて祖父のあとから叫びながら走つた。

『お祖父さん、どうして、お祖父さん、どうして、――どうして。』

しかし濱口は答へなかつた。説明してゐる暇がなかつた、たゞ危難に瀕してゐる四百人の生命の事ばかり考へてゐた。子供はしばらく稻の燃えて居るのを興奮して見てゐたが、突然泣き出した、そしてお祖父さんは氣が狂つたと信じてうちへ驅け込んだ。濱口は稻叢の一つ一つに火をつけて遂に自分の田地のはてまで來た、それからたいまつをなげ出して、待つてゐた。その稻を見て山寺の小僧は大きな鐘をゴーンとならした、そこで村人はこの二重の訴へに答へた。濱口は村人の、砂から渚をこえて、村の方から蟻のむれのやうに急いで登つて來るのを見たが、彼の待遠い眼から見れば蟻よりも早いとは思はれなかつた。それ程時刻は彼に取つては非常に長く見えたのであつた。日は沈みかゝつてゐた、灣の皺の

ある底、それから遙か向うの斑のある土色の大きな廣がりが最後の橙色のあかりに露出してゐた。そして續いて海が地平線の方へ走つてゐた。

しかし、實際は濱口がそれ程甚だ長く待たないうちに、第一の救助隊が到着したのであつた、それは二十人程の敏速なる若い農夫達で、直ちに消火に赴かうとした。しかし長者は兩手を以てそれを止めた。

『もやして置け』彼は命じた、『うつちやつて置け、村中の人に、ここへ來て貰うんだ、――大變だ』

村中の人が追々來た、そこで濱口が數へた。若い男や男の子供はすぐにそこへ來た、そして元氣な女や娘達も大分來た、それから老人の大方は來た、それから赤ん坊を背負つた母親、それから子供までも來た、――子供でも水を渡す手傳ができるからである、そして眞先にかけつけた人々と一緒について來られなかつた年長の人々が急な坂を上つて來るのがよく見えて來た。次第に集つて來た人々は、やはり何にも知らないで悲しげに不思議相に、燃えて居る野原と長者の自若たる顏とを交る交る眺めてゐた。そして日は沈んだ。

『お祖父さんは氣ちがひだ、僕は恐い』と澤山の質問に答へて忠はすゝり泣いた、『お祖父さんは氣ちがひだ、わざと稻に火をつけたんだ、僕はそれを見たんだ』

『稻の事は子供の云ふ通りだ』濱口は叫んだ、『わしは稻に火をつけたんだ。　…皆ここへ來たか』

組長と家々のあるじ達はあたりを見廻し、坂を見下して答へた、『皆居ります、でなくともすぐ參ります。……私共にはこの事が分りません。』

『來た』老人は沖の方を指さし、力一杯の聲で叫んだ、『わしは氣ちがいか今云つて見ろ』

たそがれの薄明りをすかして東の方を一同は見た、そして薄暗い地平線の端の海岸のなかつたところに、海岸の影のやうな長い細い薄い線が見えた。その線は見て居るうちにふとくなつた、海岸に近づく人の眼に海岸線が廣くなるやうに、その線は廣くなつた、しかし比べ物にもならぬ程ずつと早く廣くなつた。即ちその長い暗がりは、絶壁の様に聳えて、鳶の飛ぶよりももつと早く進んで來る、押し返しの海であつた。

『津浪』と人々は叫んだ、そして巨大なる海の膨脹が山々を轟かす程の重さを以て、又赫々たる幕電の様な泡沫の破裂を以て海岸にぶつかつた時、どんな雷より重い、名狀し難い衝動によつて凡ての叫び聲と凡ての音をきく力とはなくなつた。それから一時は雲のやうに坂の上を突進して來た水烟のあらしの外何物も見えなかつた。そして人々は、たゞそれにおびへて狼狽して後へ散つた。再び見直した時彼等は彼等の居宅の上を荒れて通つた白い恐ろしい海を見た。うなりながら退く時、土地の五臓六腑をひきちぎりながら退いた。再び、三度、五度、海は進み又退いた、しかしその度毎に波は小さくなつた。それから元の床に返つて靜止した、大風の後の様に荒れながら。

高臺の上には暫らく何の話聲もなかつた。一同は下の方の荒廢を無言で見つめてゐた。投げ出された岩や裂けて骨の出た絶壁の物凄さ、住宅や社寺の空しい後へ海底からゑぐり取つて來て放り出してある藻や砂利の狼藉さ。村落は無くなつた、田畠の大部分は無くなつた、高段さへも存在しなくなつた、そして測に沿うてゐた家の中殘つて居る物は一つもない、たゞ沖の方に物狂はしく浮沈して居る二つの藁屋根だけであつた。死を逃れた後の恐ろしさ、凡て人の損害のための茫然たる自失は凡ての口を噤にし

た、そのあげく濱口の聲で再び穏に云ふのが聞えた。

『あれが稲に火をつけたわけだ』

彼等の長者なる彼は今最も貧しき人と殆んど同じ程の貧しさになつて立つてゐた、彼の財産は無くなつたからであつた、しかし彼はその犠牲によつて四百の生命を救つたのであつた。小さい忠は走つて來て手にすがつて愚かな事を云つた事の赦しを願ふた。そこで人々は彼等の生存してゐる理由に氣がついた、そして彼等を救ふたその單純なる、己を忘れた先見の明に感服し始めた、そして頭立つた人々は濱口五兵衛の前に土下座した、それから人々はそれにならつた。

それから老人は少し泣いた、一つは嬉しかつたから、一つは自分が老年で衰弱してゐて、ひどく苦しんだからであつた。

『家が殘つてゐる』物が云へるやうになると直ぐに忠の頬を機械的に撫で乍ら、彼は云つた、『そして大勢の入る場所はある、それから山の上のお寺もある、外の人は其處にも入れる』

それから彼は案内してうちに入つた、人々は叫んだり、ときの聲を上げたりした。

困難の時期は長かつた、その當時一地方と他の地方との間に敏速な交通の方法はなく、そして必要な助けは遠くから送られねばならなかつたからである。しかしもつと時節が好くなるに隨つて人々は濱口五兵衛に對する彼等の負債を忘れなかつた。彼等は彼を富有にする事はできなかつた。例へ出來ても濱口は彼等にさうする事を許さなかつたであらう。その上物品を贈る事は彼に對する彼等の崇敬の念を表

はすには不足であつたらう、彼の心中の靈魂は神のやうであると信じたからであつた。そこで彼等は彼を神と宣告してその後彼を濱口大明神と呼んだ、それよりも偉大な名譽は與へられないと考へたからである。――又事實如何なる國にあつてももつと偉大なる名譽を與へる事はできないのである。そして彼等が村を再び建てた時、彼等は彼の靈魂のために神社を建てた、そしてその前面の上部に金の漢字で彼の名を書いた札を掲げた、そして祈と供物を以てそこに彼を禮拜した。それについて彼はどんな感じがしたか私には分らない、私の唯知つて居る事は下のやうで彼の靈魂は神社に祭られてゐたが、彼は子供及び子供の子供と共に、以前の通り人間らしく又質素に山の上の古い草葺きの家に引續き住した事である。彼が死んでから百年以上にもなる、しかし彼の神社はやはり存在してゐる、そして人々は恐怖又は困厄の時に彼等を助けてくれるやうに、善い老農夫の靈魂に今も祈を捧げると云ふ事である。

× × × ×

私は濱口の肉體が一方にあつて魂が又別の方にある事をどうして農夫達が合理的に想像するのであるか、それを私に說明して呉れるやうに、友人の或日本の哲學者に賴んだ。それから私は、濱口の生前に農夫達が禮拜したのは、彼の靈魂の一つであつたか、それとも彼等は禮拜を受けるために或特別の魂がそれ以外の魂と離れて出ると想像したのであらうかと尋ねた。

『農夫達は』私の友人は答へた、『人の心や魂は、生前でも、同時に澤山の場所に居られる物と考へて居る。……勿論こんな考は、魂に關する西洋の考と全く違つて居る。』

『その方がもつと合理的でせうか。』私はいたづらに尋ねて見た。

『さうですね。』彼は佛敎徒らしい微笑を以て答へた、『もし私共が凡ての心の統一と云ふ說を正しいとして見れば、日本の農夫の考には、少くとも或かすかな眞理を含んで居るらしい。あなたの西洋風の魂に關する考については、さうは云へませんね。』

參考

地震漫談

――東京帝大理學部地震學會發行雜誌『地震』第五卷第七號所載　筆者理學博士今村明恒――

（其の四の一）

南紀廣村

廣村（紀伊有田郡）は和歌山市の南方凡そ七里の距離にある湯淺町に接した海濱の一邑である。現今は戶數僅に五百に過ぎないので、殷賑湯淺町に比すべくもないが、往昔は湯淺千戶、廣千戶と稱し、却て之を凌駕した事もあつた位である。然るに慶長九年、寶永四年、安政元年の大津浪に依りて、廣村は毎度湯淺町以上の大損害を被り、次第に衰微して遂に今日の狀態になつたのだと言はれてゐる。

（其の四の二）

濱口梧陵

銚子醬油山サ號を以て有名な濱口家は南紀廣村の出である。初代儀兵衞元祿年間銚子に出店して醬油釀造業を創め、爾來歷代の努力に依りて次第に其の名聲を高め、海內一を以て稱せられるに至つた、實

に我が梧陵は其の七代の儀兵衞に當り、當主儀兵衞氏は梧陵の孫に當るのである。

梧陵六十六年の生涯は義勇奉公の絵巻物である。世務公益開弘の歴史である。特に安政大津浪に對する彼の獻身的努力は予が最も感銘に堪へざる所である。彼當時三十五歳、適々歸省中彼の災厄に遭つたのである。此の時、彼は村人を逃がす爲めに唯一人最後まで踏止まり、將に其の犧牲とならんとして辛うじて江上川を飛越えて奇蹟的に助かつたのであるが、それにも拘らず、彼は殆ど何等の興奮もなく、濡れ鼠のまゝ再び虎穴に入つて幾多の人命を救助し、續いて飢餓に迫れる千四百餘の村人を救はんが爲暗夜隣村に赴きて里正を說破するなど、平日思をこゝに致し、深謀熟慮の上に、決死逢行の覺悟を有つてゐる人でなければ到底成し難きことを順序能く決行したのである。續いて藁小屋建設、救助米、農具等の寄附、最後に失業の村人に聯業を與へ、兼ねて百年の後の浪災豫防の爲に防浪堤を築造し、それによりて本局を結んだのであるが、純眞な村人が遂に生ける神として彼を祭らんとしたのもさこそと首肯されるのである。（下略）

安政元年海嘯の實況（濱口梧陵『儀兵衞即ち本課の五兵衞　手記）

――此の文『漫談』の中に引用――

嘉永七年（安政元年）十一月四日四つ時强震す。震止みて後直に海岸に馳せ行きて海面を眺むるに、波動く模樣常ならず、海水忽ちに增し、忽ち減ずること六七尺、潮流の衝突は大阜頭の先に當り、黑き高浪を現出す。其の狀實に怖るべし。

傳へ聞く大震の後往々海嘯の襲ひ來るありと。依つて村民一統を警戒し、家財の大半を高所に運ばせ

老幼婦女を氏神八幡境内に立退かしめ、强壯氣丈の者を引連れ再び海邊に至れば、潮の强搖依然として、打ち寄する浪は大阜頭を沒し、碇泊の小舟岩石に觸れ、或は破れ覆るものあるを見る。斯くて夕刻に及び、潮勢反つて其の力を減じ、夜に入つて常に常に復す。然れども民家の十中八九は空屋なるを以て、盜難火災を戒めんが爲、强壯の者三十餘名を三分し、終夜村内或は海邊を巡視せしめ、且つ立退の老幼婦女に粥を分與し、僅かに一夜の糧に充てしむ。

五日　曇天風なく稍暖を覺え、日光朦朧として所謂花曇の空を呈すと雖も、海面は別に異狀もなかりしかば前日立退きたる老幼玆に安堵の思を爲し、各々家に歸り自他の無異を喜び、予が住所を訪ひ前日の勞を謝する者相次ぎ、對話に時を移せり。午後村民二名馳せ來り、井水の非常に減水せるを告ぐ。予之に由りて地異の將に起らん事を懼る。果して七つ時頃（午後四時）に至り大震動あり。其の激烈なる事前日の比に非ず。瓦飛び、壁崩れ、塀倒れ、塵烟空を蓋ふ。遙に西南の天を望めば黑白の妖雲片々たるの間、金光を吐き、恰も異類の者飛行するかと疑はる。暫くにして震動靜まりたれば、直に家族の避難を促し、自ら村内を巡視するの際、西南洋に當りて亙砲の連發するが如き響を爲す數回、依つて歩を海濱に進め、沖を望めば潮勢未だ何等の異變を認めず。唯西北の天特に黯黑の色を帶び、恰も長堤を築きたるが如し。僅かに心氣の安んずるの遑なく、見る〳〵天容黯澹、陰々肅殺の氣天を襲壓するを覺ゆ。是に於て心竊かに唯我獨尊の覺悟を定め、壯者を勵まし、逃げ後るゝ者を扶け、與に難を避けしむる一刹那、怒濤早くも民屋を襲ふと呼ぶものあり。予も疾走の中左の方廣川筋を顧れば、激浪は既に數町の川上に溯り、右方を見れば人家の崩れ流るゝ音悽然として膽を寒からしむ。

瞬時にして潮流半身を沒し、且つ沈み且つ浮び、辛うじて一丘陵に漂着し、背後を眺むれば潮勢に押流さるゝ者あり、或は流材に身を懸せ命を全うする者あり、悲慘の狀見るに忍びず。然れども倉卒の間救助の良策を得ず。一旦八幡境内に退き見れば、幸に難を避けて鼓に集る老若男女、今や悲鳴の聲を揚げて親を尋ね子を搜し、兄弟相呼び、宛も鼎の沸くが如し、各自に就き之を慰むるの遑なく、唯『我れ助りて玆にあり、衆皆應に心を安んずべし。』と大聲に連呼し、去つて家族の避難所に至り身の全きを告ぐ、匆々辭して再び八幡鳥居際に來る頃日全く暮れたり。是に於て松火を焚き壯者十餘人に之を持たしめ、田野の往路を下り、流家の梁柱散亂の中を越え、行々助命者數名に遇へり。尙進まんとするに流材道を塞ぎ、歩行自由ならず。依つて從者に退却を命じ、路傍の稲村に火を放たしむるもの十餘、以て漂流者に其の身を寄せ安全を得るの地を表示す。此の計空しからず、之に頼りて萬死に一生を得たる者少からず。斯くて一本松に引取りし頃轟然として激浪來り、前に火を點ぜし稲村浪に漂ひ流るゝ狀見る者をして轉た天災の恐るべきを感ぜしむ。波濤の襲來前後四回に及ぶと雖も蓋し此の時を以て最とす。

夫より隣村の某寺院に至り、住僧に談じ貯ふる所の米穀を借り入れ、直ちに之を焚きて握飯と爲し、八幡境内其の他各地の避難所に配賦し、僅かに窮民の飢饉に充つ。然れども限りあるの米穀を以て數日を支ふる能はざるを察し、深夜馳せて隣村の里正某を叩き、情を告げて藏米五十石を借り受け、翌日の準備を爲す。

六日 風靜かにして日暖かなり。東方の白むを待ち、八幡鳥居際より全村を望み、被害の度、夜來の想像より稍輕少なるを知れり。然れども漁舟の覆りたるあり、樹木の根より拔かれたるあり、又四面に

は屋材家具の流散するあり。行々人家に近づけば流材の堆積愈々甚だしく、蔦口を杖して其の上を踏み越え、海濱に出で眺むれば、潮水漣波なくして油を流したるが如く、平素に異なれり。而して其の間に漂舟流材は汚物と混じて浮かべるを見る。海岸に沿うて西に行けば、人家は概ね流失又は崩壞して、唯二三の舊態を存するあるのみ。嗟呼幾百の人烟一夕潮流の掃蕩する所となる。人生の悲慘玆に至りて極まれりと謂ふべし。

長嘆未だ半ならず、强震突如として來る。予驚いて倉皇高地に向つて疾走し、遂に被害地の視察を終らずして避難所に歸り、施米焚出の事を見る。抑も八幡境内と隣村の一寺内とを以て避難所に充つると雖も、唯地上に疊を並べ、戸障子を以て之を圍ひたる露宿に過ぎず。老幼の内に漸く膝を支ふるの憂苦離散の實況は人をして斷腸せしむるに餘りあり。殺身濟仁は平素志士の扼腕して講ずる所、誰か惻隱の情を奮發せざるものあらんや。避難所は斯かる體裁にして到底雨露を凌ぐこと能はざるを以て、再び隣村の里正に至り、假小屋建設の件を依頼し、其の承諾を得たり。

朝來震動再三に及び、且つ西南方に當りて地響する事數回、爲に流民は神氣休むるに遑なく、人心動搖して百事緒に就くを得ず、故に此の際專ら人心慰勵に奔走し、傍ら炊事を督す。本夕藩吏某來り談窮民賑濟の事に及ぶ。又效米下附の願書を起草す。此の夜始めて高地に非常番を置き、明日の部署を定め、夫で曉に至る。

七日 町内を普く巡視するに、被害最も甚だしきは前日視察を遂げたる西の町と濱町なれど、中町田町の街路に於ても往々流失家屋を發見せり。而して流失せざるものと雖も概ね大破ならざるなく、處々

に大材或は漁舟の道路を塞げるあり。以て當時波濤の如何に劇烈なりしかを察すべし。

此の日も人心の動搖は尙依然として靜まらず、之に加ふるに海嘯再襲の流言を以てす。此の時に當つて平日剛勇を以て誇る者も怯懦となり、慳貪なる者も寡慾となり、唯目前の天災を嘆ずるのみにして、災後の處理に着手することを知らず、予は此の間にありて東奔西走、或は諭し或は勵ます事前日の如し。然れども利に敏き輩は漸く我に歸り、流失品の拾集に出づる者あり、且つ川邊の村民來りて流失品を盗む者ありとの風說を耳にしたるにより、警保として村の要路に張番を設けたるも微震ある毎に番人の逃れ歸るには殆ど困却せり。

八日　村民少しく危懼の度を減じ、避難所より自宅に歸り、災後の始末に着手せんとする者あり。然れども家屋の全きもの極めて稀にして、柱傾き壁落ち、家財は大半流失して、殆ど己の家たるを辨ずるに苦しめり。就中小民に至りては、住家の破損と共に素より多からざる家財農具を流失し、一朝にして舉家生計の道を失ひ、茫然として爲す所を知らず、玆に漸く離散の念を懷くに至れり。

本日初めて村役員を召集し、舊僕某の家を以て假役所に充て、日夜事務を執り訴を聽き、人夫配布其の他の指揮をなせり。然れども握飯は猶避難所に於て焚出し、予及び村吏と雖も此の握飯を得て僅かに腹を滿せる次第なりき。予は流民救助として玄米二百俵を寄附する者を揭示し、以て有志家に向かつて先例を置けり。是に於て本村並に隣村湯淺の資產家續々米錢を寄附し來り、細民稍愁眉を開き得たり。

本日に至り震動漸く輕微となり、海嘯再來の虞も全く村民の腦裡を去りたるを以て、流遺の物品を拾集する者頓に增加し、自他の別なく之を收得するが爲に、往々其の間に不正の行はるゝを察し、各所に

吏員を派し、强凌弱の害なからん事を圖る。然れども事情素より平日と異なるものあるを以て、臨機の法を用ひ、煩を去り簡に就く、要は平常に歸するにありしなり。事の混雜は是に止まらず、村民所持の米俵は素より、本年年貢米の民家にあるもの、並に本村藏米に至るまで、今回の天災に罹り村內野中に流散するもの多し。依つて第一着手として其の拾集を命じ、藏米は田野各所に之を堆積し、日夜番人を附して之を守り、各自の年貢米を檢査の上封印をなし、各所有主へ交附し、更に之を其の家宅に運ばしむ。

前段既に述ぶるが如く、窮民は概ね家財を流失し、日を經て之を拾集するも十が一も得る所なく、平日些少の蓄藏ありたる者も日々業を失ひ、朝夕炊烟を立つる事能はざるの悲境に陷れり。依つて每日是等の輩を使用して散亂の俵物を拾集せしめ、或は道路を開通せしめ、或は番人とし、僅に糊口の道を與へたり。町內の道路三回の修理掃除に依つて始めて舊に復するを得たり。又拾集の梁柱竹木瓦類は各所に積上げ番號を附し、後日に至り入札を以て賣却し、其の所得金を村民家屋の建坪に割賦して之を分配せり。然れども斯くの如く整理するまで幾多の日子を費したりと知るべし。

被害の概略

一、家屋流失	百二十五軒
一、家屋全潰	十軒
一、家屋半潰	四十六軒
一、汐込大小破損の家屋	百五十八軒
合計	三百三十九軒

一、流　死　人　三十人（男十二人、女十八人）

リギングゴット（ハーン著中の梧陵）

――此の文も亦漫談中にあり、杉村楚人冠の文を引用せるもの――

海嘯の當時に於ける梧陵が獻身的努力は、永く後世に傳ふべき一美譚にして、他の英雄傳中にも容易に見出し難き所なり。されど通信機關の極めて不備なる安政年間に於て、然も南海の邊隅に起れる事として遂に廣く世に傳へらるゝに至らず、折角彼が崇高なる事蹟もあはや將に世人の記憶より逸し去らんとせしが、天茲に世界的の文豪を下して、之を世界に傳へしめぬ。世界的文豪とは誰ぞ、ラフカデオ・ハーン是なり。（中略）彼が千八百九十七年に著したる『佛陀の畑の落穗拾ひ』（Gleanings in Buddah's Field）の最初に『生ける神』(Living God) と題して記せる物語は實に梧陵が海嘯被害民救濟の事を聞き傳へて、彼が獨得の纖麗なる筆に上せたるものなり。

ハーンの『リヴイングゴット』には事實に多少の誤謬あり。例へば儀兵衞を五兵衞と記し、其の死を百年前の事としたるが如き是なり。殊に此の物語を『リヴイングゴット』と題したるは生前神に祀られたりと云へる事實に依りたるものなるべけれど、之も事實に非らざる事は既に說けり。さりながら、當時彼の爲に救はれたる村民が、敬慕の餘り『濱口大明神』と呼びたるは確かなる事實にして、梧陵は社殿の中に收めてこそ祀られざれ、『生ける神』として神の如く尊崇せられたる事は事實なれば、之を此の物語に題せるは相應しからずといふべからず。ハーンの名著によりて不朽なるべき梧陵の名を斯く名づけずして何とか言はんや。

叙して斯くハーンの著に及べば、如何にしても茲に小說的一事實譚の逸すべからざるものあり。梧陵の息濱口擔菅て英國に留學中、一夕倫敦の日本協會に於て『日本の女性』に關する講演を試みたることあり。演題が演題なりければや、此の日は聽衆中に婦人の數常にもまして多かりしが、講演喝采裡に終り、例の通り隨意討論に移りし時、講演に關し質問百出せし中に、一婦人會員の質問と之に對する濱口氏の答辯とは、當夜の講演會に講演以外の一色彩を加へ正に滿座の聽衆をして一種言ふべからざる感興を催さしめたり。婦人は名をステラ・ラ・ロレッツ孃といふ。彼女は極めて愼ましき態度を以て講演者に向ひ、先づ自分は當夜の講演の主題に對しては何等論議すべき能力なき事を斷りたる後、他の人々が此の耳新しき日本の女性なるものゝ上に想を走せつゝありし間に、自分は獨り講演者の名が『ハマグチ』なる事に無限の興趣を感じ居たりと述べたり。斯く語りて後、彼女は更に聽衆一同の方に向き直り、ハーンの著『佛陀の畑の落穗拾ひ』の中に『生ける神』と題せる美譚ありしを說き、件の生ける神とは、曾て紀州の沿岸に海嘯の襲ひ來れる時、身を以て村民を救ひたりと云ふ濱口五兵衞の事跡なる由を語り、さて最後に曰く『自分はこの書を讀みて以來五兵衞の俠勇に推服すること多年、未だ一日も五兵衞の名を忘れたることなし。現に自分の家に藏する日本畫中の可憐なる一兒を戲れに名づけて『小濱口』とし、常に我が家に來り訪ふ者も亦いつしか之を小濱口と稱するに至れる位なり。斯くまで『ハマグチ』の名を慕へる自分が、今講演者の名のハマグチなるを見て、豈に無限の感懷なからんや。敢て問ふ、講演者のハマグチと濱口五兵衞とその間に何等かの關係ありや』と。言ひ了つて彼女が座に復せる時、衆目は

期せずして濱口氏の身に集れり。彼は感極まつて言ふ所を知らず。乃ち當日の司會者アーサー・ディオシー氏は、講演者と少時問答の末『今夕の講演者こそ、正しく「生ける神」の主人公濱口五兵衞の實子なれ』と答へたり。斯くと聞きたるロレッツ嬢及び並居る人々の驚は如何ばかりなりしぞ。湧き返る拍手と歡呼とは忽ち場の四隅を壓して起り、知る知らぬ孰れも其の奇遇を言はざるは無かりきといふ。是れ千九百三年五月十三日の事なり。

指導精神

出所は小泉八雲の『佛土の落穗』で、本課は其の第一章"生神"から取材されて居る。原文は作柄こそ異つて居るが、流石に歐文らしい特異の味を見せて居る。

彼を有名にした事件の起つた時、彼は老人であつた。彼はその村の最も有力なる住民であつた。長い間村長であつた。そして尊敬され又愛されてゐた。人々はいつも彼をおぢいさんと呼んだ。しかし、その土地の最も富んだ人であつたので、時々公けに長者と呼ばれてゐた。彼は小さい農夫に爲になるやうな事を云つてきかせ、喧嘩の仲裁をし、必要な時には金をたて替へ、そして最もよい條件で彼等のために米を賣捌いてやるやうな事をいつもしてゐた。

之は五兵衞の素性、讀本には之を莊屋さんと意譯してある。八雲は更に彼の家の所在を

濱口の大きな草葺きの母屋（オモヤ）は、灣を見下す小さい高臺の端に建つてゐた。重に米をつくつてあるこの高臺は、森のしげつた山に三方圍まれてゐた。この土地は外に向いた端の方から、水際までゐ

ぐり取つたやうに大きな綠の凹面になつて傾斜してゐた。そして一哩の四分の三程のこの傾斜の全部は、海面から見ると狹い白いうねりくねつた道、一條の山道によつて中央を分けられた綠の大きな階段のやうに見えた。本當の村になつて居る九十の草葺きの家と一つの神社が屈曲した灣に沿うて立つてゐた。そして外の家は長者の家へ通ずるその狹い坂路の兩側にしばらく續いて散在してゐた。

と目に見るやうに描いて居る。惜むらくはそれが日本の何所であつたか、原文だけでは想像すべくも無いが、八雲が五兵衞と傳へたのは恐らく濱口梧陵の事であらう。梧陵は紀州有田郡廣村の人、名は成則、字は公興、通稱儀兵衞、梧陵は其の號である。（別項參照）梧陵が海嘯に際し私財を投じて村民を賑恤したのは安政五年十一月の事、彼は鄕村に盡したのみで無く晩年は政海にも活躍し、明治十八年四月二十日外地視察の途アメリカの紐育に歿した。八雲は之を傳聞し其の犧牲的精神に共鳴したものであらう。

八雲は人も知る如くもとラフカディオ・ヘルンと言つたイギリス人で、ギリシャのサンタ・マウラ島に生れ、母がギリシャ人であつた關係からギリシャの事物、續いて東洋の事物に同情を持つて居た。彼が世界に文豪の名を馳せたのは日本に關する諸作で、『知られぬ日本の面影』『東の國から』『佛土の落穗』『靈の日本』等がそれである。彼は洞察と同情に富んだ文人であつた上、英文學に於ては有數の名文家であつた。其の魅力ある文章は多くの日本贔負を作つたとさへ言はれて居る。斯くて彼は日本を愛好する餘り、遂に歸化して名を小泉八雲と改め、純然たる日本人と成つて一生を終つた。彼の作品は小泉八雲全集十八卷の中に殆ど網羅されて居るが、其の初期のものは印象記・旅行記の如き客觀的のものが多く、漸次主觀的・瞑想的と

成るに連れ、題材を日本に取つた隨筆や物語が多く成つて居る。本課も亦佛教研究者としての彼が、輪廻の說と進化論とを結合して彼自身の哲學を作り出した頃の作品 Living God に據つて居る。

その地震が終ると、濱口の鋭い思慮深い眼は、氣遣はしさうに村の方へ向いた。或一定の場所や物を見つめて居る人の注意が、全く自覺して見てゐない方へ――明かな視野以外にある無意識な知覺の朦朧たる範圍に於てたゞ少し變な感じのする方へ、不意に氣を取られる事がよくある。そんな風に濱口は沖の方に何かつねならぬ事のあるのに氣がついた。立ち上つて海を見た。海は全く不意に暗くなつてそして變であつた。風と逆行して居るやうであつた。陸から向うへ退いて走つてゐた。之は津波の豫感、

濱口五兵衞彼自身もこんな物を見た事はかつてなかつた。しかし彼の父の父から幼少の折に聞いた事を覺えてゐた、そして彼は海岸の凡ての傳說を知つてゐた。彼には海がどうなるか分つてゐた。多分彼は村へ使をやるのに要る時間、山のお寺の僧に大きな釣鐘を鳴らして貰ふために要る時間を考へてゐたのであらう。……しかし濱口の考へたらしい事を話す方が、濱口の考へた時間よりもはるかに長くかゝるであらう。彼は只孫に向つて言つた。

『忠(ただ)、すぐ大急ぎだ。……たいまつをつけて來い。』

たいまつは嵐の夜に使ふために、そして又或神事の祭禮に使ふために多くの海邊の家にしまつてある。子供はすぐにたいまつをつけた、そして老人はそれをもつて野原へ急いだ、そこには彼の大部分の投資とも言ふべき數百の稲叢があつて運ばれるばかりになつてゐた。坂の端に一番近い稲叢

に近づいて老いた足で急げるだけ急いで交る交るたいまつをつけ始めた。日に乾いた藁はぱちぱちやうに燃えた。火勢のあほる海風はその稲を岡の方へ吹き上げた、そしてまもなく一叢又一叢、藁は炎になつて天に冲する烟の幾條かを上げたが、それが相集り交つて一つの大きな雲の渦となつた。忠は驚きかつ恐れて祖父のあとから叫びながら走つた。

『お祖父さん、どうして、お祖父さん、どうして、――どうして。』

しかし濱口は答へなかつた。說明してゐる暇がなかつた、たゞ危難に瀕してゐる四百人の生命の事ばかり考へてゐた。子供はしばらく稲の燃えて居るのを興奮して見てゐたが、突然泣き出した、そしてお祖父さんは氣が狂つたと信じてうちへ駈け込んだ。

之は決意の瞬間である。斯くて此の話は漸次クライマックスに入るのであるが、(讀本には孫が省かれ五兵衞一人に成つて居る) 五兵衞の壯烈悲壯な犧牲的精神が涙ぐましい計りに盛上つて居る。入雲は最後に

困難の時期は長かつた、その當時一地方と他地方との間に敏速な交通の方法はなく、そして必要な助けは遠くから送られねばならなかつたからである。しかしもつと時節が好くなるに隨つて人々は濱口五兵衞に對する彼等の負債を忘れなかつた。彼等は彼を富有にする事はできなかつた、例へ出來ても濱口は彼等にさうする事を許さなかつたであらう。その上物品を贈る事は彼に對する彼等の崇敬の念を表すには不足であつたらう、彼の心中の靈魂は神のやうであると信じたからであつた。そこで彼等は彼を神と宣告してその後彼を濱口大明神と呼んだ、それよりも偉大なる名譽を與へられないと考へたからである、――又事實如何なる國にあつても、もつと偉大なる名譽を與へる事は

できないのである。そして彼等が村を再び建てた時、彼等は彼の靈魂のために神社を建てた、そしてその前面の上部に金の漢字で彼の名を書いた札を掲げた、そして祈と供物を以てそこに彼を禮拜した。それについて彼はどんな感じがしたか私には分らない、私の只知つて居る事は下のやうで彼の靈魂は神社に祭られてゐたが、彼は子供及び子供の子供と共に、以前の通り人間らしく又質素に山の上の古い草葺きの家に引續き住した事ある。彼が死んでから百年以上にもなる、しかし彼の神社はやはり存在してゐる、そして人々は恐怖又は困厄の時に彼等を助けてくれるやうに、善い老農夫の靈魂に今も祈を捧げると言ふ事である。

と、此の話の着意の存する所を明かにし、さうして彼の目差す佛教思想の核心に觸て居る。

私は濱口の肉體が一方にあつて魂が又別の方にある事をどうして農夫達が合理的に想像するのであらうか、それを私に說明して呉れるやうに、友人の或日本の哲學者に賴んだ。それから私は、濱口の生前に農夫達が禮拜したのは、彼の靈魂の一つであつたか、それとも彼等の禮拜を受けるために或特別の魂がそれ以外の魂と離れて出ると想像したのであらうかと尋ねた。

『農夫達は』私の友人は答へた、『人の心や魂は、生前でも、同時に澤山の場所に居られる物と考へて居る。……勿論こんな考は、魂に關する西洋の考と全く違つて居る。』

『その方がもつと合理的でせうか。』　私はいたづらに尋ねて見た。

『さうですね。』　彼は佛教徒らしい微笑を以て答へた、

『もし私共が凡ての心の統一と言ふ說を正しいとして見れば、日本の農夫の考には、少くとも或

かすかな眞理を含んで居るらしい。あなたの西洋風の魂に關する考については、さうは言へませんね。』

と彼が東洋研究の片鱗を窺はせて居る。本課と對照して文意のある所を付度すべきであらう。取拔は勿論讀本に卽し、事實を事實として有るが儘に指導すべきは言ふ迄もない。從つて五兵衞は五兵衞、莊屋は莊屋、何處迄も讀本に忠實になるべきは勿論の事、其の間五兵衞が儀兵衞であり、又時代が相違して居る事等は一切指導者側の胸に疊んで、苟も考證がましき事は絕對に避くべきである。

國語で大切な事は教材の內面に閃いて居る趣味や感興は言ふに及ばず、言葉や言表し方等である。內容は何處迄も方便に過ぎない。此の大道を失して教材に示された以外の事を呶々しく說明したり、甚だしきに至つては教材を其方退けにして一見國史か修身でも授ける樣な考で數衍附說を試みるのは、脫線も甚だしいものと言はねばならぬ。是等は何れも在來の傳統で國語に依つて總ての知識を授けて居た寺小屋時代の遺風が今日も尙完全に取去られて居ない證據である。昔の讀み書き算盤と言つた單純な時代では讀書に依つて國史や修身や地理・理科等を授けたものであるが、今日では內容本位のものにはそれ相當の教科が分立して居る。國史には國史、地理には地理とチャンと分れて居る。特に國語が夫等の仕事迄背負込まねばならぬ理由はない。讀本は讀本として獨自の使命に邁進すればそれで良い。借家が榮えて母屋が倒れる譬もある。內容に深入して教材以外の事を附加へる必要は絕對に無い。讀本も此の見地から出來て居る。教へねばならぬこと、知らせねばならぬ事はチャンと讀本の中に書いてある。讀本以外の事を附加へねばならぬ場合は特殊の教材以外には先づ無いと心得へて差支は無い。無論內容を輕視して宜いとは言はない。教へる教師としてはそれ

相當の調査も必要であらうし、研究も大切であらう。內容に對するシッカリした見識が無いと、其の教材を生かして取扱ふ事が出來ない。だがそれは何處迄も指導者丈の事で、數衍附說を試みる爲では無い。教材を取扱ふ際の背後の力として必要だと言ふに過ぎない。指導者は宜しく此の精神を體して、國語の本來の使命を沒却せぬ用意が肝要であらう。

指導形態

指導上の認識點

1 本課の指導標的は不意の天災に對して五兵衞の取つた機智の素晴しさと、其の人類愛・民衆愛に强く感動せしめる事にあるが、一方天變・地異の何時見舞ふか知れぬ此の地上生活に於いて、非常の場合に處する覺悟を不斷に持たせて置く事も頗る大切である。

2 文が一つの主題を中心に一字一句がぴつたりと統一し、非常の迫力を持つた純文學的な作品である事に氣附かせ、其の構想の雄大と筆致の絕妙を極めた點に着目させると共に文學的修錬に資するの用意が肝要であらう。

3 五兵衞の不安・津波の物凄い情態・村民の行動・感激等、何れの場面も描寫が眞に迫つて居る點を反覆玩味し、緩方指導とも連絡を保ち緩文乃至表現力の啓培に資する事を忘れてはならぬ。

4 本課は大體四時間見當で指導を完了するやう立案して欲しい。

第一次指導

1 題目の指導。
▽板書して讀ませ題意を確める程度に止めて置く。

2 先づ投渡して全課を自由に讀誦させる。
▽感想其の他は記帳させて置く。

3 話合。
▽第一印象を言はせて見る。

4 再讀させて話の大體を摑ませる。
▽どんな話か、何時頃の話か、何う思ふか、何處に感心したか等。

5 新出文字の指導。
▽字數も少いから其の都度板書して指導する
救　沒　薄

6 難語句の指導。
▽質問させて隨所に指導する。
たゞ事　つぶやき　地鳴り　經驗　無氣味　心配げ　よひ祭　津波　猶豫　松明　いきなり　尖神したやうに　天をこがす　早鐘　山手　高臺　もどかしく　老幼男女　たそがれ　百雷　ゑぐり取る　無言のまゝ　ひざまづく

7 反覆讀誦させる。
一文の迫力に注意させて。

8 指名讀。
▽適宜に句切つて、何人かに。

9 文意を探らせる。
▽摑んだ文意は記帳させて置く。

10 ノートを整理して提出さる。

第二次指導

1 一度靜かに通讀させる。

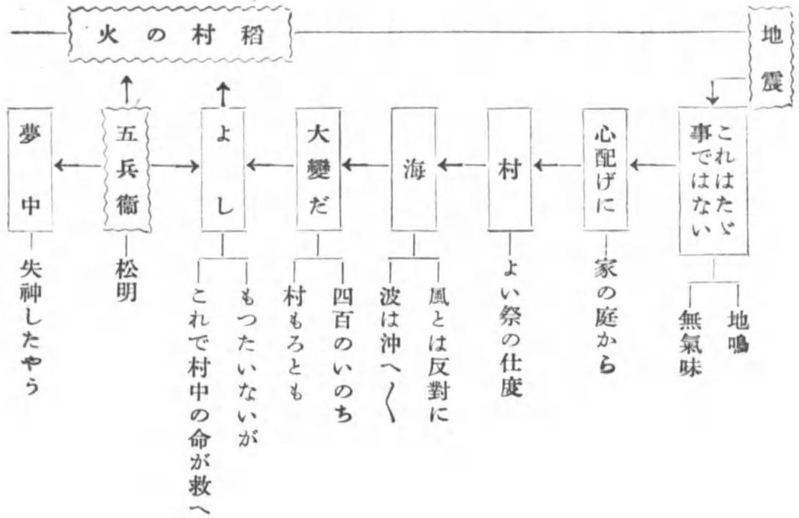
2 指名讀。
▽適宜に句切つて、何人かに。

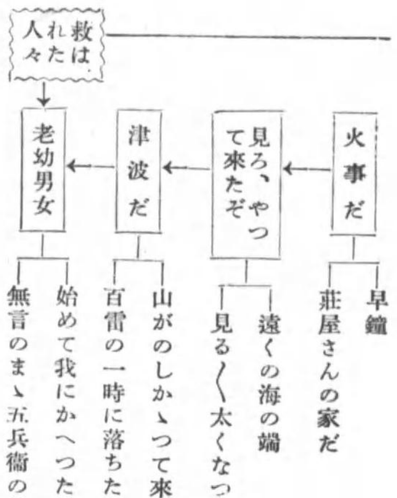
3 範讀。
▽文の觀點に注意させて。

4 輪讀。
▽座席の順に。

5 話合。
▽豫想した文意を中心に。

6 逐次研究。
▽頃合を見て板書でまとめる。





7　書取。
▽板書事項を文圖の儘に書取らせる。
文と挿畫を照合させる。
8　▽文の何處を畫にしたものか、讀本に何う出て居るか等。
9　低音讀。
▽反覆讀誦させる。
10　ノートを纏めて提出させる。

第三次指導

1　指名讀。
▽中・劣生を主として。
2　範讀。
感情の起伏や文の迫力に注意させて。
3　追範讀。
▽一回範讀してから追讀させる。
4　文意の確認。
▽表現面を辿つて例證させる。

5　話方練習。
　▽劇的に。
8　文の感觸を生かして脚本化させる。
　▽學級總掛りで。
7　劇化實演。
　▽背景其の他を工夫させて。
8　朗讀練習。

テスト問題

一、次の語句に振假名を附けなさい。

1 經驗　2 無氣味　3 津波　4 猶豫　5 松明
6 夢中　7 早鐘　8 莊屋　9 高臺　10 老幼男女

二、次の片假名を漢字に直しなさい。

1 ヂシン　2 シンパイ　3 イツカウ　4 スクへる　5 タイヘン
6 ヒジヤウ　7 ウスグラく　8 ゼツペキ　9 トツシン　10 ヒトスヂ

三、次の漢字を使つて熟語を作りなさい。

1 氣　2 豐　3 對　4 刻　5 若
6 岩　7 押　8 聲　9 變　10 自

9　視寫・聽寫練習。
10　暗誦・暗寫練習。
11　新出文字の書取。
12　語句の應用練習。
13　テスト。

第十一　朝鮮の田舍

我が半島の田園風景を客觀的に描いた純叙景文である。(一)の秋も(二)の冬の夜も共に田舍の素朴な生活や風物を描寫し、隨所に豐な詩情が躍つて居る。それが又何と言ふ平和な空氣であらう。內地人と半島人との別け隔て等は遠くに吹飛んで、雁や蜻蛉の童謠が如何にも能く其の融和した狀態を象徵化して居る。

感情的には內地と少しも變りに無いが、半島獨特の地方色は到る處に閃いて居て、詩情滴々汲めども盡きぬ味がある。ボコンボコンと鳴る水瓶の音、ホーホーと鳴く梟の聲、更に印象鮮かなのは叺織る音に交つて聞えるトンカラトンカラの砧打つ音、それらが入亂れて奏でる交響樂に冬の夜は和かた更けて行く。此の邊地方色も可成骨折つて出して有るが、それよりも一般的な朝鮮の平和な田舍家の景が眼前に浮び出る。『織りませうおとうさん。』と元氣に答へる息子の聲こそ、現代半島人の意氣と氣慨を代表するものではあるまいか。

挿畫の印象と其の說明

六十頁は半島の田園風景を背景に萩の籬で蜻蛉を追ふ半島生れの貞章と內地生れの一郎が、駐在所裏の高みで仲好く遊んで居る。二人の影は長く尾を曳いて、遠山には早くも夕靄が込めて居る。土饅頭に似た民家からは半島特有の溫突の煙が漂ひ、ひよろ長いポプラの木は遠近にぼんやりと見えて平和の氣が全幅に漲つて居る。

貞童が着た朝鮮服の上衣はチョグリ、ズボンはバーチと言ひ、半島兒童慣用の風俗である。靴は最近内地から移入されるゴムの淺靴で、之も朝鮮特有の型である。普通の民家は挿畫で見るやうに屋根の勾配が極めて淺く、すべて草葺のお椀を伏せたやうな平家である。紳商の店舗か貴族の邸宅で無い限り、瓦屋根や二階建の家は普通の民家に殆ど見當らない。

六十四頁は水瓶を運ぶ婦人の風俗である。朝鮮婦人の服裝は男子と違つて、元時代の服制が今尙襲用されて居る。上衣(チョグリ)の胸の合せ目には幅の廣い長紐を附け、恰好良く結んで殘りを垂下するのは男女共通であるが、色調は男子の黑・鼠・白等に對して婦人は原色系統の薄色を喜ぶ。スカート樣のものはチマーと言ひ、襞の無いのが常用、細かな縱襞のあるのは儀式用や他所行に用ひる。チマーの下にズボンの樣なのが見えるのは、男子と同じ袴下(バーチー)である。内地でも地方に依つて股引の事をパッチと言ふのは、此のバーチーの風が移入して轉訛したものであらう。尙物を頭上に載せて運ぶ婦人風俗は、内地でも決して珍しく無い。

六十六頁の挿畫は家庭に於ける婦人風俗で、母親が娘相手に今頻と砧を打つて居る。手に持つて居るのは砧を打つ棒で、廣げた布の下の臺が砧である。娘の右側にある一對の棒は二人が向合つて打つ際に娘が使用する棒であらう。砧打は内地にも古くから行はれ、明曆の頃刊行された風俗圖會を見ても殆ど之と大差が無い。白樂天の〝長安一片月、萬戸擣レ衣聲、秋風吹不レ盡〟や許六の〝燈明の灯をかきたてゝ砧かな〟の句など、古來砧を題材とした詩歌は支那にも内地にも頗る多く、砧打は東洋固有の風俗と言つて良い。唯あぐら

は一見無作法に思はれるが、之は半島古來の慣習でお客の前でも平氣である。

發音アクセント

ダイジュウイチ＝テウセンノ（チョー）キナカ（イ）＝

アキノソラハジツニタカイ（ア）　コンジャウノオホゾラ（ヨー）（オ）　モロコシノハ

チュウザイショノニハ（ア）　イチラウトテイドウ（ロー）（ヱ×ドー）　ハギノハウキ（ハー）＊（イ×ホー）　マメバタケ

トンボ—トンボ　アツチヘイケバヂゴク（ヱ）＊　コッチヘクレバゴクラク（ヱ）　ヲンドル

ボカリボカリ　ワラヤネ　タウガラシ（トー）＊　ボブラ　アカシヤ

イチバガヘリノテウセンウマ（ヱ）（チョー）（ン）　ガンノムレ　ガン—ガン—ワタレ

オホキナガンハサキニ（オ）＊（ア）　チヒサナガン（イ）＊　ナカヨクワタレ

コホリツイタヤウニシテ（オ）（ヨー）　キドバタ　ウルシノキ　ヌウット

ボコン—ボコン　ホネミ　ヲンドルベヤ＊　ウスグライランプ　マモノ

イタヅラズキ　ムニャムニャ　フクロフノナクコヱ　ムスコ
フタリノデガキヨウニウゴク　キヌタ　トントテウシヲトッタ
トンカラトンカラ

【注　意】

（1）又　ホオキ（平）

文字語句

新出文字

鮮　萩

讀替文字

田舍　葉（新出は卷五　八）　息子

語句と其の解說

紺青　鮮青色の顏料。黃血鹽に鐵鹽を作用させて製する。天然に產するものを岩紺青と云ふ。　**もろこし**　もろこしきびの略。禾本科蜀黍屬の一年生草本、高さ二三米に達す。葉は大形、披針形を呈し、平行脈を有す。花は小穗花序に集まり、此の花序更に大なる圓錐花序を作る。種子の粉末を餅等

に製して食用とする。朝鮮では內地の米・麥の如く常用に供する。たうきび。　**駐在所**　巡査が其の受持區域內に駐在して事務を取扱ふ所。朝鮮では特に警備の任に當り、半島民の善導に努める。

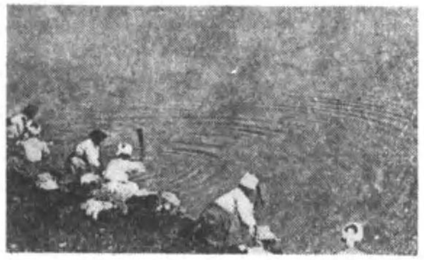
豆畠　大豆畠である。朝鮮から滿洲に掛けて大豆畠が多い。　**溫突**　床の下に土で造つた坑を通じ之に火氣を送つて暖を取るもの。朝鮮特有の暖房裝置である。　**瓦屋根**　朝鮮の都會地は最早內地と變りは無いが、唯町の背後に藁屋根の小さな民家が群を成して居る。釜山・大邱・大田と、京城に赴く間に、汽車の通る山麓や河岸や平野に土饅頭のやうな藁葺民家が、山村水廓の趣を見せる。

たうがらし　茄科蕃椒屬の一年生草本。莖の高さ七八十センチに達し、葉は卵形又は長卵形で尖り、長い葉柄に依つて互生する。果實は普通細長くて紅熟し、辛味を有する。品種甚だ多く果實を辛味料葉を食用に供する。內地でも廣く栽培されるが、朝鮮には調味用として特に愛用される。蓋し漬物と唐辛（蕃椒）は朝鮮食の特色で、副食物には好んで唐辛・蒜等を加味し漬物にも入れて調味する。半島人の刺戟物を嗜むは全く驚く程で、內地人が思はず涙を誘ふほど利いて居る。　**ポプラ**　既出。

アカシヤ　既出。　**市場歸り**　朝鮮の田舍では、食料以外の必要品は一切市場が開かれ、其處で買求める。月五六回、日歸の範圍で買出は大抵男子が多い。朝鮮馬は其の際大切な役目をする。

朝鮮馬　既出。　**雁**　カリに同じ。游禽類、扁嘴族の一種。體長六十センチ許、嘴は頭長に等しく、末端のみ硬い。背は褐色で翼は帶青色である。秋來りて夏去る。我が國は近年殆ど其の姿を見ないが、朝鮮には今尙三々五々列を成して飛んで居る。　**うるしの木**　漆樹科、漆屬の落葉喬木。幹の高さ十米、葉は羽狀複葉、六月頃黃色小形の花を開き、單性雌雄異株、圓錐花序に排列する。果實

は扁圓形の小葉果で、十月頃黄熟する。東部亞細亞の原產で、我が國各地に栽培される。樹皮を傷けて漆汁を採り果實からは蠟を搾り取り蠟燭を製する。材も亦建築用に供せられる。　**水汲み**（ミクミ）　朝鮮の田舍を旅行して常に目を引くものは白衣の女が大きな水甕を頭上に載せて悠々と歩いて居る光景である。彼の谷此の谷の草道を分けて三々五々重い甕を輕々と體で調子を取り歸路につく情景は全く牧歌的と形容したい程である。水の少い朝鮮では水汲と洗濯は婦女子の仕事の大部分を占めて居る。



半島婦人の洗濯

溫突部屋（ワンドルベヤ）　溫突で暖房裝置を施した室。廣さは四疊半かつがつであるが、土で塗り固めた一見穴倉の如き感じがする。此の中に這入れば何んな寒い日でも、コロリと轉がつて寒さを知らない。　**魔物**（マモノ）　魔性のもの。ばけもの。へんげ。妖怪。　**ふくろふ**　旣出。　**かます**　藁席で作つた袋。穀・菜・粉類等を入れる。かまけ。此處の五枚目六枚目は叺を拵へる藁席を言つたものであらう。　**器用**（キヨウ）　手先の技に巧なこと。上手。てきき。　**きぬた**　槌で布帛を打つ際に用ひる木又は石の臺。又それを打つこと。砧の音は哀愁を唆るものである。四季を通じて白色を好む半島人の風習では、洗濯は婦人の大切な務、砧で打ち艶を出し糊を附けて縫ふ。彼等は殆どそれに忙殺される。遠近かれ漏れ聞えるトン、トンカラトンカラの砧打つ音こそ、全く哀愁其の物である。砧の諧調は我が國でも古來砧拍子と唱へ、芝居の舞臺でも囃子の一種として田家の場面などに用ひる。

指導精神

本課は半島の田園情調を描いたもので、からりと晴れた秋のひと日と星影氷る冬のひと夜を按排して、半島民の和かな生活氣分を感興深く描き出して居る。（一）（二）を通じて兒童本位に其の生活の有るが儘を情味豐かに物した點に異色がある。

朝鮮は內地より晝夜及び季節的氣溫の變化が大で、日中と夜間の較差が大きく、寒暑共に酷烈である。氣候の特徴は一般に大陸的で、冬季は頗る低溫である。南方ほど冬の氣溫は高く、釜山附近では內地と殆ど大差は無いが、黃海に面した西岸は西北大陸內部の低溫な高氣壓の地域から流出する氣流に依り氣溫の低下が起る。此の繼續日數から三寒四溫と言ふ朝鮮特有の變化を見せるのである。氣溫の低下は天氣の晴朗を伴ひ、上昇は降雪を催す事は內地より著しい。半島の形が南北に延長して緯度十度に誇る事は、其の兩端に於ける氣溫の差異大なる事を意味するのみならず、之に加ふるに北部の地勢が一般に高峻であるから、此の趨勢は更に助長され、等溫線の勾配は急峻にして、北に向ひ氣溫の激減を見せて居る。之と同時に脊梁山脈が東岸に偏つて走る事は、其の兩側の廣い斜面が支那大陸から東南に向ふ氣流を受ける事に成つて、半島の大部分が大陸的氣候に支配される。唯對馬海峽に面する南邊のみは北に山嶽を負ひ南は海に臨み、黑潮支流の日本海に入る通路に當つて居るから、東西兩邊と頗る趣を異にし、冬季の氣溫高く雨量も亦最も多い。冬季大邱から京釜線で秋風嶺を北に越えると大陸的氣候と成り、氣溫は急降を感ずる。一晝夜間の氣溫の變化も亦甚しく、春秋卽ち四五月及び九十月頃に於ける日中は夏に等しい高溫で、夜間の低溫な事も大陸的氣溫の特色

である。一年を通じて雲少く晴天多く、空氣は澄明で日射が旺盛である。從つて內地に反して濕氣が少いから、夏は氣溫が上昇しても蒸熱を感ぜず、冬季寒氣は嚴しくとも惡寒を催さない。

半島の田園も內地と變りは無いが、溫突の煙、砧打つ音、空には雁が三々五々列を成して飛ぶ。叙景が叙景に墮せず、兒童の生活感を中心に景情併せ叙した邊に本課の觀點がある。

指導形態

指導上の認識點

1　前卷の『京城へ』は半島の車窓風景や同車の半島人との溫い交驩の情景等を讀取らせるのが主眼で有つたが、本課は更に深く朝鮮の田園情調を內觀させると共に、內鮮融和の美しい場面を童心豐かに描き出して居る。從つて指導の標的も亦此の文の感觸を基調とし、半島の風色に直接させると同時に精神的に內鮮融和の實を擧げる點にあらねばならぬ。

2　取扱としては朝鮮らしい情景や詩味豐かな田園情調と、冴え切つた表現手法との相關に依る交響樂に陶醉させ、文の醍醐味を滿喫させる用意が肝要である。卽ち情味豐かな朝鮮古謠を味ひ、全然內地化した半島民の眞劍な生活態度を讀取らせる事を忘れてはならぬ。

3　本課は大體四時間見當で指導を完了するやう立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1　題目の指導。
　▽既習「京城へ」と連絡付ける事に依つて學習動機を喚起する。

2　全課の自由學習
　▽通讀して得た印象や情感を胸に祕め、自力の限りを盡して讀み深めさせる。

3　讀後の感想を發表させる。

　▽(一)では何う？　(二)では何う？

4　新出文字の指導。
　▽其の都度板書して指導する。
　鮮　田舍　萩　葉　息子

5　難語句の指導。
　▽質問を待つて隨所に指導する。
　紺青　もろこしの葉　駐在所　地獄　極樂　溫突　たうがらし　ポプラ　アカシヤ　朝鮮馬　雁　うるしの木　骨身　溫突部屋　魔物　いたづら　むにやむにや　息子　かます　器用　きぬた

6　反覆讀誦させる。
　▽風物や情景等に注意させて。

7　指名讀。
　▽適宜に句切つて、輪讀式に。

8　範讀。
　▽一回範讀してから追讀させる。

9　話合。
　▽讀後の印象を中心に。

10　ゆつくり默讀させ文意を摑ませて見る。
　▽摑んだ文意は記帳させて置く。

11　ノートを纏めて提出させる。

第二次指導

1　靜かに反覆通讀させる。

2　質疑應答
　▽懇談的に。

3　指名讀。
　▽一氣に全課を讀破させる。

4　話合。
　▽文意を中心に。

5　逐次研究。
　▽頃合を見て板書で纏める。

秋

- 天と地
  - 紺青の空……
  - 淡い月……
  - 傾く日……
  - もろこしの葉……
  - ゆする秋風……
  - （秋らしい）
- 駐在所の庭
  - 一郎と貞童……
  - 豆畠……
  - 豆がかさかさ……
  - とんぼ、とんぼ……
  - 温突の煙……
  - （朝鮮らしい）
- あたりの景色
  - 藁屋根……
  - 眞赤なたうがらし……
  - 高くのびたポプラ……
  - 茂つたアカシヤ……
  - 紅葉した櫻……
  - （朝鮮だな）
- 一郎と貞童
  - 豆の葉の虫かご……
  - 『生かしておかうや。』
  - とんぼ……
  - 『動かないよ。』
  - 市場歸りの朝鮮馬……
  - 雁の群が渡る……
  - 歌　雁、雁わたれ……
  - （子供だなあ）

冬の夜

- 骨身にしみる寒さ
  - 薄青い夜空……
  - 氷りついたやうな星……
  - ぬうつと立つたうるしの木……
  - 水汲女……
  - 水がめのゆれる音……
  - （朝鮮だな）
- 温突部屋の中
  - 薄暗いランプ……
  - 孫を寢かすおぢいさん……
  - お話……
  - 『魔物があのけやきにゐた。』
  - 『それがどうした。』
  - ふくろふの鳴く聲……
  - （暖かさう）
- 別な部屋
  - 息子を相手にかますを織る父……
  - 『どうだ、六枚織れるか。』
  - 『織りませう、おとうさん。』
  - そばでは母が娘を相手にきぬたを打つ……
  - 調子のよいきぬたの音……
  - （よく働くなあ）

6　書取。
▽板書の文圖を敷衍して書取らせる。

7　默讀。
▽場面の情景を想像に描かせて。

8　話合。
▽文意を中心に。

9　挿畫と文とを照合させる。
▽何處を畫にしたものか、讀本に何う出て居

るか等。

10 ノートを整理して提出させる。

▽特に(6)の作業に注意して檢閲する。

第三次指導

1 反覆通讀させる。

2 輪讀。

▽適宜に句切つて、座席順に。

3 範讀。

▽觀點や讀調子に注意を與へて追讀させる。

4 鑑賞。

▽文の個性や美點を味はせ、特に朝鮮らしい田園情調を味到させる。

5 書取。

▽各自に好きな箇所を選んで書取らせる。

6 讀合。

▽鑑賞的に。

7 內地の農村と比較させる。

▽自然觀照と生活觀照の兩面に互つて。

8 朗讀練習。

9 視寫・聽寫練習。

10 暗誦・暗寫練習。

11 新出文字の書取。

12 語句の應用練習。

13 テスト。

テスト問題

一、次の文を讀んで後の問に答へなさい。

別な部屋では、息子を相手に父がかますを織つてゐる。

「これが五枚目だつたな。」

「はい、五枚目です。」

「どうだ、六枚織れるか。」

「織りませう、おとうさん。」

息子が元氣に答へる。話しながらも、二人の手が器用に動く。そばでは母が娘を相手にきぬたを打つてゐる。

「これだけ、たゝいてしまはう。」

母が棒を取つて、どんと調子を取つた、とんからとんから、調子のよい音が流れ出した。

(1) かますを織つてゐるのは誰と誰か。

(2) 「織りませう、お父さん。」と言つた息子の言葉でどんな事がわかるか。

(3) きぬたとはどんなものか。

(4) きぬたを打つてゐるのは誰と誰か。

(5) こゝを讀んで思つた事や感じた事を箇條書にして示せ。

二、次の□の中に適當の漢字を入れなさい。

(1) 紺□の大空には畫の月が□く出て、日は西に□きかけてゐる。

(2) どの家も溫突をたき出したと見えて、□色の煙が□中にたゞよつてゐる。其の□の中にぼかりぼかり蘿□□が浮んで見える。

(3) 孫が何度きいても、おぢいさんは口をむにやむにやさせて、中々□へない。ふくろふの□く聲が□える。

三、次の（　）の中に反對語を入れなさい。

秋（　）　晝（　）　取（　）

浮（　）　歸（　）　地獄（　）

古（　）　息子（　）　寒（　）　暗（　）

第十二　水彩畫

簡勁で齒切の好い口語詩に水彩畫らしい淡彩的色調が抒情豐かに象徴されて居る。一枚の水彩畫に絡まる夏の日の思出が、絹糸のやうに虹のやうに綾と成つて繰廣げられて居る。非常に單純な形式の中に美しい友情が繪筆の跡に縺れて、曖い思出の糸を繰り出して居る。

短く簡潔に結ぶ程、詩はむづかしく成る。斯うした單純な言葉の裡に是丈の想を盛るのは、我々凡人の能くし得る所では無い。

我が國民趣味に一番ぴつたりする小唄調も懷しく、三味線ならば爪彈き、ヴァイオリンなら弱音器を附けて、一人樂しく心行く迄歌ひ度い手頃の小品詩である。そして新傾向の詩でも有り、氣品の高い純情の詩でもある。

發音アクセント

ダイジュウニ　スキサイグワ（イ）*

コノナツカイタ　イマダシテミテナツコヒシ（イ）　アヲバノソヨギ*　ヒノヒカリ

カンナノハナノチノイロヨ　マチノイトコガカヘルトキ*（エ）

アレホドホシイトイッタノヲ　ツイヤラナイデ　ソノママニ(1)

ワカレタコトモオモハレル(2)　フトエガキダスナツノユメ

ソトハチラチラユキガフル(2)

【注意】

(1) 單獨には　マヽ

文字語句

新出文字

夢(ユメ)

語句と其の解說

水彩畫(スヰサイガワ)　水に溶した繪具で描く西洋風の畫。

カンナ　だんどくの異名。だんどく科多年生根莖花卉、花壇に栽培して賞美する。印度・馬來半島・支那の原產。莖は丈夫で分岐せず、葉は極めて大、花は圓錐形花序又は總狀花序。初夏から秋末にかけて咲き續ける。雄蕊は通常花瓣狀を成し五箇の中三箇が特に大、花色は鮮黃・濃朱紅色・樺色・淡朱色・黃色に斑點あるもの等種々で、濃朱紅色の花を着けるものは莖も葉も共に暗赤色を呈する。

夏(ナツ)**こひし**　夏がなつかしい。又はしたはしい。

ふとゑがき出す　ふとは不圖ではからず、思ひがけず。ゑがき出すは心に描き出すの意で思ひ出すこと。

外(ソト)**はちらく**　之で此の詩が冬の詩に成る。初句の〝此の夏かいた〟と對照させて美しい思出を味はせて欲しい。

指導精神

有觸れた事を有觸れた言葉で歌つて、それで居て成程なアと頷かせる。何のこだはりも無く思ふが儘を自由に歌つて、然もきちんと七五の韻律を蹈ませて居る。試に二三囘繰返して讀んで見給へ。何處に一語の無理がある。至つて平明簡易で、然も嚙んで含むやうな情緒の掬すべきものがある。本當の詩は之で無くてはいけない。

詩は飽く迄も言葉の藝術である。言葉を外にして詩は決して成り立たない。勿論內部生命の燃燒があり迸出が有つて後始めて要求される表現であるから、內容を持たぬ詩は毫も存在價値を有しない。從つて內容を重んずる事は詩人として重要な關心事で有らねばならぬが、詩の價値を內容のみから眺めて、他を沒却するのは眞に詩を解するものでは無い。何となれば人間の心に如何なる感動が派生しようとも、感動其の儘では藝術とは成り得ない。此の感動を言葉を通じて表現してこそ初めて詩があり藝術がある。卽ち詩は我々の感動を言葉に托して表現した藝術である。從つて詩は言葉の表現が無くては絕對に成立し得ない。內容の美と形式の美と、更に之を構成する要素たる言語の美が全的に發揮されない限り、勝れた詩の存在は容認されない譯である。

此の根本義は誰しも辨へて居る筈であるが、それにも拘らず多くの詩人は如何に言葉を虐待し表現を粗略に取扱つて居る事であらう。概して現代の詩人は內容本位で有つて、詩が藝術たる爲には言葉を選び、且つ琢磨せねばならぬ事を考へて居ないやうである。或者は散文以下の作品を以て得々と誇り、甚しきは殆ど國語さへ忘れて居る詩人も居る。必ずしも文法に依つて詩を規定する必要は無いが、現在作られて居る作品の多くは殆ど日本語の文法を無視したものが過半數である。少し注意すれば分る事を殊更に間違へて居るのだから始末が悪い。今の詩人ほど言葉を愛する事を忘れて居る者は無い。何故に詩人として言葉を愛しないであらう。言葉の藝術に言葉を愛する事を忘れては、最早詩人としての自殺である。言葉に愛を持つ事は言葉の本質を捉へるのに敏感である事である。潔癖である事である。此の點に於いて本課は正に其の好範疇を見せたものと言へる。

指導形態

指導上の認識點

1　本課の指導標的は過ぎし夏の日の回想に耽ける純眞な少女の態度に同化させて、無垢の心情と純美の情緒を培ふ點にある。

2　取扱としては眞夏と眞冬とを對象させた構想の絶妙さを味はせ、自然觀照に資すると同時に、叮の從兄弟に對する愛著の情から親愛の情念を內的に其の儘把握させる用意が肝要である。

3　形態は七五の流麗な旋律で極めて內容と能く合致して居る。此の邊は既習の詩形と比較させ、詩の內容・形式の相關に就いて考察させる事も、此の學年として必要缺ぐべからざる心構であらう。

4　本課は二時間見當で指導を纏め度い。

第一次指導

1　題目の指導。
　▽板書して讀ませ題意に興味を持たせてから指導に入るが良い。

2　全課を靜かに通讀させる。

3　第一印象を言はせて見る。

4　不明の箇所を質問させる。
　▽新出文字はたつた一字であるから板書して指導する。
　　夢

5　繰返して反覆讀誦させる。
　▽詩情を汲み詩意を考へさせて。

6　話合。
　▽讀後の印象を中心に。

7　感想交接。
　▽隣席相互に。

8　指名讀。
　▽聲調美に注意させて。

9　範讀。
　▽一回範讀してから追讀させる。

10　默讀。
　▽詩心を摑ませて記帳させる。

11　低音讀。
　▽聲を立て自由に。

12　ノートを纏めて提出させる。

第二、三次指導

1　全課の聽寫。
　▽視寫させてもよい。

2　讀合。
　▽重立つた語句に注意させて。

　　夏こひし　青葉のそよぎ　カンナの花
　　血の色　町のいとこ　ふと忘がき出す
　　夏の夢

(1) **此の夏** かいた
水彩畫
今出して見て
夏**こひし**

(2) 青葉の**そよぎ**
日の光
カンナの花の
血の色よ

(3) 町の**いとこ**が
歸る時
あれ程ほしいと
言つたのを

(4) **つい**やらないで
其のまゝに
別れたことも
思はれる

(5) ふと**ゑがき出す**
夏の夢
外はちら〳〵
雪が降る

水彩畫
此の夏……かいた
今……冬（雪が降る）
夏こひし

夏の景色
青葉……日の光
カンナ……血の色（赤）

町のいとこ
あれ程ほしい……（得意）
ついやらないで……（愛著）
別れたことも……（殘惜し）
思はれる……（美しい思出）

夏の夢
ふとゑがき出す……（即興）
外はちら〳〵……（初句に對應）

3 指名讀。
▽流麗な旋律に注意させて。
4 自由に反覆讀誦させる。
▽詩情を嚙み締めて。
5 詩心の味到。
▽反覆低唱させて。
6 散文化させる。
▽一聯づゝ想を考へさせて。
7 話合。

テスト問題

一、次の詩を讀んで後の問に答へなさい。

町のいとこが
歸る時
あれ程ほしいと
言つたのを

ついやらないで
其のまゝに

▽詩興を中心に。
8 詩形の吟味。
▽既習の詩形と比較させて。
9 歌謠化練習。
▽適宜にメロヂを工夫させて。
10 全詩の暗誦・暗寫。
11 語句の書取・應用練習。
12 テスト。

別れたことも
思はれる

（1）いとこは今どこに居るか。
（2）ほしさの現れて居る句はどれか。
（3）「ついやらない」の「つい」のわけ。
（4）町のいとこはどんな氣持で歸つたと思ふか。
（5）作者はやらなかつた事を今どう思つて居るか。

二、次の語句を使つて短い文を作りなさい。

（1）こひし　（2）そよぎ　（3）あれ程
（4）今出して見て　（5）ふと

三、次の□の中へ字を一字づゝ入れなさい。

（1）此の夏□□□　水彩畫
今□□□見て　夏□□□
（2）ふと□□□出す　夏の□
外は□□〳〵　雪が□□

第十三　久田船長

眞多の今日此の頃、兒童達は霜を踏んで登校したであらう。學窓から望む遠山には雪が白く光つて居るであらう。恰も此の時、北海の吹雪を衝き、骨も凍らん計りの怒濤と戰つて、人道の爲職務の爲、潔く身命を献げて責任を全うした久田船長の殉節美談は、恐らく兒童をして目頭を熱くさせる事で有らう。

東海丸の船員は勿論の事、ロシヤの汽船プログレッス號の乘組員も久田船長の雄々しい働き振りに感激したで有らうが、特に記憶すべきは此の壯烈極まる美談が、日露の風雲漸く急を告げ、暗雲低迷せる明治三十六年の秋の終りで有つた事である。即ち東海丸が青森港を出帆した十月廿八日は、ロシヤの軍隊が條約を蹂躙して奉天を占領した日で有つた。

日本人としての大國民的面目を、能くこそ彼等に見せて呉れた。同僚廿七名は既に溺死して居るし、船長一人が何うしておめ〳〵生きて歸られよう。我が古來の武道精神が茲にもまざ〳〵生きて居る。

武士道精神の發露、それは海國男子の意氣であり、海國日本の誇でもある。

挿畫の印象と其の説明

七十一頁の挿畫は難航中の東海丸で、場面は勿論想像であるが、船は郵船會社に秘藏されて居る東海丸の模型に據つて描いたもの。後方の檣頭には郵船會社の社旗が狂氣にはためいて居る。唯さへ荒い津輕海峽の

眞唯中、吹募る烈しい嵐に船は木の葉の樣に飜弄され、激浪は甲板より高く逆卷いて居る。正に必死の難航だ。山なす白波に荒れに荒れ狂ひに狂ふ大時化の樣が想像される。

現在では斯うした型の汽船は珍しいが、明治三十年代の當時には普通の型で、帆の力を利用する爲舷頭に澤山の帆綱が見られる。前方に長く突出したのは斜橋と稱して、帆船スクーナー型特有のものである。

七十六頁の寫眞面は圓内が久田船長のフロック姿、碑は文字の示す如く其の表彰記念碑で、船長の出身地石川縣鳳至郡鵜川村の菅原神社境内に在る。昭和九年九月二十二日除幕式、題字は前首相齋藤實大將の筆。背景は言ふ迄もなく同神社の社頭である。

發音アクセント

ダイジュウサン　△ヒサダセンチャウ

アヲモリ・ハコダテクヮンノレンラクセントウカイマル　タスウノセンキャク

ツガルカイケフ　トクイウノノウム　フブキ　クラサハクラシ　コクビャク

キテキ　ヲシマハンタウ　ヤゴシミサキノオキアヒ　ムロラン

ウラヂボストック　ロシヤ　ヒサダサスケ　ゼンリョクヲツクシタガ

イチダイオンキャウ　ヨウシャナク　スハイチダイジ　ワメキサケブ

カタハシカラ　コッコクトシヅンデ　タマラナクナッテ　センケウノランカン

シヅミユクフネ　ウンメイ　カンゲキノサケビ　センチャウノギム

ヒツウナ　シカモキゲンノアルコヱ　スゴスゴトシテ　ヒッキリナシニキテキガ

タカナッテ　ダンチャウノオモヒ　サイゴノシュンクヮン　ヒジャウキテキ

イチゴトシテ　ショウヨウ　カウケツナシンジ　ケッシノカクゴ

ヒャクニンチュウクジュウクニンマデ　サウナンダイイチノデンパウ

リッパナココロガケ

【注　意】

（1）又　ウラジボストック。

（2）單獨にはカタハシ。

文字語句

新出文字

郵 便 浸 嚴

讀替文字

霧 吹雪 白（新出は卷二 シロ、讀替は卷八 ハク） 此方 危

響 首 確（新出は卷八 カク） 悲 嚴 沈

語句と其の解說

久田船長 名は佐助、日本郵船會社汽船東海丸の船長、石川縣鳳至郡鵜川村の人、明治二十二年東京商船學校を卒業して琴緒・遍齋等の練習船に乘組み、二十六年三月實習滿期と成り、同年六月十五日初めて日本郵船會社に入り、神戸・小樽間を往復せる和歌浦丸に乘組み運轉手心得と成る。爾來各汽船の船員を經て三十六年六月十五日、函館・青森間定期船東海丸の船長と成る。同三十六年十月二十八日、本船の青森を發して函館に向ふや、難風の爲ロシヤ汽船プログレッス號と衝突し、船の中腹を貫かれ、爲に沈沒の厄に遭ひ、佐助も亦船と運命を共にして海底に沈んだ。年四十三。是より先き明治三十三年の北淸事件にも御用船に乘組み、功に依り勳五等に叙せられ瑞寶章を授けられた。本課は其の悲壯極まる最後の場面を叙したものである。 **しけ模樣** しけ（時化）は船乘の慣用語で風雨の續くこと。轉じて魚類の獲物少き不漁の場合にも用ふ。荒れ模樣に同じ。 **津輕海峽** 本州と北海道間に在り平均距離約一〇浬。津輕半島の龍飛崎と松前半島の南端白神岬との間を西口、下北半島の矢尻

岬と龜田半島の東南角惠山岬間を東口とし、海峽の中央に於いて汐首岬と大間岬が迫つて最狹部を成して居る。全長六〇浬。此の海峽は本州・北海道の大溝道線に當り、水深大で二〇〇米以上の所多く、海流は東流し、汐首岬は其の衝に當り速度强く、白神岬と龍飛岬間は潮流最も急。龍飛・中の潮は東流し、白神は西流する潮で、中の湖と松浦・辨天崎附近に相遭ひ、東南流し下北半島の佐井沖に至る。東口は親潮の影響で潮流は時に西流する事がある。加ふるに濃霧多く船行に頗る困難を極める。海峽の連絡は往時津輕三馬屋から松前に至つたが、後函館港の發達に伴ひ、青森・函館間に移り、又青森から室蘭に定期連絡もある。 **濃霧** 細かに厚く立ち込めた霧。海霧。航海の際此の濃霧に遭ふと一寸先は見えない。津輕海峽は特に甚しい。青森地方では此の濃霧をガスと稱して恐れる。 **吹雪** 風の烈しく吹き捲く雪。又雪が風まじりに降ること。風雪。 **黑白も辨じない** あやめもわかぬこと。何が何やら全く見分がつかぬこと。辨別し難きに喩へて言ふ。 **濱島半島矢越岬の沖合** 渡島半島は北海道の東南部に突出する半島。渡島國一圓・膽振・後志の一部から成り、最南端の白神岬は津輕海峽を隔てゝ青森と相對する。矢越岬は白神岬の東、岩部と知内の中間に突き出て居る。矢越岬の沖合は函館から新潟に至る航路に當り、青森に至る航路とは稍東に外れて居る。濃霧の爲方向を誤つたものである。

室蘭 北海道内浦灣（噴火灣）の東端、陸續きの繪鞆半島に位する開港場。大正十一年八月市制施行、市街は半島部に在る。青森へは一〇六浬、今北日本汽船會社の定期航路を有する。人口六五、〇九五。 **ウラヂボストク** "東方の主"の意。シベリア極東地方の南端、日本海に沿ふ商港兼軍港。シホタ山脈南端の小半島上に位し、ウスリ低地帶の續きがアムル灣・ウスリ灣と成る。

町の南にゴードウンーホーン(金角)と言ふ小灣がある。シベリア及び北滿洲の門戸、シベリア鐵道の終點、敦賀を距る約四九〇海里。冬期港内結氷の時も碎氷船に依り船舶の出入自由。大豆・木材を輸出、綿織物・鐵器・砂糖を輸入。極東大學・日本總領事館の所在地。人口一〇萬八千。　**ロシヤの汽船**　ロシヤ汽船プログレッス號を言ふ。　**船首**　船の最前部。みよし。へさき。　**船腹**　船の中央部。最も重最な箇所。　**極度**　はてのところ。これ以上行けぬぎりぎり一杯のところ。ゆきつまり。極點。つめ。極所。はて。　**すは一大事**　すはは俄かの出來事に驚き發する聲。さあ。そら。一大事は容易ならぬ事柄。たいへん。　**部署**　役割を定めること。手くばり。てわけ。　**わめき叫ぶ**　わめくは大聲でさけぶこと。叫喚。をめく。　**船橋の欄干**　船橋は舟に上下する爲に設けた船梯子。欄干は船客の墜落を防ぐ爲に設けたてすり。　**運命**　人生を拘束し限定する一種不可思議の力。人の身に來る善惡のさが。天命のめぐりあはせ。うん。　**義務**　人として又國民として爲さざるべからざる又は爲すべからざる行爲。自己の分際に應じて務めねばならぬ行爲。法制的には法律上で爲さざるべからざる務。權利の對。　**悲痛**　かなしみいたむこと。悲しみの極度に達したこと。悲哀極まること。　**すごく**　憂ふるさま。又ものさびしきさまに言ふ。悄然。　**斷腸の思**　はらわたのちぎれる程かなしい思ひ。斷腸はかなしみに堪へかねること。悲哀の切なること。　**荒天**　荒れた天候。天候の險惡なこと。　**一期**　人の一生涯。一代。一生。　**從容**　擧動がゆつたりとして迫らぬさま。　**高潔**　けだかくていさぎよいこと。高尚で汚れの無いこと。　**遭難**　災難に出遇ふこと。　**態度**　身ぶり。なりふり。かたち。やうす。すがた。又からだのかまへ。身がまへ。しうち。

指導精神

本課の觀點は船客や船員を一人殘らず救助して自己の本務を全うした船長が、沈み行く船と運命を共にし從容として死に就いた高潔無比の態度に共感させるに在るが、それと同時に感じ込みの深さや文の新鮮味を味はせると共に、觀察點の移動や流動の遲速など叙事の體樣を知らせる事も大切で有らう。感受性の强弱は天分にも依るが、或程度迄は讀書や修練の力に俟つものが多い。鋭く、深く、且つ確實に感じたと言ふ丈でも、其の知識は生きた知識と成り、其の感情は生きた感情と成り、從つて其の知識や感情の有の儘を書いたとしても、其の儘生きた文章と成る。自分自ら深く感動しない事を書いて置き乍ら、他を深く感動せしめようと爲るのは無理だ。感じ込み、味ひ入る事が先決條件だ。心を自由に透明にして、何でも心に映ずるものを凝視し把握する事が大切である。觀察と發見、凝視と把握、感受と感動、是等は凡て一體と成つて讀書力を生み、表現力を培ふ原動力と成る。殊に本課の如き内容が既に悲壯至極である上に文が頗る感激性に富んで居るから、感受力の旺盛な彼等は恐らく讀みの進むに連れて、其の眼はかゞやき其の胸はときめき、果ては全我全心を傾倒して其の高潔な態度に共感するで有らう。"すは一大事"から"刻々に沈んで行つた"迄の目眩しい働き、"船客も船員もすべてボートに乘つた"から"船員の感激の叫びであつた"迄の壯烈悲壯な心構、"船と運命を共にするは船長の義務だ"から"最後の瞬間まで非常汽笛を鳴らし續けた久田船長もろ共に"迄の高潔極まる犧牲的態度、言々句々眞に涙せずには讀めない活教材である。指導者は宜しく先づ感入して然る後兒童を感動せしめる用意が肝要で有らう。

指導形態

指導上の認識點

1　本課の指導標的は不意の衝突事件に沈着能く部下の全部をボートに移し、自身は從容船と運命を共にした久田船長の職務に忠實な態度と、其の妻の夫を辱めなかつた美事な心掛に感激せしめるにある。

2　形式方面は相當難しいが感激美談であるから、此の點の興味から專ら自學的にと仕向け、反覆讀誦の間に全文を我物とする態度は從前通り、此處にも堅持して指導に當るべきである。

3　學習中地理的事項は地圖に就いて確め、人物の行動は話方又は劇化實演等に依つて立體化させ、文の精神を能く體認するやう心掛けねばならぬ。

4　本文は大體四五時間見當で指導を纏めるやうに立案して欲しい。

第一次指導

1　題目の指導。
▽最初は唯讀ませて疑問符を附し、讀心を畯つてから通讀に入る。

2　靜に全課を通讀させる。
▽不明の箇所は記帳させて置く。

3　新出文字の指導。
▽上欄文字を拾はせ板書して一齊に指導する

郵　便　霧　吹雪　白　此方　危　響
首　浸　確　嚴　悲　嚴　沈

4　全課の自由自習。
▽たつぷり時間を與へて。
▽印象其の他は記帳させて置く。

5　重要語句の指導。
▽質問を待つて其の都度指導する。

連絡船　郵便物　出航　しけ模樣　濃霧
吹雪　黑白　此方　危急　一大音響

浸人　極度　部署　分乘　確める　船橋
運命　覺悟　感激　嚴かに　義務　悲痛
威嚴　高鳴つて　壓した　斷腸の思
沈沒　最後の瞬間　非常汽笛　もろ共
動搖　過半　一期　從容　高潔　決死
遭難　取りみだす　感動　態度

▽地名は特に引離して入念に指導する。
青森　函館　津輕海峽　渡島半島
矢越岬　室蘭

6　文の荒筋を攝ませる。
▽話の大體を言はせて見る。

7　話合。
記帳した印象や感想を中心に。

8　更に二三回繰返して通讀させる。
一句切づゝ輪讀式に讀ませても良い。

（青森）
東海丸
しけ模樣
濃霧
吹雪
暗さは暗し
黑白も辨じない

9　文の焦點を探らせる。
▽話の山は何處か、文意は何か等。

10　低音讀。
▽文意を考へさせて。

11　ノートを整理して提出させる。

第二次指導

1　指名讀。
▽中・劣生を主として。

2　重要語句の再吟味。
▽難語句が多いから特に注意して取扱ふ。

3　自由讀。
▽觀點に注意させて。

4　逐次研究。
▽教師は要點を板書で纏める。

津輕海峽 → 渡島半島矢越岬の沖合（一大音響）（翌朝四時）

（明治三十六年十月二十八日）

ロシヤ汽船（室蘭）→ 突然 すぐそこに石炭を積んで 突進して來る

久田船長 → すは一大事 →
- 乘組員を部署に……
- 五隻のボートに片端から……
- さわぐ船員をなだめ……（船長たゞ一人）
- 『みんな乘つたか。』……
- 『船長早くボートへ。』……
- 四十歳を一期として——從容死についた
- 船の欄干に身を寄せて動かうとしない……
- 『船長、私も一しよにお供いたします。』……
- 『船と運命を共にするは、船長の義務だ。』……（船もろ共に）
- 早く逃げろ。』……
- 悲痛なしかも威嚴のある聲……
- 引切りなしに汽笛が高鳴つて……
- 最後の瞬間まで非常汽笛を鳴らして……

斷腸の思

船長の妻 → 遭難第一報——夫をはづかしめぬ

- かねてから →
  - 萬一の場合決死の覺悟がなくては ならぬ……
  - 百人中九十九人まで さもなけれ ば歸ぬものと思へ……（覺悟）
  - 言聞かせてゐた言葉であつた……
- りつぱな態度 →
  - 電報を手にした時 早くも夫の死 を察し……
  - 見舞の客に對しても 取りみだし た樣子も見せなつた……（今更のやうに）
  - 人々は ほめたゝへた……

5 書取。
▽板書の文圖を適宜に取捨して。
6 輪讀。
▽座席順に。
7 默讀。
▽文の焦點を探らせ文意を掴ませる。
8 話合。
▽文意を中心に。
9 挿畫と文とを照合させる。
▽文の何處を畫にしたものか、讀本に何う出て居るか等。
10 ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1 通讀練習。
▽全課を一氣に。
2 指名讀。
▽一句切づゝ、次々に。
3 會讀。
▽グループに分れて研究させる。

4　輪讀。
▽一場面づゝ、教師も參加して。
5　話合。
▽印象や感想を中心に。
6　文の機構を確める。
▽場面の推移や感情の起伏に著目させて。
7　話方練習。
▽劇的に。
8　劇化實演。

テスト問題

一、次の言葉はそれ〴〵どんな心持から言はれたものか、後の文の中から答を選んで（　）の中に書入れなさい。

（イ）危險
（ロ）安心
（ハ）心配
（ニ）かんしん
（ホ）かなしい

▽先づ脚本化させて。
9　學習事項の整理。
▽特に形式を主として。
10　朗讀練習。
11　視寫・聽寫練習。
12　新出文字の書取。
13　語句の應用練習。
14　テスト

1　青森港を出た時から大分しけ模樣であつた。
（　　）
2　突然、前方からすさまじい勢で汽船が突進して來た。
（　　）
3　船長たゞ一人、船員は殘らずボートに乘移つた。
（　　）
4　聞く人々は全く斷腸の思であつた。
（　　）
5　夫をはづかしめぬ妻の態度をほめたゝへた。
（　　）

二、次の上と下の語を一つづゝ組合せてまとまつた文を拵へてごらん。

1　ウラヂボストックへ　　高くなつて來た
2　危急をさけるのに　　死についた
3　一大音響と共に　　乘つて下さい
4　船長早くボートへ　　わめきさわいだ
5　船員の過半は　　全力を盡した
6　やがて汽笛も　　船腹を破つてしまつた

7　波は次第に　からうじて助かつた
8　船客は　運命を共にする
9　沈み行く船と　聞えなくなつた
10　從容として　廻航する

三、次の語句に振假名を附けなさい。

連絡船　船客　郵便　濃霧　吹雪
黑白　此方　危急　一大音響　斷腸
瞬間　從容　高潔　遭難　態度

第十四　母の力

袖解橋事件として知られた井上聞多の遭難記で、母性愛の極致を見せたものである。燒野の雉夜の鶴、子を思はぬ親は無い。母性愛は實に母親の其の子に對して抱く先天的・本能的の愛情である。近時世相の赴く所動もすれば人としての女子の自覺を高調する餘り、母親たる女子の使命を閑却する傾がある。此の悲むべき世相に對して本課に於ける聞多が母の如き、正に頂門の一針であらねばならぬ。

本課は所謂袖解橋事件を中心に、

（1）聞多の遭難
（2）五郎三郎が兄としての心構
（3）聞多が母の慈悲（文の中核）
（4）勤王家所郁太郎の友情

此の四つのストラッグル（葛藤）を按排して、一つの悲壯な劇的場面を構成して居る。文の中核は聞多が母の慈悲に在るは勿論で有るが、それと隨伴して幕末に於ける尊王・佐幕兩派の爭鬪、聞多が生立、兄五郎三郎の友愛、所郁太郎の友情等、讀者の胸を打つものが尠くは無い。

殊に其の大詰の場面に於ける二人の漢方醫が駈付けて匙を投げ、一人の蘭法醫が燒酎を消毒劑として手術したと言ふ邊りには、幕末の醫術、特に其の科學智識の程を思はせて又一段と興味が有らう。

挿畫の印象と其の説明

八十六・七頁の肖像は右が晩年の母堂で、頭布を被つた温容には聰明で然も嚴乎たる品格が窺はれる。左は本課の主人公聞多で、元治元年彼がロンドンから歸朝して間も無く撮影した遭難直前の寫眞（別項參照）を原據として描いたもの。總髪を元結で括り、頸の邊りに僅か垂れて居る。遭難後の寫眞には、どれも顏面に刀痕が殘つて居るから直ぐ分る。

發音アクセント

ダイジュウシ　ハハノチカラ
ゲンヂグヮンネン　アトヨネン　メイヂヰシンノマク　テンカノクモイキ
セッパク　スハウノヤマグチ　ゴゼンクヮイギ　キエイノヰノウヘブンタ
ハンタイタウ　グウノネモ　ゲナンアサキチ　チャウチン
ユダノジタクニカヘルトチュウ　クワイカン　ダレダ——キミハ　ダシヌケニ
イキナリ　スカサズ　マッブタツ　ウツムケニナッタサイ

セボネニフカ　ククヒコムヂュウシャウ　ホトンドムイシキニ　タリャウノシュツケツ
ヰノウヘノワカダンナサマ　ゴラウサブラウ　オットリガタナ　アトノマツリ
チダラケ　ドロダラケ　バウゼントシテ　ムシノイキ　カラウジテヒトクチ
カイシャクタノム　ヒトオモヒニ　ケツゼントシテ　マツテオクレ
シボルヤウナハハノコヱ　イッテキノチ　コノハハモロトモニ　トコロイクタラウ
ランボウイ　カタナノサゲヲ　カヒガヒシクミジタクシテ　セウチウ
アリアハセノチヒサイタタミバリ　コンコント　ロクカショノシュジュツ
ヒッシノカンゴ　サメザメト　バンシニイッシャウ　ヰノウヘカヲル
トキメク　クンチョウ　ヒメイノサイゴ　コノハハノチカラ

【注　意】

（1）又　ハハ。

（2）單獨には　メエジ。

文字語句

新出文字

備吉量慈袖滴

讀替文字

迫鋭張男際（新出は卷九　キ（八））　顔血友必榮

語句と其の解説

元治元年　孝明天皇の御宇。皇紀二千五百二十四年、今から七十三年前。　**明治維新**　江戸幕府の滅亡に依り政權が再び朝廷に歸して明治新政府が成立し、社會の各方面に大革新を齎らせるを言ふ。國史上最も波瀾に富み永く記念すべき時代である。　**雲行**　事のなりゆき。形勢。事態。　**周防の山口**　今の山口縣山口市。縣の中央に位し、中國山地中の東北から西南に長き山口盆地の中央にあり、椹野（フシノ）川に臨む。市街の北には中國山地分水嶺上の東鳳翩山が聳え、西南は開けて小郡に通ず。縣下政治・學藝・軍事の中心で、縣廳・歩兵第二十一旅團司令部・歩兵第四十二聯隊・山口高商・山口高等學校等がある。もと毛利氏の都城地。　**毛利侯**　當時の藩主毛利敬親侯を言ふ。　**氣鋭**　鋭く烈しい氣象。鋭氣に同じ。　**井上聞多**　後の侯爵井上馨。天保六年十月周防に生る。安政二年廿一歳にして志道慣平の養嗣子と成る。萬延萬元年山口藩主より聞多の名を賜はり志通聞多と

（影撮年元治元）　井上聞多

言ふ。文久三年五月志道家と離別し井上聞多と稱す。同月伊藤俊輔（博文）井上勝等五名と藩地を脱走して英國汽船ケルスイック號に便乘し海外渡航の壯途に上る。間もなく長州藩の外國船砲擊事件起る。翌元治元年イギリスに在留中下關事件に驚いて急ぎ歸朝。歸國後聞多は勤王開國の急を説いて藩廳に先覺の論を吐き、俗論黨と對抗。恰も九月廿五日山口の政事堂に參集し、藩主の御前に俗論黨を論破。同夜政事堂からの歸途、袖解（ソデトキ）橋に襲擊され重傷を負ふ。時に年三十。本課は此の場面を叙したものである。　**湯田**　市の南部に在り、今湯田溫泉がある。故宅の附近は井上公園と成り、宅址に記念碑が建つて居る。　**歸る途中**　袖解橋を言ふ。今橋畔に『世外井上馨侯遭難之地』と刻した碑が立つて居る（大正六年建設）倚德富蘇峯の日本國民史にはソデトキとルビが附いて居る。　**怪漢**　怪しい男。擧動の怪しいしれもの。正傳に依ると當時の刺客に兒玉愛二郎・中井榮次郎・周布藤吉の三人で、其の一人の兒玉愛二郎が後日の告白に依ると、先づ靡を掛けたのは周布で『聞多さんでありますか』と言つたとある。　**氣丈**　精神のしつかりしたこと。剛毅。　**無意識**　意識の無いこと。其

の事を爲さんとする考へ無しに事を行ふこと。氣附かずに事を爲すこと。　**抨取刀**（ヒノトリガタナ）急な場合に素早く刀を手に取ること。押取るは〝おつ〟〝取る〟で押取るの連用形。急に手に取ること。　**後の祭**（アトマツリ）祭の終つた後の拍子抜したこと。轉じて時機に後れて甲斐無きこと。　**あさましい姿**（ハガタ）むごたらしい姿。此處のあさましは肝つぶる、呆れかへる等の意に解したが良い。　**醫者が二人**（イシヤ　フタリ）長野昌英・日野宗春の兩醫師であつた。

山口市袖解橋にある
井上侯遭難記念碑

介錯（カイシヤク）切腹の際傍に附添つて首を斬ること。又其の人。　**一思ひ**（ヒトオモ）一度の苦しい思ひの義で、寧ろ一度に。斷然。　**決然**（ケツゼン）固く決心せるさまに言ふ。きつぱりと思切るさま。　**一滴**（イツテキ）ひとしづく。　**所郁太郎**（トコロイクタラウ）美濃國の浪士で勤王家、少時から大阪の緒方洪庵の門に入り、蘭學を研究し蘭法も心得て居た。　**蘭方醫**（ランポウイ）蘭方は和蘭（オランダ）から傳へた醫方。西洋の醫術。　**刀の下緒**（カタナノサゲフ）刀の鞘に結びつけて下げる紐。劍緒。刀緒。　**とんく**　昏々。前後不覺のさまに言ふ。　**萬死**（バンシ）萬々命の助かるべき筈なきこと。命の助かる見込なきこと。九死。　**朝堂**（チヤウダウ）天下の大政の出る所。廟堂。朝廷。　**井欒**（クワウエイ）はえあること。繁昌すること。さかえ。ほまれ。榮譽。　**長壽**（チヤウジユ）壽命の長いこと。

ながいき。長命。長齡。　**君寵**（クンチヨウ）君主の寵愛。こと。　**非命**（ヒメイ）天命で無いこと。災害又は負傷等で死ぬ

資料

敎材の出所

井上世外公傳（井上侯爵家編卷一）

九月廿五日五つ時（午後八時頃）聞多は下男淺吉に提灯を持たせて湯田村高田の自宅へと歸路に就いた。抑々この日の會議は俗論黨のためには死活の大問題であつたから、その黨の壯士輩は井上の强硬な反對論に憤怒して竊かに密議、暗殺の陰謀が立てられた。とは知らぬ聞多は請井町の袖解橋（蘇峯の日本國民史にはソデトキバシとある）の手前凡そ一町許のところに差かゝつた。その時二人の武士が近づいて、『聞多殿とお見けするが』と尋ねると『さうぢや』と答えるや否や、更に一人加はつて斬りつけた。下僕はスハ一大事と吃驚、提灯を投げ出して急を自宅に告げたので兄の五郎三郎は直ちに刀を提げて駈けつけたが、時既に曲者の姿はなく、聞多は重傷を負ふて芋畑にたほれて人事不省となり、やがて我にかへり滿身血に染み乍ら直ぐ近くの農家に救ひを求めた後であつた。兄五郎三郎が搜索から引返して見ると、既に聞多は農夫の畚（もつこ）にのせられて家に著いてゐる處であつた。長野昌英・日野宗春の兩醫師が直ちに招かれたが、あまりの重傷に處を投げてしまつた、聞多の呼吸は非常に切迫し、仇を問はれても口が利けず、僅かに手眞似で早く介錯を賴むといふ意を示したばかりであつた。五郎三郎は立つて夏尙ほ

寒き氷の如き刄をふりかぶつた。今迄唯よゝと泣いてゐた母は驚いて五郎三郎の袖にすがり、『待つておくれ、たとひその效がないにせよ、兩醫師もこゝに在せば試みに創口を縫合はせてその經過を見たい。』と只管之を止めた。五郎三郎は『この重傷では如何なる名醫の手術も及びませぬ。それより速かに介錯して本人の苦しみを短くしてやるのが親の慈悲、兄の慈悲ではありませぬか。この深傷、この苦しみを悶絶するまで見てゐられますか。』と更に大刀をふりかざした。母は急に血塗れの我子の上によりかゝり、『是非に介錯とあれば、さあ、この母も共に斬つておくれ。』と固い決心を見せた。そこで已むを得えず母の意に任せて治療を受けさせる事とした。時に美濃國の浪士（勤王家）所郁太郎が聞多の遭難を聞いて驚いて駈けつけた。彼は若い時から大阪の緒方洪庵の門に入り、蘭學を研究し蘭法も心得てゐた。そこで彼は自らその大手術を引き受けてみたいと主張した。彼は聞多の耳に口を當て、『わしは所郁太郎だ。君は兄上に介錯を願つたが母上は是非治療を受けさせてくれ、それでなくば自分も共に殺してくれとのお慈悲だぞ、今も現に君を抱いてゐられるのは母上だぞ。わしがこれから治療に取りかゝる、何しろ淺くない傷だから多少の苦痛は母君のお慈悲に對してどうか忍んでくれ。』と言ふと、所は直ちに刀の下緒を襷にかけ、燒酎で傷口を洗滌し小さな疊針で縫合し始めた。吉富藤兵衛（後の吉富簡一）もその席に來會はせて、他の二醫と共に所の手術を助け、遂に六ケ所の傷口を五十針ばかり縫合はせ、手術が終つたのは今の午前二時頃であつた。

實に侯爵井上馨公が九死に一生を得たのは慈悲ある母の賜物であつた。公は三十歳當時の事を回想して、『母君はこの不孝の子を捨てず、死を以て予が生命を萬一に庇護しようと力められたのであつた。』と

度々語られたといふ。

指導精神

場面が大きい上に活劇的要素を多分に備へて居るから文の核心を見失ひ易いが、觀點は題目の示すが如く何處迄も聞多が母の母性愛にある。從つて前半の活劇は此の母性愛を盛る大きな容器で、之が悲壯を極めれば極める程、母の驚きと悲しみは倍加し、其の慈悲心は一段と光彩を發揮する。取扱は此の點に着目すべきで、

其の夜である。

下男淺吉の提燈にみちびかれながら、聞多が山口の町から湯田の自宅に歸る途中、暗やみの中に待受けてゐる怪漢があつた。

から

『おゝ、井上の至且那樣。どうして又これは。』

驚く農夫に、やつと手まねで水を食ませてもらつた聞多は、やがて彼等の手で自宅へ運ばれた。

迄は此の一篇の枕で、文章法で言ふ伏線、

淺吉の急報によつて、聞多の兄五郎三郎は、押取刀で其の場へかけつけたが、もの何も後の祭、どこにも人影はなかつた。弟の姿も見えぬ。再び家に取つて返すと、今農夫たちにかつがれて歸つた弟のあさましい姿、驚き悲しむ母親。

から漸次山に入り、

『介錯頼む。』

兄は涙ながらにうなづいた。どうせ助らぬ弟、頼みにまかせて一思ひに死なせてやるのが、せめてもの慈悲だ。決然として兄は刀を抜いた。

の邊りがクライマックスへの轉囘、

『待つておくれ。』

それは、しぼるやうな母の聲である。母の手は、堅く五郎三郎の袖にすがつてゐた。

『待つておくれ。お醫者もこゝにゐられる。たとひ治療のかひはないにしても、出來るだけの手を盡さないでは、此の母の心がすみません。』

『母上、かうなつては是非もございませぬ。聞多の體にはもう一滴の血も殘つてゐませぬぞ。手當をしても、たゞ苦しめるばかり。さあ、お放し下さい。』

兄は刀を振上げた。

其の時早く、母親は、血だらけの聞多の體をひしと抱きしめる母、何と悲壯な場面で有らう。に至つて愈々大詰のクライマックスに達する。

涙をふるつて刀を振りかぶる兄、血だらけの聞多の體をひしと抱きしめた。

眞に息詰るやうな感激其の物の中に、我子をかばふ母の至情が涙ぐましい計りに盛上つて居る。

井上聞多は後の侯爵井上馨で、又世外と號した。天保六年十一月毛利家の世臣の家に生れ、安政二年廿一才にして志道愼平の養嗣子と成る。萬延元年藩主から聞多の名を賜はり志道聞多と稱した。夙に先輩から尊

王攘夷の說を聞き、之に追隨して國事に奔走し同志の間に重きを成した。文久三年五月故ありて志道家と離別し、再び井上姓に復歸して井上聞多と名乘つた。同月伊藤俊輔等五名と英國汽船ケルスイック號に便乘して海外渡航の壯途に上つたが（幕府から言へば禁令密航である）間も無く長州藩の外國船砲擊事件が起り、（下關事件）イギリス在留中驚いて急遽歸國した。藩に歸つた聞多は勤王開國の急を說いて藩廳に先覺の論を吐き俗論黨と對抗し、恰も九月廿五日、山口の政事堂に參集して藩主の御前で俗論黨を論破、同夜政事堂からの歸途袖解橋に襲擊され重傷を負うた。本課は卽ち其の際の出來事である。聞多は母の慈悲に依り九死に一生を得、幕府が再び征長の師を起すや大村益太郎等と石州濱田に逆へ擊つて大に之を破る。明治維新參與に擧げられ四年大藏大輔に任じた。爾後屢々臺閣に列し、或は大藏大臣と成り、外務大臣と成り、又農商務大臣と成り、內務大臣と成り、出でては朝鮮に或は特命辨理大使と成り或は全權公使と成り、明治二十五年伊藤內閣には內閣總理大臣臨時代理を命ぜられた。明治十七年勳功に依つて伯爵に叙せられ、三十九年更に侯爵に陞叙し正二位大勳位に累叙された。馨は精悍不屈にして膽略あり。事を處する淸濁を問はず、故を以て或は淸議の指彈を免れず。性亦怒り易く其の意に滿たざるものあれば怒罵立ろに至る。其の麻布內田山に居るを以て人呼んで內田山の雷爺と言ふに至る。大正四年九月四日駿州興津の別業に薨ず。享年八十一、危篤の報天聽に達するや、特に從一位に叙し菊花章頸飾を賜ひ、越えて六日誄詞を賜ふ。曰く勤王の大義を唱へて克く囘天の偉業を翼け、海外の情勢を察して終に開國の宏猷を賛し、力を廢藩置縣の際に竭し績を財政經濟の局に貽し、忠忱節を致し勇決難に膺り、齡八旬を越えて望一世に薨し、今や溘亡を聞く曷ぞ軫悼に勝へむ、玆に侍臣を遣し賻を齎して以て吊慰せしむと。此の母にして此の子あり、聞多が明治の功臣と成り

此の寵遇を得たのも、全く母の慈愛の賜物である。

指導形態

指導上の認識點

1　本課の觀點は聞多が母の熱烈深刻な母性愛に在るは勿論であるが、一面之が背景と成つた遭難事件を介して、維新當時の切迫した世相を窺はせ、物議騷然として内外多事を極めた事を想察させるのも重要な著眼の一つで有られねばならぬ。

2　殊に母の愛に依り九死の中に一生を得た聞多が、發奮一番遂に朝堂に時めくに至つた事歴に感激させると共に、偉人の背後に必ず賢母ある事を納得させ、女兒に對して深い感銘を與へ自覺を喚起する事を忘れてはならぬ。

3　尙取扱に際して前卷の『松下禪尼』や『山内一豐の妻』と連絡させ、教材精神の深化を企圖する事も見逃し難い心構の一つであらう。

4　本課は可なりの長篇であるから、大體六時間見當で指導を完了するやう立案して欲しい。

第一次指導

1　題目の指導。
　▽讀ませて疑問符？の儘に捨て置き、或種の期待を以て直に文にぶつからせる。

2　全課を一度ゆつくり讀ませて見る。
　▽たつぷり時間を與へて。

3　話合。
　▽第一印象を中心に。

4　更に讀ませて話の大體を摑ませる。
　▽何時頃の話か、誰と誰とが何うしたのか、話の中心は何處か等。

5　不明の箇所を拾はせる。
　▽ノートに整理して記帳させる。

6　新出文字の指導。
　▽小黑板に振假名を附けて利用させる。

迫　鋭　備　張　朋　吉　際　顔　量

血　慈　袖　滴　友　必　榮

7　難語句の指導。
　▽頁を追うて質問させる。

元治元年　明治維新　天下の雲行　息苦しい　切迫　周防　山口　毛利侯　御前會議　氣鋭　反對黨　幕府　武備　主張　堂々　議論　ぐうの音　下男　自宅　怪漢　だしぬけ　のめらせた　すかさず　眞二つ　氣丈　後頭部　顔面　無意識　多量　出血　急報　押取刀　後の祭　あさましい姿　滿身　ぼう然　虫の息　からうじて　介錯　うなづく　せめてもの　慈悲　決然　袖にすがる　治療　母の一念　はりつめた　蘭方醫　下緒　かひ〳〵しく　燒酎　手術　必死の看護　態度　病床　萬死　朝堂　時めく　從一位　侯爵　長壽　功績　一世　君寵　すこぶる　非命　最期

8　個有名詞を拾はせて話合ふ。
　▽地名は地圖を參照させて。

9　默讀。
　▽文意を考へさせて。

10　讀み取つた事項を殘らず記帳させる。
　▽教師は机間を巡視し個別に指導する。

11　指名讀。
　▽一場面づゝ讀手を代へて。

12　話の筋を摑ませる。
　▽箇條書に記帳させる。

13　ノートを纏めて提出させる。

第二次指導

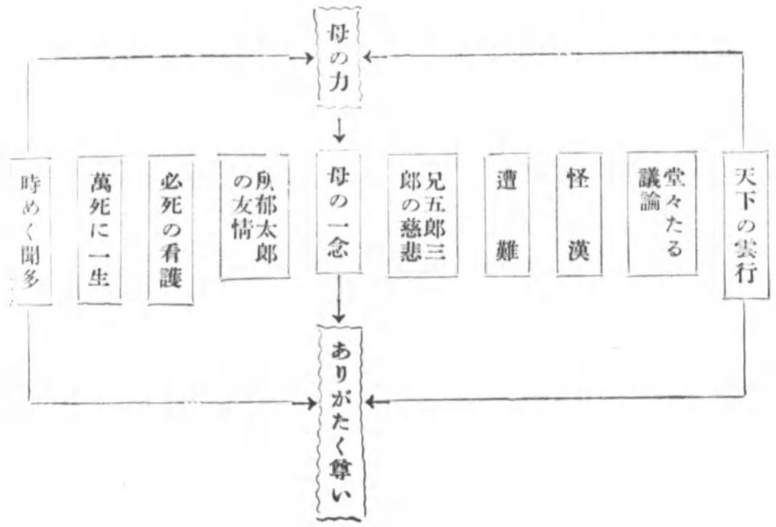
1　通讀練習。
　▽個讀に自由讀を交へて。

2　不明の箇所を質問させる。

3　指名讀。
　▽成るべく全課を一氣に。

4　範讀。
　▽文の觀點に注意させて。

5　逐次研究。
　▽教師は板書で纏める。



6 書取。
▽板書の文圖を適宜敷衍させて。
7 靜かに默讀させる。
▽文意を考へさせて。
8 話合。
▽文意を中心に、感想も交へて。
9 指名讀。
▽場面を分けて、何人かに。
10 ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1 全課を反覆通讀させる。
▽話の筋を辿らせて。
2 指名讀。
▽中・劣生を主として。
3 話合。
▽感想を中心に。
4 場面別に文圖化させる。
▽教師は机間を巡視して輔導する。
5 話方練習。
▽劇的に。
6 文意の例證。
▽表現面に卽して。
7 默讀。
▽文意を確認させる意味で。
8 劇化實演。
▽學級總掛りで脚本化させて。
9 朗讀練習。
▽讀調子に注意させて。
10 視寫・聽寫練習。
▽適宜の場面を選んで。
11 學習事項の整理。
▽內容・形式の兩面に亘つて。
12 新出文字の書取。
13 語句の應用練習。
14 テスト。

テスト問題

一、次の○の附いた語句を抜き出して解釋しなさい。

1　天下の雲行はほとんど息苦しいまで切迫してゐる。

2　彼の堂々たる議論に反對黨はぐうの音も出なかつた。

3　ほとんど無意識に彼は其の場をうまくのがれた。

4　醫者はぼう然としてほとんど手の下しやうも知らぬ。

5　功績は一世に高く君寵はすこぶる厚かつた。

二、次の言葉はどんな時使ひますか。

1　それにしても　2　さめ〴〵　3　とりあへず

4　ほとんど　5　すこぶる

三、次の文にカギ（「」）やマル（。）やテン（、）を附け、なほ段落を分けて正しい文形に直しなさい。

聞多はもう虫の息であつた母兄醫者の顏もぼつとして見分けがつかぬからうじて一口兄上とかすかに言つた兄の目は涙で一ぱいであるあゝ聞多しつかりせい敵は誰だ何人ゐたか尋ねられても聞多には答へる力がなかつたたゞ手まねが言ふ介錯頼む兄は涙ながらにうなづいた

第十五　水師營の會見

日露戰爭に於ける旅順の攻擊が難事中の難事で有つた事は今更說く迄もない。强襲に强襲を重ね、肉彈に肉彈を打つ附けても、自然の天險に人工の限りを盡して築き上げた堅壘は、何時陷るとも見えなかつた。工兵は有り丈の火藥と力を以て片つ端から砲臺を爆破した。然し七月末から攻擊を始め十一月末に成つても中々落ちさうに無い。四圍の事情は悠々と正攻法を取る事を許さなく成つた。事情と言ふのは遠く北方遼陽方面では近々大會戰を開始する爲第三軍の來援を待つて居るし、海軍は海軍で早く旅順の要塞を落して港內の露艦を擊沈して貰はねばバルチック艦隊と決戰する事が出來ないからである。將軍は又血と犧牲を拂ふ可く決心せねばならなかつた。斯くて軍司令部は攻擊方針を改め、斷乎として難攻不落の二〇三高地に肉迫する事に成り、再三再四肉彈を叩付け〳〵、屍山血河の難戰を繰返した。當時英國の觀戰武官某中將は現地を視察して〝之は眞に難攻不落の要地だ。之を奪取するのは恐らく不可能であらう〟と溜息を衝いた。卽ち彼の科學的頭腦では、奪取は全く絕望と見たので有らう。十二月五日、天は硝煙を拭つて紺碧の空を現し、砲兵の照準には絕好の機會を與へた。夜が明離れると野戰砲・重砲、特に二十八珊砲は同時に火蓋を切り、砲聲殷々として二〇三高地を壓した。陽の高く昇つた頃、輕砲諸隊も亦同高地を目掛けて猛火を集中し、硝煙鐵火全山を覆ひ高地は忽ち彈巢と化した、此の間突擊隊は西南角に集結し、午前十時、疾風迅雷の如く突進、肉彈又肉彈遂に西南頂を奪取した。砲聲喊叫に和して滿山は萬歲の三唱で埋まつたが、乃木司令官は獨り憎

然として山の一角を見詰めて居た。皇師百萬征强虜、野戰攻城屍作山、愧我何顏看父老、凱歌今日幾人還。將軍の胸底からは熱淚が込上げた。

二〇三高地攻略後の我が軍は勇氣百倍、之に反して露軍の士氣は刻々に鎖沈して、旅順の運命は旣に決した。明治二十八年一月一日、夜來の猛襲は祝砲と化し、新春の旭を映じて日章旗は望臺の空高く飜つた。萬歲の歡呼は旅順の山々を動かし天地を搖る。其の日の午後三時頃である。本街道上水師營の南方C堡壘前に敵の軍使は忽然と白旗を樹てゝ現れ、敵將ステッセルの英文書は午後八時頃、軍司令部の新年と戰勝の感激渦卷く中に屆いた。

旅順千九百四年十二月第二五四五號

貴下

交戰地區全般の形勢を考察するに、今後に於ける旅順の抵抗は無用なり。仍て無益に人命を損せざる爲、予は開城に付き談判せられん事を希望す。若し閣下之に用意せらるゝに於ては、開城の條件順序を討議する爲委員を指命し、且つ予の委員と會商すべき場所を指定せられん事を望む。

予は此の機會に於て敬意を表す。

旅順攻圍軍司令官　男爵乃木將官閣下　將官　ステッセル

此の申入れに對して二日早朝、山岡參謀は乃木司令官の回答書を携へ、水師營に於て敵方の代表マルチェンコ中尉に交附した。

千九百五年一月二日旅順攻圍軍司令部

貴下

予は玆に開城の條件及び順序に付き談判せんとする閣下の提議に同意するの光榮を有す。之が爲予は攻圍軍參謀長陸軍少將伊地知幸介を委員に指命し、之に若干の參謀及び文官を隨行せしむ。彼等は本日卽ち千九百五年一月二日正午水師營に於て貴軍委員と會商すべし。双方の委員は調印後批准を待たずして直に效力を生ずべき開城規約に署名するの全權を有すべく、其の全權委任狀は双方最高指揮官の署名したるものにして、互に交換すべし。

予は此の機會に於て敬意を表す。

旅順攻圍軍司令官　男爵乃木大將

關東要塞地區司令官　ステッセル將官閣下

兩將軍は軍使に依つて右の文書を交換し、更に双方の委員伊地知少將及びレイス少將、並に東鄕遼東半島封鎖日本艦隊司令長官の差遣した岩村中佐其の他双方の隨員は、一種の緊張に包まれて夫々委任狀交換等の手續を終り、同日午後一時二十分から豫定された水師營の茅屋に於て會見した。斯くて開城規約の成立を見るや、戰史に耀く兩將軍の會見は、翌五日午前十一時三十五分、昨日の開城談判所で有つた水師營で行はれた。本課は其の場面を詩化したものである。

挿畫の印象と其の說明

八十九頁の挿畫は水師營に於ける歴史的會見の場面で、"今ぞ相見る二將軍"の刹那の光景である。人物は先づ日本側から擧げると、

中央が乃木將軍、向つて將軍の左後方が參謀野津田是重少佐（後の津野田少將）其の右が參謀長伊知地幸介少將、乃木將軍の右側に居るのは副官松平英夫大尉（後の伯爵山田英夫）其の後は參謀安原啓太郎大尉、最右側ステッセル將軍の向側に居るのは通譯川上遼東守備行政事務官。

次にロシヤ側では、

先づ乃木大將と握手して居るのがステッセル將軍、其の後方に並で居る三人は、向つて左が隨員レース少將、中央は參謀勤務マルチエンコ中尉、右に首だけ見えて居るのは副官ニエルヴェルスコーヘ中尉。

である。場所は別項水師營の寫眞版の正面に見る民屋の内部で、木材を使はぬ滿洲では石造の壁や石疊の床は普通民屋に能く見られる。

發音アクセント

ダイジュウゴ　スキシエイノクゥイケン

リョジュンカイジャウヤクナリテ　テキノシャウグンステッセル

ノギタイシャウトクゥイケンノ　トコロハイヅコスキシエイ

ニハニヒトモトナツメノキ　ダングゥンアトモイチジルク

クヅレノコレルミンヲクニ　イマゾアヒミルニシャウグン

ノギタイシャウハオゴソカニ　ミメグミフカキオホギミノ

オホミコトノリツタフレバ　カレカシコミテシャシマツル

キノウノテキハケフノトモ　カタルコトバモウチトケテ

ワレハタタヘツカノバウビ　カレハタタヘツワガブユウ

カタチタダシテイヒイデヌ　コノハウメンノセントウニ

ニシヲウシナヒタマヒツル　クゥクカノココロイカニゾト

フタリノワガコソレゾレニ　シショヲエタルヲヨロコベリ

コレゾブモンノメンモクト　タイシャウコタヘチカラアリ

リョウシャウヒルゲトモニシテ　ナホモツキセヌモノガタリ

ワレニアイスルリャウバアリ　ケフノキネンニケンズベシ

コウイシヤスルニアマリアリ　グンノオキテニシタガヒテ
タジツワガテニジュリヤウセバ　ナガクイタハリヤシナハン
サラバトアクシュネンゴロニ　ワカレテユクヤミギヒダリ
ツツオトタエシハウダイニ　ヒラメキタテリヒノミハタ

【注意】

（1）又　ウチトケテ（平）
（2）又　ミギヒダリ（平）

文字語句

新出文字

閣

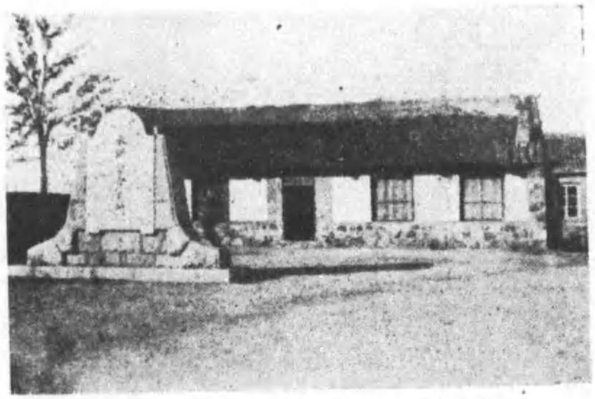
讀替文字

開　彼（新出は卷七　カレ）　受

語句と其の解說

水師營　關東州旅順市の西北約六粁に在る支那市街、人口三千。附近は丘陵中の比較的平坦地、玉蜀

黍・高粱・粟等の雜穀が作られて居る。日露の役、旅順開城に際し、乃木將軍と露將ステッセルの會見地として名高い。當時會見に用ひられた民屋は、現に水師營小學堂の校舍に充當して保存されて居る。



水師營（左方に在るのが棗の木）

會見　一定の場所に會して面談すること。會合して應接すること。水師營の會見は明治三十八年一月五日を以て行はれた。之より先露軍は我が猛烈な攻擊に堪へ兼ね、三十八年の一月一日午後三時頃敵の軍使が水師營の南方、我が攻圍軍の第一線に來て、開城に就き談判し度き旨を記した書簡を示した。我が軍は之を受取ると共に夫々の手續を經、愈々翌二日に開城の談判を開き、其の日の午後無事會談を終へ、開城規約は茲に全く成立した。斯くて相手方のステッセル將軍から我が乃木大將に會見を求めたので、一月五日水師營の第一師團に屬する衞生隊の營舍で此の歷史的會見が行はれたのである。（別項參照）

旅順開城約成りて　明治三十八年一月二日、彼我の全權委員に依つて議定調印された十一箇條の開城規約を云ふ。

敵の將軍ステッセル　露國侍從武官ステッセル將軍。將軍は日露戰爭の中途、旅順要塞區司令官と成り、開城の後故國に歸つたが　晩年は不遇に終つた。

なつめの木　鼠科李に屬する落葉喬木で幹の高さ十餘米に達する。葉は長卵形で長さ一糎許。初夏若葉の出る頃、黃綠色の小花を開く。果實は

楕圓形で秋熟し、最初は帶黃綠色であるが、次第に赤褐色に變ずる。生で食し又乾かして食用に充て、藥用にも供する。會見當時の記念の棗の木は今も殘存して昔を偲ばせて居る。（上の寫眞參照）　**いちじるく**　明瞭に分る。目に立つ。明白である。

水師營會見記念寫眞

大みことのり　大は尊敬の意を表す接頭語。みことのりは勅命、詔勅と同意義である。此の際の勅諚は"將官ステッセルが祖國の爲に盡した苦節を嘉し給ひ、武士の名譽を保たせよ"と有つた。　**たゝへつつは**　動詞の連用形に連り、其の動作の現在に完了せる意を表す。たゝへはほめる。稱讃する。從つてたゝへつはほめた、稱讃したと言ふ事に成る。　**二子をうしなひ給ひつる**　乃木將軍の二子、即ち長男勝典中尉次男保典少尉を言ふ。長男の勝典中尉は南山攻擊の際に壯烈な戰死を遂げ、次男保典少尉は二〇三高地の戰闘に戰死した。　**閣下**　高位・高官の人の名宛の下に添へる尊稱。因話錄に"古者三公開レ閣、郡守比二古諸侯一亦有レ閣、故皆稱二閣下一"とある。近時陸海軍人の間には、少將以上の人の對稱代名詞に用ひる。　**死所を得たるを**　死所は死ぬべき場所。軍人としての死所は戰場で有るから、戰死が即ち死所を得た譯である。　**武門の面目**　武門は武士の家筋。面目は人に合はせる顏、即ち世に立つて譽を保つの意。　**我に愛する良馬あり**　此の良馬はアラビヤ產の一駿足と純血種の一馬で、兩馬共に逸物であつた。　**軍のおきて**　軍律を言ふ。　**いたはり**　いたはしがつて取扱ふ。あはれみをかく。ねんごろに扱ふ。大事にする。　**握手**　洋式の禮法で、互に手を握り合つて親密の意を表すこと。

資料

參考

乃木・ステセル兩將軍の會見（日露戰誌）

旅順要塞司令官露國侍從武官ステッセル將軍は、開城規約調印後、日本攻圍軍司令官男爵乃木將軍に見を求め、一月五日水師營なる第一師團衞生隊の營舍にて會見すべき承諾を得たり。同日早朝、軍參會謀津野田少佐はステッセル將軍を導くべく其の官邸に至り、午前十時四十分、同將軍はレース少將、參謀勤務コルチエン中尉、副官某中尉及び從騎若干を從へて水師營に到着せり。午前十一時三十分、乃木軍司令官は參謀長伊知地少將、川上遼東守備行政事務官、參謀安原大尉、副官松平大尉及び傳騎若干を從へて、柳樹房の司令部より會見場に到着し、直ちにステッセル將軍を引見せり。乃木將軍曰く、由來各其の本國の爲め交戰に從事したるもの、當方面に於ける敵對行爲熄みたる今日に於て、閣下と玆に會見するは予の最も喜ぶ所なり。ステッセル將軍曰く、予もまた祖國のために旅順要塞を防守したるも、

既に開城を決せし今日、閣下と會見するの機を得たるは深く予の光榮とする所なり。乃木將軍曰く、我が天皇陛下は、閣下が祖國のために盡されたる勳功を嘉したまひ、閣下に武士の體面を保たしむることを望ませらるゝ旨、予に詔勅を傳へ給へり。將軍曰く、貴國の天皇陛下より此の如き恩命を蒙ること、予が無上の光榮とする所、願くは閣下より予の深厚なる謝意を陛下に傳奏せられたし。予はまた閣下が發電を許可せられたるにより我が露國皇帝陛下よりも、旅順口の防禦を感謝すとの電報を受取れりと。次で乃木將軍は、其の幕僚をステッセル將軍に紹介し、ステッセル將軍も、乃木將軍に其の幕僚を紹介し、是より雜談に移り、ステッセル將軍は攻擊の末期特に二龍山・松樹山兩砲臺の攻擊の場合に於ける我が諸砲兵の部署良好にして、其の射法の卓越なりしを稱揚し、砲兵司令官の氏名を問ふ。乃木將軍答ふに豐島少將なるを以てしたるに、將軍は副官に命じて氏名を記錄せしめぬ。又ステッセル將軍は、日本工兵の勇敢不撓にして、其の任務に忠實熱心なる、天下無比なりと賞讃し、二十八珊砲の火力偉大にして、該砲の出現以來、全然防禦計畫を無效ならしめたる事を說けり。乃木將軍は、露兵の抵抗力偉大にして、防禦法の周密なるを賞揚せしに、將軍は要塞の防禦計畫は第七師團長コンドラテンコ將軍の功に歸し、工事の實施は、工兵部長エルマン大佐之に當りしが、不幸にして去る十二日の夜、東鷄冠山北砲臺内において防禦會議中、二十八珊砲彈のため、他の七名の將校と共に戰死せしことを悼めり。かくてステッセル將軍は容を正して曰く、聞くところに依れば、閣下は當方面の戰鬪に於て其の二子を失はれたりと。洵に敬悼の至りに堪へずと。乃木將軍曰く、予は二子が武人として其の死處を得るを喜ぶ。即ち長子は南山に於て戰死し、次子は二〇三高地の戰鬪に斃死せり。彼等も武士の家に生れ、花々しき

戰場に於て國家の犧牲となりし故、必定滿足して瞑せしならん。ステッセル將軍曰く、閣下は人生の最大幸福を犧牲に供し、毫も哀悼の色なく、却つて二子の死處を得たるを喜ばる、眞に天下の偉なり。予等の遠く及ぶ所にあらず。乃木將軍曰く、閣下には子息なきや。ス將軍曰く、一子あり、近衞士官として露都にあり。此戰役に參與せず。目下弊屋にある五人の子供は、戰死將校三名の遺子なり。予が妻は彼等の養育者なきを以て、我が子の如く慈愛せり。ス將軍更に語りて曰く、予に亞剌比亞產の一駿足と純血種の一馬あり。後刻閣下の一覽に供せん。二馬何れも逸物なり。今記念として閣下に贈らんと欲す。若し受領せらるゝを得ば、何の喜か之に如かん。乃木將軍曰く、芳志多謝す。然れども、直ちにこれを受領せんは軍紀の許さゞる所なるを以て我が委員に引渡されたし。然る後相當の手續を爲して予之を受領し、閣下の希望を充たすやう何時までも愛養すべし。予が家は代々武人にして、軍馬とは密接の關係あり。殊に予は愛馬癖あり。之を視ること家族に同じ。然るに予は昨年の夏愛馬一頭を喪へり。彼は日清戰役の當時予が乘用にして、二回の敵彈を蒙れる愛馬の遺子なりしなり。今閣下の愛馬に於ける心を酌量して、うたゝ同情に堪へず。乃木將軍又曰く、當方面には貴軍戰死病歿者の墳墓所々に散在す。予は將來爲し得る限り、一團に取集め、認識を明にして湮滅を防がんと欲す。若し之につき閣下の希望あらば聞かん。ス將軍曰く、閣下は是等の點まで其の注意を拂はるゝか、厚意謝するに辭なし。予が閣下の聽を煩はすべきは東鷄冠山北砲臺の西南方に小丘あり。名づけてロマンの山といふ。コンドラテンコ將軍の名に因みしなり。此の地に同將官以下北砲臺にて同時に戰死せし將校八名の墓あり。若し之を保護せらるゝを得ば、幸甚。乃木將軍曰く、貴意正に諒せり。ス將軍曰く、予は北淸事變に於て、

貴國の山口・福島諸將官と行動を共にし、能く貴軍の眞價を知れり。不幸にして今回干戈相見るに至りしは、最も遺憾とする所。願はくは將來敵者として相見るなく、同盟者として行動するを得ん。乃木將軍曰く、果して然る場合に至らば、貴軍の兵は世界中最大にして、我が兵は最小なり。形態上に於て一種奇觀を呈すべきも、實力に至つては甚だ强大なるべしと思惟す。ス將軍曰く、眞に然り。眞に然り。予は衷心此の感想の事實となりて顯はれんことを希望す。乃木將軍曰く、予は日露兩國の平和克復後閣下と再び一堂に會し、快談を試むるの期一日も速ならん事を希望す。ス將軍曰く、予も亦衷心之を切望す。是より簡單なる晝食を畢へ、記念の撮影をなし、ス將軍は其の乘馬を引出さしめ、自ら乘りて駿逸の狀を乃木將軍に示せり。午後一時二十分、其の別を告ぐる時、乃木將軍はス將軍の從騎にして胸間に勳章を佩用せる者を撫し、其の歴史を問へば、從騎之を名譽として、最敬禮を施し、ス將軍は彼が北淸事變に於て勳功ありしことを說けり。歸途亦津野田參謀を同行せしめしに、松樹山補備砲臺下の河磧に至り、ス將軍は其の幕僚を留め、津野田參謀を顧みて曰く、先に庭前狹隘にして步度を出さしむるを得ざりき。今貴官に示さん。願くは乃木將軍に委細復報せられよと、馳驅縱橫、數回にして自邸に復り、津野田參謀の勞を謝し、乃木將軍の好意を喜び、更に曰く、予は今日始めて乃木將軍に會せしが、忽ち竹馬の舊友に再會したる如き心地す。渠は眞に良將軍なり。貴官は此の如き好將軍を首長司令官とす、洵に一代の幸福なりと。幕僚もまた異口同音に乃木將軍を讃して曰く、將軍は威あり、德あり、且涙あり。眞に畏敬すべき好將軍なり。我々始めて溫容に接し、一種異樣の感に打たれたり。其の或點に於て我がス將軍に酷似せる所も亦奇ならずや、と。

指導精神

舊讀本の再錄であるが、原作はたしか佐々木信綱博士で有つたと記憶する。詩としては傑出したものでは無いが、一個の叙事詩として人情の至美を歌ひ、正義人道に國境の無い事を物語つた點に捨て難い趣がある。場面は當時會見の現場に在つた津野田是重少將の『斜陽の鐵血』が一番確實である。

一月五日　快晴、乃木大將は起床後直に大本營に向ひ、ステツセル中將の旅順退去に關しては成し得る限り、其の翼望を滿足せしめられたしと請電せしめられた。午前八時軍參謀長伊地知少將、軍參謀安原大尉、軍副官松平大尉を從へて軍司令部を出られる筈であつたから、予（參謀津野田是重少佐、後の津野田少將）はステツセル中將を案內し、且つ之を護衞する爲め午前七時に發程して先行したが途中乘馬に故障ありし爲め、午前十時少時前ステツセル邸に到達したが、此の時中將は既に出發後であつたから、直に引還して疾驅したが、復た馬匹に故障を生じた爲め漸く水師營の入口に於て追及する事を得た。ステツセル中將は午前十時五十分會見場に到達せられたが、乃木大將の一行は未だ見えなかつたから、予は內心大に怯怩たるものがあつたが、態と平靜を裝ひ、先づ下馬して一行を露軍の控所に充てたる屋房に案內したが此の時恰も我軍の管理部長渡邊砲兵少佐（滿太郎）來著せられたから、其の援助に依り漸く若干の炭火と、茶菓を供することを得た。之より鶴首して將軍の來著を待つたが、午前十一時三十分に至り、漸く將軍の馬首を認めたから、予は倉皇飛出して事情を具陳し、直に會場に入られん事を懇請した。將軍は快諾せられたるも、軍參謀長は

不滿の色ありて、容易に動かれず、予は頗る窮縮した。幸にして將軍が會見場に歩を向けられたから、無事に解決することを得た。是に於て兩軍首將の歴史的會見は、午前十一時三十五分序幕することゝなり、予はステッセル中將を會見場に誘導して、大將に紹介したるに大將は手を延して握手を求めつゝ川上事務官の通譯を以て

由來祖國の爲め死力を盡して交戰に從事したるが、此の方面に於ては最早對敵行爲終熄したる此の機會に於て閣下と會見するは予の深く欣幸とする所である。

と挨拶せられたるに對しステッセル中將は

予も亦祖國の爲めに今日まで旅順要塞を防守したるが、開城の此の機會に於て閣下と會見するは誠に光榮とする所である。

と應酬せられ、次に乃木大將は莊重なる態度を以て

我が　天皇陛下は閣下が祖國の爲めに盡されたる忠勤を嘉賞し賜ひ、武士の體面を保持せしむべく予に勅命あらせられた。

と傳へられたが、ステッセル中將は

貴國の　皇帝陛下より此の如き優遇を蒙る事は、予に取りては無上の名譽である。願くば閣下より予の衷心よりする深厚なる謝意を電奏せられたし。

と先づ謝意の奏上を依囑し、更に口を開いて

予は又閣下の寛大なる取計（電報の取扱を許可せられたる事を指す）に依り、我が皇帝陛下より

も旅順要塞守防の勞を感謝するとの勅電を拜受した。

と附加し終つてステッセル中將は、數歩後退して其の隨員たるレイス少將、參謀勤務マルチェンコ中尉、副官ニエヴエルスコーへ中尉を紹介し、乃木大將は參謀長伊地知少將、參謀安原大尉及副官松平大尉を紹介せられた。次で粗末なる急造の方卓を挿んで、相對し双方隔意なき態度を以て雜談に移り、今度はステッセル中將口を開き

攻城の末期卽ち二龍山・松樹山の攻擊に際し、日本軍輕重兩砲兵の部署良好にして、目標の分配射擊の實施卓越なりし事を稱揚して、攻城砲兵司令官の何人なりしかを質問せられたるに對し、乃木大將は豐島少將（陽藏）にして、最初より最後まで交迭したる事なし、と答へられたが、ステッセル中將は、驚異の眼を以て

予は全く別人と思惟したるに事實は變化なかりしか、日本人の頭腦は實に柔軟にして克く時に從つて變化するものである。

と獨語しつゝ、ニエヴエルスコーへ副官に命じて、豐島少將の氏名を筆記せしめ、一轉して我工兵隊の勇猛果敢なる動作に及び、不屈不撓にして職務に忠實なること恐らく天下に比類なからんと頌讃し、再轉して二十八珊砲の威力に移り、此の砲の出現以來露軍の防禦計畫は全然破壞せられた、と告白した。次に乃木大將は對照的に露軍の防禦計畫の優良にして、工事の完備したる事を賞讃せられたが、ステッセル中將は大體の計畫は第七師團長コンドラテンコ少將之を作爲し、細部の工事は某工兵大佐の擔任に屬したる事を告げ、悄然として兩人は他の將校七名と共に、昨年十二月十三

日北堡壘の咽喉部に於て防禦會議開催中、貴軍の二十八珊砲彈落下し、同時に全部戰死した。仍てコンドラテンコ少將以下の遺骸は、同砲臺の東北方小丘上（露人は之をロマンの山と呼ぶ、蓋しコンドラテンコの小名に因する由）に埋葬したり。願くは全般の戰爭終結するまで保存せられたしと懇願したる後、遽かに容を改めて

聞く所に依れば、閣下は當方面の戰場に於て、最愛の二子を喪はれたとの事である。眞に御同情に堪へぬ。

と述べられたるに對し、乃木大將は平然として微笑を湛へつゝ

予は二子が武門の家に生れ、軍人として共に其の死所を獲たる事を悦ぶ。卽ち長子は南山に斃れ次子は二〇三高地に於て戰死した。斯の如く彼等兩人は共に國家の犧牲と成つたから、獨り予が滿足する許りでなく、彼等自身も多分滿足して瞑目しあるならむ。

と應酬せられたから、ステツセル中將は愕然として

閣下は人生の最大幸福を犧牲にして、毫も愁嘆の色なく却て二子が死所を獲られたことを滿足せらる、眞に天下の偉人である、予等の遠く及ぶ所でない。

と述べ、須臾らく感嘆措く能はざる容子であつたが、予は其の光景を目擊して決して通り一片の世辭ではないと觀察した。

次で乃木大將は

閣下には御子息なきや。

と反問せられたるが、ステツセル中將は

一子あるが目下近衞軍團の步兵中尉として、露都に勤務し本戰役には參加せず。開戰の當初、彼は極東に來らんことを切望したが、元來本戰役は予の囑望したる出來事ではなかつたから、勅命に非ざれば自ら求めて來るべきでないと戒飭したから、今尙ほペテルブルグに在る。目下弊屋に敢容しある六人の子女は、何れも戰死將校三名の遺子である。不幸にして彼女等には保育者が無いから、我妻は實子の如く愛撫して居る。

と餘計な事まで說明せられたが、暫くあつて中將は話題を轉じ

時に予はアラビヤ種の一駿馬を有するが、後刻閣下の觀賞に供すべく頗る秀逸なりと信ずるが、願くば記念として閣下に獻上したし、幸に之を甘受し愛養せらるゝを得ば予の慶幸なり。

と提唱せられたるに對し、乃木大將は暫く默考の後

閣下の厚意は深謝するも、馬匹は武器の一なるを以て直接拜受するを得ず、仍て一先づ我馬匹委員に引渡されたし。然る上は正式の手續を履んで、必ず之を引入れ閣下の御翼望を充すが如く、永く愛養すべし。

と答へられたが、此の間双方の意志十分に疎通せず（先決問題としてステツセル中將の私有物と思惟するに對し、乃木大將は官有物として取扱はんとせられたるを以て）ステツセル中將は『何故予の眞意を解せず、直接實物を受領する事を好まれざるや』等の奇問も出たから、乃木大將は更らに其の理由を詳細に說明して

我家は累代武職であるから、馬匹には密接の關係を有する。特に予は乘馬を視ること恰も我家族の樣である。然るに不幸昨年の夏予の鐘愛したる軍馬は突然斃死したのである。元來此の馬は日清戰爭中予が戰場を驅馳したる際、敵の二彈を受けて能く之を堪へたる愛馬の遺仔にして、其の飼養には居常特に注意せしめたにも拘らず、如上の最後を遂げた。爾來予は心中快々として樂まぬ所あるが、今閣下の愛馬に對する心中を承り、洵に御同情に堪へぬ。仍て規則の爲め今直接には受領すること能はずとするも、一度我委員の手に於て整理したる後は、必ず成規の手續を履み之を我乘用に曳き入れて閣下の御希望を充すが如く慈育愛撫すべし。

と反復丁寧に說明せられ、川上事務官も亦其の意譯に努めたから、中將も漸く乃木大將の意を諒として

然らば受授の方式如何に係らず、閣下が之を曳き入れて永く愛養せらるゝに於ては予の本望は達するのである。

と結んで問題の乘馬に關する對話は終つたが、乃木大將は方向を轉じて

當方面には多分貴軍死沒者の墳墓諸處に散在しあるならん。予は爲し得れば之を一地に蒐めて、各別に標識を附し其の所在及氏名を明かにしたいと思ふ。若し本件に關し何か他に御翼望あらば承らむ。

と切出されたるに、ステツセル中將は

閣下は實に死者の事にまで注意せらるゝか、厚意謝するに詞なし。予が特に閣下の記憶に存せら

れん事を懇請するものは、前にも陳述したるが如く、東鷄冠山北堡壘の西南方小丘上に在る、コンドラテンコ以下八名の墳墓を確實に保存せられたきことである。

と繰返されたから、乃木大將は欣然之を快諾して、『貴意正に諒す、必ず十分の保護を與ふべきを以て安心せられたし』と答へられた。ステツセル中將は低首以て謝意を表し終つて『予は北淸事變中、貴國の山口・福島諸將軍等と行動を共にし、克く日本軍の眞價を知悉するが、不幸にして這般干戈相見ゆるに至つたのは、深く遺憾とする所である。願くば此の戰役を以て、日露兩國紛爭の終末として將來は永く盟邦、良友として進退行動を共にしたし』との翼望を陳べられたから、乃木大將も之に和唱して

予も貴見の如く、將來は友好關係の實現せん事を切望する。果して然らば貴國人は體軀長大にして防禦に長じ、我日本兵は倭小なれども進取の氣象に富む、卽ち外觀は奇體なる對照を表はすべきも、實力に於ては恐く天下に敵する者なからむ。

と微笑せられたが、露將も之を是認して『眞に然り、眞に然り』と數回繰り返したる後、『予は衷心此の感想の一日も早く實現せん事を希望す』と應酬されたから乃木大將は『先決問題として日露國交の早く恢復して、閣下と再び一堂に會すべき機會の現出せん事を望む』と結び、ステツセル中將は『閣下の御意見は全く同感で在る。予も亦衷心之を切望する』との挨拶を以て、兩軍首將の對話は終了した。時に午後零時十五分にして之より我管理部の準備したる午餐を共にしたが、和氣靄々として對敵兩軍司令長官初度の會見らしき所は少しも見えなかつた、食事は約四十分にして濟み

次で中庭に出でて記念の寫眞を撮影せしめ、終つて將に別れんとする際、ステッセル中將は突然其の從卒に命じて例の乘馬を曳出さしめ、自ら騎乘し速歩、驅歩等の實況を大將の閲覽に供すべく試みられたが、場所狹小にして馬匹の運動意の如くならず、不滿足の裏に下馬せられた。此の時轡を取り馬首を捧持したる一兵卒の胸間に、ゲオルギー勳章の燿くを見て、乃木大將は進んで其の肩を撫しつゝ、受勳の由來を質されたが、露兵は茫然として答ふる所を知らなかつたから、ステッセル中將は歩を返して、説明の勞を取り『北清事變の勳功を以て拜受したる』旨を述べられた。次で午後一時二十分兩將軍は慇懃に握手を交換して、告別せられ、予は命に依り再びステッセル中將を其の官邸に送るべく乘馬にて一行の先頭に立ち、松樹山下の河原に達したる時、中將は俄然予に停止を命じ、『先刻は中庭狹小にして、眞の駿度を出さしむるに由なかつたから、今此の廣場に於て駿逸の實況を示すべし』とて數回に亙りて、各種の運動を行ひ予を顧みて『願くば此の情況を詳細に貴軍司令官へ報告せられたし』と言ひ、終つて再び行を起し、午後三時三十分頃其の官邸に達せられたが、馬より下り玄關に入らるゝや、其の夫人は忙しく之を迎へて先づ乃木大將に對する感想を尋ねられたるに、中將は

今日始めて乃木大將に會うたが、全く從來の對敵關係を忘れ、恰も竹馬の舊友に再會したるが如き心地した。乃木大將は眞に好箇の武人である。

と應酬しつゝ室内に入り、改めて予に茶菓を供して送迎の勞を謝し、復た數十分間雜談に時を移したが、此の間ステッセル中將は其の夫人に爲したる言を予に繰返しつゝ最後に

乃木大將は眞に天下の名將である。斯の如き良將軍を首長に仰ぐ貴官は、實に一代の果報者で在る、必ず大切に奉仕すべきである。

と訓誨的に一言を與へられたが、續いてレイス少將は

乃木大將は、白髮童顏にして威嚴正しき内に溫容具さに備はる眞に好箇の良將軍である。予は本日初めて其の風貌に接し、心中深く敬虔の念を浮べた。

と其の所感を述べ終るや、ステッセル夫人は突如として、予に向ひ

左樣に善き將軍なれば、妾も一度拜顏したし、仍て食事に御招待すべく、午餐なり晩食なり、適宜御來駕下さる樣取計らはれ間敷や

との相談を持掛けられ、予は一寸返答に困つたが、實行は到底不可能と思うたから

御厚意の趣旨は、正に乃木大將に御取次申すべきも、何分御多忙で在るから、實行は餘程困難であらうと思ひます。

と御茶を濁して、僅かに其の場を切拔け、匆々告別して中將の居室を出たが、玄關まで予を伴うたる、マルチェンコ中尉は耳語的に

乃木大將の性行は未だ詳しくは承知しないが、血あり、涙ある良長官にして、或點に於ては我ステッセル中將と酷似する所ある樣に見受くる。

と言つたから、予は『或は然らむ、故に本日の會見も頗る愉快に、且つ無事に終了したのである』と殘して馬首を北に向けた。

以上は、今後も必ず機會ある毎に、世人の話題に上るべき乃木・ステッセル兩將軍會見の顚末であるが、予は責任を以て記事の正確なる事を保證する。

と、必讀に値する好資料であらう。

昨日迄は戰雲旅順の天地を被ひ、彼我の打出す砲聲は殷々轟々として物凄く、阿鼻叫喚慘絶悲壯の限を盡して居たのが、今日は全く靜寂の天地に歸り、今の今まで敵味方に分れて睨合つて居た兩軍の司令官が、互に手を取つて談笑を交へたと言ふ、嚴肅と言はうか莊嚴と言はうか、會見其の物が既に立派な詩だ。昨日の敵は今日の友、ステッセル將軍が我軍の勇敢な行動を讃嘆すれば、乃木將軍はステッセル將軍の防備を奬賞される。人間と人間との溫かい握手、何たる美しい場面であらう。國と國との間には幾十萬の生靈を犧牲として流血の慘を敢てした者も、個人と個人の間では異邦人でも共通した尊い感情が流れて居る。人類愛には全く國境が無い。

旅順の堅壘は露國が世界で一番築城術に進歩して居ると言ふ白耳義の優秀な技師の設計に依つて、數億圓の經費と十數年の歲月を費して完成した東洋第一の堅壘であつた。當時各國の觀戰武官なども、此の堅壘を陷落させるには何うしても數年を要すると觀測して居た。然るに乃木將軍はそれを立派に裏切つて、僅々七ヶ月を以て開城の已むなきに至らしめたのである。旅順の陷落が日露戰役の運命を左右したと言はれる程、我の軍の策戰上に大きな意義を有して居る。

指導形態

指導上の認識點

1　本課の精神とする所は旅順開城當時の事情を知らせ、會見の際の兩將軍の心境を想察させるに有るが、其の中心は我が大君の限り無き御惠の程を偲ばせ、皇恩の廣大さに感激させるにある。

2　此の詩を中心に前後を補說し、明治三十七八年戰役の大體を考察させ、現代日本の素晴しい躍進振を認識させる事も必要缺ぐべからざる心構である。

3　篇中『この方面の戰鬪に二子を失ひ給ひつる』の句は、是又多少の補說を要するであらう。尙結句の『ひらめき立てり日の御旗』を强く印象させ、祖國愛の心情を旺盛にし國家意識を養ひ、國民的情操を培ふ事を忘れてはならぬ。

4　本課は大體三時間見當で指導を纒め度い。

第一次指導

1　題目の指導

▽會見に至る前後の事情を簡單に補說する。

2　徐に一回通讀させる。

▽視寫又は聽寫させてもよい。

3　讀後の印象を話させる。

▽紙片を與へテスト式に筆答させても良い。

4　不明の箇所を質問させる。

▽新出文字は板書して指導する。

開　彼　閣　受

▽難語句は隨所に指導する。

開城　約成り　いづこ　いちじるく　民屋　おごそか　大みことのり　かしこみて　謝しまつる　うちとけて　たゝへつ

防備　戰鬪　閣下　死所　武門の面目

つきせぬ　獻ず　厚意　おきて　受領

いたはり　握手　ねんごろ　砲音　砲臺

ひらめき立てり。

▽個有名詞は引離して入念に指導する。

水師營　旅順　ステッセル　乃木大將

なつめの木

5　數回繰返して默讀させる。

▽場面や兩將軍の心境を想像させて。

6 話合。

▽把捉した詩境を中心に。

7 範讀。

▽觀點に力を込めて。

8 指名讀。

▽一聯づゝ、輪讀式に。

9 文と挿畫を照合させる。

▽何處を畫にしたものか、本に何う出て居るか等。

10 低音讀。

▽場面や詩境を頭に描かせて。

第二、三次指導

1 全詩の聽寫。

2 讀合。

▽讀合せと同時に語句を吟味する。

3 一度靜かに通讀させる。

▽詩心や詩情を汲ませて。

4 逐次研究。

▽頃合を見て要點を板書する。

時　開城規約成立の翌日

所　水師營の民屋

人　旅順攻圍軍司令官　乃木大將

關東要塞區司令官　ステッセル將軍

其の他各隨員多數

乃木大將

御惠深き大君の大みことのり傳ふれば

我はたゝへつ、彼の防備

二人の我が子それ〴〵に、死所を得たるを喜べり。これぞ武門の面目

厚意謝するに餘りあり。軍のおきてにしたがひて、他日我が手に受領せば、長くいたはり養はん

さらば

ステッセル將軍

彼かしこみて謝しまつる

彼はたゝへつ、我が武勇

此の方面の戰鬪に、二子をうしなひ給ひつる閣下の心如何にぞ

我に愛する良馬あり、今日の記念に獻ずべし

さらば

5 書取。
▽板書事項を書取らせる。
6 話合。
▽詩情を中心に。
7 對譯練習。
▽一句づゝ口語に對譯させる。
▽時には教師が示範して。
8 詩形の吟味
▽既習の詩形と比較させて。
9 範讀。
▽一回範讀してから追讀させる。
10 全詩を散文化させる。
▽詩意を味ひ詩情を汲ませて。
11 全詩の暗誦・暗寫。
12 歌謠化練習
▽唱歌と連絡させて。
13 新出文字の書取。
14 語句の應用練習。
15 ラスト。

テスト問題

一、次の詩を讀んで後の問に答へなさい。

乃木大將はおごそかに
御惠深き大君の
大みことのり傳ふれば
彼かしこみて謝しまつる

1 どんな大みことのりでしたか。

2 大みことのりを傳へる時、乃木大將はどんな態度をお取りに爲りましたか。
3 大みことのりを傳へると、ステッセル將軍はどうしました。
4 此の詩を讀んで感じた事を書いてごらん。

二、次の——線の箇所を拔書きして、其のわけを書きなさい。

昨日の敵は今日の友
語る言葉もうちとけて
我はたゝへつ彼の防備
彼はたゝへつ我が武勇

三、次の書取をしなさい。

1 カイジヤウ（　）
2 ダングワン（　）
3 ミンオク（　）
4 ハウメン（　）
5 セントウ（　）
6 カクカ（　）
7 メンモク（　）

8　リヤウバ　（　）
9　ジユリヤウ　（　）
10　アクシユ　（　）

第十六　張良と韓信

張良と韓信は共に支那の先覺では有るが、史記や十八史略に依つて古來我が國民の間に傳唱あれ、今や全く我が民族性に同化して居る。

前者は隱忍自重の師表として、

後者は耐忍忍受の好き模範として、

東洋の大衆を敎化する事實に千數百年、殊に我が室町時代の末期に十八史略が傳へられて以來、幾多文武好學の士の間に張良を範とし韓信を學んで以て自ら戒め自ら實踐し、世道人心を善導した感化の力は眞に偉大なものがある。

文も純然たる漢文調で、簡勁雄渾、含蓄に富んだ點は尙捨て難い趣がある。現代語と比較させ語感を味せるのも指導者の忘れてならぬ一面であらう。

挿畫の印象と其の說明

九十四頁の挿畫は張良と黃石公、勿論想像畫であるが昔から殆ど一定した圖柄が出來て居る。今跪いて沓を捧げる場面で、黃石公の左の沓が脫けて居るのも注目に値する。南畫風の山や草木も漢時代の風俗に想戀しい。

黄石公が右手に持つのは德杖、又自然杖（ジネンヂヤウ）とも言ふ。長袖緩帶は長者の風で、如何にも隱者らしい風格を偲ばせて居る。張良が佩いた劍は考古學上發掘品等で能く見る青銅造の兩刄、太古我が國の神々が帶びたのと同樣、無反直刀で鍔が小さい。

九十六頁は人も知る韓信の胯潛り、菊池容齋の前賢故實に據り胯間に屈して天下に伸ぶの趣を見せたもの安土城の本丸襖障子にも信長が此の繪を描かせたと言ふから、我が國に傳はつたのも餘程久しい昔の事であつた事が想像される。衆辱する徒輩は所謂淮陰居中の少年で、屠中は獸類を屠殺する賤民の部落、畫面にも其の風態が思はせて居る。韓信は後年出世して淮陰侯と爲り、此の胯を潛らせた少年を少尉に擧用したと史記に見えて居る。

發音アクセント

ダイジュウロク　チャウリャウトカンシン

ハクハツノイチラウジン　ヒロヒキタレ　ブレイヲイカリシガ

クツヲヒロヒキタリテササグ　ヲシフルニタルモノ　イツカメノアサ

シッシテイハク　チャウシャトヤクシナガラ　ヤクソクノヒ　アカツキニオキテ

ヤハン　イックゥンノショ　テイワウノシ　ヨニモエガタキ　ヘイショ

ヘイハフニセイツウセリ　チャウケンヲオビテ　ブライノセウネン

シンタイチャウダイ　シカラズンバ　ハラバイテマタヌクグル　カンノカウソ

ウチニハカリゴトヲメグラシ　ソトニヘイヲモチヒ　イヅレモタイコウヲタテ

ナヲコウセイニカガヤカセリ

【注　意】

（1）又　ヤハン。　（2）又　ショ（平）　（3）普通　テエオオと發音する。

文字語句

新出文字

髪

讀替文字

足　叱（新出は卷六　シカラレ）　東　卷　夕　賴　好

然（新出は卷九　ゼン）

語句と其の解說

張良　字は子房と言ひ、漢の高祖に仕へ、蕭何・韓信と共に三傑の一人である。　**橋上**　下邳の

圯上。圯は橋に同じ。　**白髭の一老人**　世に黄石公と言つて居る。それは老人の語に〝異日見二濟北穀城山下黄石一卽我也〟とある所から言つたものであるが、其の實何人であるか審かでない。

長者　年かさの人。年長者。又目上の人。德の高い人。ちやうざ。　**曉**　あかとき(明時)の轉。夜の明ける頃。あけがた。よあけ。　**帝王の師**　王者の師匠。　**兵書**　所謂六韜三略である。六韜は太公卽ち太公望呂尙の撰と傳へる兵書、文韜・武韜・虎韜・豹韜・龍韜・犬韜の稱。簡明目錄に〝六韜六卷、舊本題周呂望撰、其文義不レ類二三代一、蓋因二莊子金版六弢之語一而附會成レ書、陸德明莊子釋文謂、太公六韜、文・武・虎・豹・龍・犬也、則其僞在二陳隋以前一矣〟とある。太公望は東海の人で兵法に精通し、周の武王の軍師と成つた人である。六韜三略は太公望の此の六韜と黄石公の著なりと傳へる上略・中略・下略の三卷を言ふ。律疏に〝兵書、謂太公六韜、黄石三略之類〟とある。兩來兵書の王座を占め兵家の虎の卷として後世に傳へたもの。　**韓信**　淮陰の人、漢の高祖に仕へ、蕭何・張良と共に漢の三傑と並稱された。十八史略に〝連二百萬之衆一、戰必勝。攻必取。吾不レ如二韓信一〟とある。　**市中**　市井に同じ。淮陰の市中を言ひ、今の江蘇省淮安府清河縣の東南五里の地に在る。　**無賴の少年**　無賴漢の意。無賴は放埒で賴みにならぬこと。一定の職業無き浮浪の徒。ならずもの。無法もの。ごろつき。史記には屠中の少年とある。屠中は獸類を屠殺する賤民の居る所。　**漢の高祖**　漢は支那の國號で、我人皇第八代孝元天皇の御代に相當する。漢の高祖は漢の第一世で大祖高皇帝とも言ふ。姓は劉、名は邦、字季。沛の豐邑中陽里の人。鼻高く龍顏で美鬚髯が有つた。人と爲り寛仁大度、能く人を愛した。秦王の亂に乘じ泗上の亭長から身を起して沛公と成り、兵を擧げ

て秦王嬰を降し漢王と成つた。楚王項羽と天下兩分して覇を爭つたが、後楚を滅し天下を一統して皇帝の位に卽いた。在位十二年、齡五十三にして崩じた。　**內にはかりごとをめぐらし**　別項の〝運二籌帷幄中一。決二勝千里之外一。吾不レ如二子房一〟の故事に據つたもの。　**外に兵を用ひて**　之も別項の連二百萬之衆一云々の故事を引用したもの。蓋し漢楚の爭覇は東洋歷史の華とも言へよう。

資料

原據

圯橋捧履（十八史略）

張良少時。於二下邳圯上一。遇二老人一。墮二履圯下一。謂レ良曰。孺子下取レ履。良欲レ毆レ之。憫二其老一。乃下取レ履。老人以レ足受レ之。曰孺子可レ教。後五日。與レ我期二於此一。良如レ期往。老人已先在。怒曰。與二長者一期。後何也。復約二五日一。及レ往老人又先在。怒復約二五日一。良半夜往。老人至。乃喜。授以二一編書一。曰讀レ此可レ爲二帝者師一。異日見二濟北穀城山下黄石一。卽我也。且視レ之乃太公兵法。良異レ之。晝夜習讀。

韓信出胯下（十八史略）

初淮陰韓信。家貧。釣二城下一。有二漂母一。見二信饑一。飯レ之。信曰。吾必厚報レ母。母怒曰。大丈夫不レ能二自食一。吾哀二王孫一。而進レ食。豈望レ報乎。淮陰屠中少年。有二侮レ信者一。因衆辱之曰。若雖二長大好帶レ劍。中情怯耳。能死刺レ我。不レ能出二我胯下一。信熟視之。俛出二胯下一蒲伏。一市人皆笑二信怯一。

漢三傑（十八史略）

置二酒洛陽南宮一。上曰。徹侯諸將皆言。吾所ヨ以得二天下一者何。項氏所ヨ以失二天下一者何。高起王陵對曰。陛下使二人攻レ城掠レ地。因而與レ之。與二天下一同二其利一。項羽不レ然。有レ功者害レ之。賢者疑レ之。戰勝而不レ予二人功一。得レ地而不レ與二人利一。上曰。公知二其一一未レ知二其二一。夫運二籌帷幄之中一。決二勝千里之外一。吾不レ如二子房一。塡二國家一撫二百姓一。給二餽餉一。不レ絶二糧道一。吾不レ如二蕭何一。連二百萬之衆一。戰必勝。攻必取。吾不レ如二韓信一。此三人者。皆人傑也。吾能用レ之。此吾所ヨ以取二天下一。項羽有二一范增一而不レ能レ用。此其所ヨ以爲二我禽一也。羣臣悅服。

指導精神

支那材料では有るが、張良も韓信も共に東洋思想として昔から我が國民性に同化されて居る。本課の眼目は此の二人が若き時能く小事に忍んで遂に大成したと言ふ人口に膾炙した逸話に讀浸らせ、忍耐の德の重んずべき所以を納得せしめると共に、純漢文調の讀解に習熟させるに在る。特に本課は漢文直譯體で有るから、語句の解釋が適切でないと不徹底に終ろ懸念がある。取扱者は此の點に注意を要する。

張良字は子房、其の先は韓人なり。秦の韓を滅する時、良悉く家財を以て客を求め、秦王を刺して韓の爲に仇を報ぜんとし、力士を得て始皇を博浪沙中に狙擊す。誤つて副車に中つ。始皇大に怒り、天下に索むること十日、竟に獲ず。嘗て下邳の圯に遊ぶ。一老父あり、褐を衣、履を圯下に墮す。顧みて良に謂つて曰く、孺子下りて履を取れと、良愕然として意之を毆たんと欲す。其の老いたる

を愍み、遂に履を取り跪いて進む。老父足を以て之を受け、笑つて良に謂て曰く、孺子教ふべし、後五日平明に我と會せよ。良曰く、諾。平明に良往けば、老父已に先づ在り。怒て曰く、長者と期して後るゝは何ぞや、去て後五日早く會せよ。五日良鷄鳴にして往く。老父又先づ在り。仍ち揮ひ去らしめて曰く、後五日にして早く來れと。良半夜にして往く。頃くありて老父至り喜んで曰く、當に是の如くなるべしと。書一編を出して之を與へて曰く、此を讀まば則ち王者の師たらん、後十二年我を見ん、濟北穀城下の黃石は卽ち我なりと。且に書を視れば乃ち太公の兵法なり。良、晝夜誦讀す。後、少年百餘人を聚む。沛公の地を下邳に略するに遇ひ、遂に屬す。乃ち兵を引いて秦軍を擊ち大に之を破り遂に咸陽に入る。沛公既に秦宮に入り、意に留て之に居らんと欲す。樊噲諫むれども聽かず。良曰く、夫の秦無道を爲す、故に沛公此に至るを得、夫れ天下の爲に殘を除き暴を去る、宜しく縞素資を爲すべし。今始めて秦に入り卽ち其の樂に安んぜば、此れ所謂桀を助けて害を爲すなり、且つ忠言は耳に逆へども行に利あり、良藥は口に苦けれども病に利なり、願くは噲が言を聽けと。沛公乃ち還て灞上に屯す。時に韓王成立つて王と爲る。良、韓に歸して之に相たり。成が項羽が爲に殺さるゝに及び、良復漢に歸す。漢の爲に畫策して項羽を滅し天下を定む。高祖曰く、籌を帷幄の中に運らし勝を千里の外に決するは我れ子房に如かずと。功を論じて封賞するに及び、高祖良をして自ら齊の三萬戸を擇ばしむ。良曰く、臣始め下邳に起り上と留に會す、此れ天、臣を以て陛下に授くるなり。陛下臣の計を用ひ幸にして時に中る、臣願くば留に封ぜられなば足らん、敢て三萬戸に當らずと。乃ち封じて留侯と爲す。漢王の稱する所の三傑、良其の一なり。良曰

く、吾今三寸の舌を以て帝者の師と爲り萬戸侯に封ぜらる、此れ布衣の極、良に於て足れり、願くは人間の事を棄て赤松子に從つて遊ばんのみと。良一日高帝に從つて濟北を過ぎ、果して黄石を得たり。伏臘に塚に上り黄石を祠る。泗水亭に漢の功臣を銘する十八人、良は第三なり。文成と謚す。子不疑、封侯を嗣ぐ。次子辟疆、年十五にして侍中と爲る。

韓信は淮陰の人、貧甚だし。嘗て城下に釣す。漂母憐みて信に飯す。信曰く、吾必ず以て重く母に報ゆるあらん。母怒りて曰く、大丈夫自ら食する能はず、吾王孫を哀みて食を進む、豈報を望まんやと。又嘗て屠中の少年に辱めらる。曰く、子毎に好んで劒を帶ぶ、能く死せば我を刺せ、能はずんば我が胯下を出でよと。信、首を俛し蒲伏して其の胯下を出づ。市人笑つて信を以て怯と爲す。項梁、淮を渡るに及んで、信、劍に仗て之に從ふ。信、數々策を以て羽に干む。羽、用ふる能はず。乃ち間道より漢に歸す。滕公、之を漢に薦む。王以て治粟都尉と爲す。蕭何、與に語りて之を奇とす。漢王未だ重く用ふるに及ばず。信亡ぐ。何自ら之を追ふ。還りて信を王に薦めて曰く、諸將は得易し、信の如き者に至りては國士無双なり。王必ず天下を爭はんと欲せば、宜しく壇を設け禮を具へて信を拜すべしと。王之に從ふ。信既に命を受けて大將軍と爲り、兵を引きて故道より出で、雍を襲ひ、三秦を定め、魏を擒にし、代を取り、趙を仆し、燕を脅し、楚を破り、齊を下し、立つて齊王と爲り、兵に將として垓下に會す。漢の天下を取る大抵皆信の功なり。後徙りて楚王と爲る。信、楚に至り、漂母を召して酬ゆるに千金を以てす。また已を辱むる少年を召して以て中尉と爲し、諸將に告げて曰く、此は壯士なり、我を辱むる時に方りて我寧んぞ、之を殺す能はざらんやと。後、

信の叛を告ぐる者あり。高祖僞りて雲夢に遊び、信を貶して淮陰侯と爲す。後、呂后の爲に殺さる。刑に臨んで歎じて曰く、狡兎死して良狗烹らる、飛鳥盡きて良弓藏る、敵國破れて謀臣亡ぶ、天下已に定まる、臣固より當に烹らるべしと。蕭何、張良と共に、世に漢の三傑と稱せらる。

指導形態

此の種の教材は難かしく言へば東洋思想が一通り分つて居ないと取扱へない。支那には昔から二つの大きな思想の流れがある。其の一つは孔孟の儒學思想で。五倫五常を尊び長幼序ありと言つた差別觀、それに對して今一つは所謂道家の思想で、親も無ければ子も無い、天下は凡て相持だと言つた虚無思想である。此の思想の流れを知らなければ支那（東洋思想）を理解する事が出來ない。本課の如きも此の二つの思想の衝突から出た火花が語句と成つて現れたものと解せられる。卽ち白髮の老人は無差別平等の虚無派、老子や莊子は此の派の先達で、竹林の七賢等は其の亞流である。此の無差別平等な一老人に對して、孔孟の敎に依つて育つた張良が偶然にも橋上で出會つたのである。靴を橋下に落し張良に向かひて『拾ひ來れ。』と言ふ、靴を拾ひ來りて捧ぐ、老人足にてこれを受け、打笑ひて行過ぐ。凡てが行當りばつたりで、先方の身分などは念頭に無い。然し相手は孔孟の敎に培はれ名分を重んずる張良である。見ず知らずの老人が物も有らうに足に穿く靴を拾ひ來れと言ふ、其の無禮を怒つたのも當然である。史記には良愕然として意之を毆たんと欲す。其の老いたるを憐み、遂に履を取り跪いて進むとある。長幼の序を重んじ長者を敬して跪いたのである。勿論之は敎師側の注意で、兒童に知らせる必要は毫もない。生兵法は大怪我の基、深入は絶對に禁物である。

指導上の認識點

1　本課の指導標的は漢の高祖の二良臣張良韓信が若年の頃、隱忍自重能く小事に忍んで大成した美談に感銘させるに在る。

2　二つ共古來傳唱された逸話で、支那材料ではあるが全く我が國民性に同化されて居る。取扱も其點に着目して、我が先賢と同一視し、異國人扱ひするのは絶體に慎むべきである。

3　本課は純然たる漢文調に成り、讀解には稍困難を覺えるかも知れぬが、内容も頗る通俗的で其の核心を成す德目も兒童に直接した忍耐の敎へであるから、形式上の負擔さへ忍べば割合に理解も容易で有らう。從つて主力を此の方面に傾倒し、讀みの障碍を取除く事に專念する用意が肝要である。

4　本課は形式上の負擔もあるから、大體四時間見當で指導を纒めるやう立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1　題目の指導。
　▽挿畫を觀察させ、讀心を唆つてから讀に入るが良い。
2　全課の通讀。
3　ノート作業。
　▽通讀して得た事項を纒めて記帳させる。
　（1）第一印象として得たもの。
　（2）話の大體。
　（3）摑んだ文意等々。
4　新出文字の指導。
　▽質問させて讀める者に讀ませて見る。
　髮　足|叱|束　卷　夕|頼|好|然
5　難語句の指導。
　▽學習の進行に連れ隨所に指導する。
　張良　白髮　無禮　怒りしが　思ひ返し
　捧ぐ　打笑ひて　敎ふるに足る　すでに
　來りて　叱して曰く　長者　約束　曉
　夜半　しばらくありて　一卷の書　帝王
　の師　世にも得がたき　兵書　兵法
　精通　韓信　長劒　無賴　のゝしりて

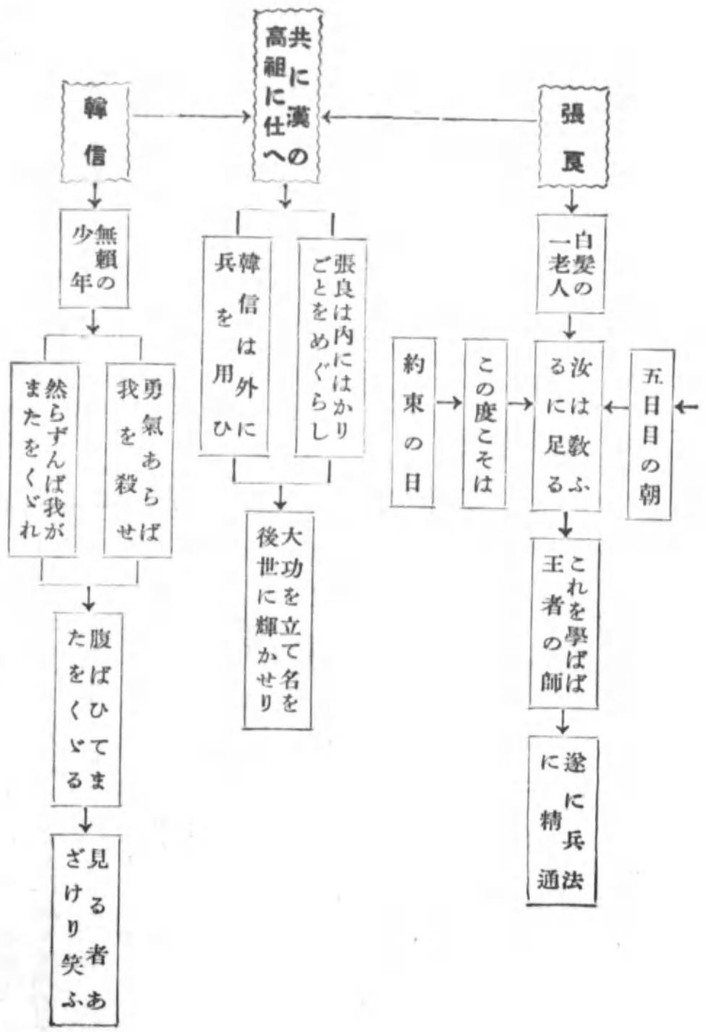
　長大　然らずんば　うちまもり　腹ばひて　あざけり笑ふ　漢の高祖　はかりごとをめぐらし　兵を用ひ　大切　後世
6　反覆通讀させる。
　▽一語々々の意味を考へさせて。
7　話合。
　▽第一印象を中心に。
8　荒筋を摑んで話させる。
9　指名讀。
　▽一句切づゝ、數名に。
10　低音讀。
　▽文語の語義に注意させて。
11　ノートを整理して提出させる。

第二次指導

1　全課の通讀。
　▽個讀に自由讀を交へて。
2　質疑應答。
　▽自由に質問させ難解の語句を確める。
　▽重立つた語句は此方から指摘して理解を確實に爲る。
3　指名說。
　▽全課を一氣に。
4　挿畫を觀察させ文と照合させる。
　▽何處を畫にしたものか、本に何う出て居るか等。
5　低音讀。
　▽文意を考へさせて。
6　話合。
　▽文意を中心に各自の意見を交換させる。
7　逐次研究。
　▽頃合を見て板書で纒める。

靴を橋下に
↓
拾ひ來れ
拾ひ來りて捧ぐ

8 書取。
▽板書事項を文圖の形で書取らせる。



9 繰返して默讀させる。
▽二人の行爲を批判させて。

10 範讀。
▽文の要所に注意させて。
11 低音讀。
▽文語獨得の語感を味はせる。
12 ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1 通讀練習。
▽自由に反覆讀誦させる。
2 指名讀。
▽中・劣生を主として。
3 逐次譯。
▽適宜に輔導して口語に對譯させる。
▽特に語尾の變化に注意させて。
4 譯讀。
▽前項の讀合を兼ねて。
5 輪讀。
▽座席順に。
6 範讀。
▽讀調子に注意して追讀させる。
7 問題學習。
▽文の機構を確め二人の行爲の共通點を研究させる。
8 低唱味讀。
▽文語の語感を味はせて。
9 話方練習。
▽劇的に。
10 劇化實演。
▽學級總掛りで。
11 朗讀練習。
12 全課の暗誦・暗寫
13 新出文字の書取。
14 語句の應用練習。
15 テスト

テスト問題

一、次の片假名を漢字に直しなさい。

1　張良、アルトキ、ケウジヤウにてハクハツの一ラウジンにあふ。
2　ナンヂはヲシふるにタるモノなり。ケフより五日メのアサこゝにキタりてワレをマて。
3　これをマナばば、テイワウのシとなることをエん。

二、次の語句のわけを書きなさい。

1　無禮を怒りしが　　2　得がたき兵書
3　遂に兵法に精通せり　　4　無頼の少年口々にのゝしりて止まず
5　汝、身體長大にして好んで劒を帶ぶ。

三、次の文を讀んで後の問に答へなさい。

後、張良・韓信共に漢の高祖に仕へ、張良は内にはかりごとをめぐらし、韓信は外に兵を用ひて、何れも大功を立て、名を後世に輝かせり。

1　張良と韓信は誰に仕へたか、又其の人はどんな人か。
2　張良はどんな大功を立てたか。
3　外に兵を用ひてのわけ。
4　二人はどうしてこんなにえらくなつたか。
5　此の文を讀んで思つた事を書け。

教材の劇化

張　良

第一場

人物　張　良
白髪の一老人

所　橋の上　机を三脚たてに並べて橋とする。

（幕があくと、下手から張良が出て來る、とすぐ上手から白髪の老人が出て來る。二人顔を見合せる。と其の時、白髪の老人、わざと自分の靴を橋の上から下へ落とす）

老人　おい子供、あの靴を拾つて來い。

（張良むつとするが、ちよつと考へてから下へ下りて、其の靴を拾つて來る）

張良　はい、おぢいさん、拾つて參りました。

（といつてさし出す。老人はだまつて足を出し、張良が捧げた靴を受ける）

老人　はゝゝ。（と大きな聲で笑つて行過ぎる。がすぐ振りかへつて）
お前は敎へがひのある男だ。今日から五日目の朝、こゝへ來てわしを待つてをれ。

張良　はい。（と、すなほに頭を下げてゐるうちに、老人はどこへか行つてしまふ）　（幕）

第二場

時　前より五日後

（幕があくと、もう老人は立つてゐる。しばらく待つてゐると、そこへ張良が來る）

老人　こら、年上の者と約束しておきながら、後れて來るとは何事だ。今日から五日目の朝、も一度早く來い。

張良　どうも相すみません。今度は早く參ります。（と、頭を下げる）（幕）

第三場

時　又、五日目の朝

（幕があくと、老人は立つてゐる。しばらく待つてゐると、張良が出て來る）

老人　こらこら、どうしてそんなにおそいのだ。けしからんやつだ。五日目の朝また出直せ、今度はきつと早く來い。

張良　はい、かしこまりました。今度はきつと早く參ります。（と、頭を下げる）（幕）

第四場

時　又、五日目の朝、まだうすぐらい。星が殘つてゐる。

（幕があくと、張良が一人立つてゐる。しばらく待つてゐると、老人が出て來る）

老人　おゝ、今度は早かつたな。よし〳〵、お前はどこか見どころがある。（といつて、一卷の書を取出し）さあこれをあげよう。

張良　どうも、ありがたうございます。

老人　これを讀んで勉强すれば、えらくなつて王樣のお師匠になる。何べんもくりかへして、みつしり勉强しなさい。

張良　はい、ありがたうございます。

（といつて、ていねいにおじぎをする。やがて頭を上げると、もう老人はどこへか行つて見えない）

あれ、おぢいさんは？（とあたりを見る）どうも不思議なおぢいさんだ。でもいゝ本を貰つてこんなうれしい事はない。早く歸つて勉强しよう。（喜び勇んで歸つて行く）（幕）

またくゞり

人物　韓信

ならずもの　五六人

所　町の中

（幕があくと、ごろつき仲間が勝手な事を言つて、さわいでゐる）

ごろつき一　おい〳〵、妙な男が來るぞ。

ごろつき二　一つからかつてやらうか。

ごろつき三　あれを見ろ、長い劍をひきずつて、いやにゐばつてるぜ。

ごろつき四　えらさうにやつて來たぞ。（と、上手から韓信が出て來る）

ごろつき五　おい、ばかにゐばつてるね。

ごろつき六　見たところ、大きいりつぱな體だな。（と、ながめる）

韓信……（だまつて立つてゐる）

ごろつき一　一たい、どこへ行くんだ。

ごろつき二　どこから來たんだ。

韓　信……（やつぱりだまつて立つてゐる）

ごろつき三　おい、口がないのか。ばかやらう！

ごろつき四　なんのために、そんな長い劔をさしてゐるんだ。

ごろつき五　抜いて見ろ、抜けるなら！

ごろつき六　切るなら、切つて見ろ。

ごろつき一　さあ、勇氣があるなら、おれを殺せ。

一　同　殺せたら、殺して見ろ。

韓　信……（やつぱりだまつて立つてゐる）

ごろつき二　殺せないか、ようし！　ぢや、おれのまたをくゞれ、さあ、くゞれ。

（と、前へ出てまたをひろげる）

（韓信、しばらく見つめてゐたが、やがてごそ〳〵地をはつてまたをくゞる）

一　同　あれ見ろ、いくぢなし、弱虫！

ごろつき三　そのざまは何だ、あはゝゝゝ。

一　同　あはゝゝ。（大笑ひする中を韓信はまたをくゞつてしまふ）

（幕）

第十七　雪の山

清少納言の枕草子から出た優美高雅な宮廷物語である。日一日と解けて行く雪の山に興味の焦點が置かれ、それに絡まる清少納言の感情の動きがいとも細やかに表現されて居る。

枕草子は吉田兼好の徒然草と共に、我が隨筆文學の双璧として國文學上に大きな足跡を印した事は人の知る所であるが、現代語化され物語化された本課の文章では、其の豐かな詞藻の程を窺ふべくも無い。然し悠久平和な藤原時代の宮廷生活や、皇后宮の御寵愛振り、清少納言が女ながらの負けじ魂等が偲ばれ微笑ましいものがある。本卷第一の長篇、心行く迄讀み浸らせ度い。

挿畫の印象と其の說明

九十九頁の挿畫は雪の山の情景を見せたもの。寢殿造の廻廊を隔てゝお庭の雪が眺められる。格子を開き内簾（ウチスダレ）を卷上げて、今口々に評議の眞最中である。

左方の官女の後にあるのは几帳（今の屏風に似たもの）下に敷かれたのは現代式の疊では無く古代は凡て敷物である。服裝は何れも十二單（ヒトヘ）に緋の袴。圖柄や物腰恰好から見て、上座（向つて右）がお后で（普通御座は一段高い所に設けられる）中が恐らく清少納言で有らう。

發音アクセント

ダイジュウシチ　ユキノヤマ

シャウレキゴネンジュウニグヮツトヲカ（ジョー）＊△（オ）　イチデウテンワウノオキサキ（ジョー）△（フー）

セイセウナゴン（ヤ）（ジョー）＊　クヮンジョタチ（カ）　チョットカホヲミアハセマシタガ（オ）（ウ）△＊

ナニモイハズニ（ウ）　ソナタハドウオモヒマス（オ）（イ）△　シャウグヮツジュウゴニチ（ジョー）＊△（1×ン）

イチザガスコシドウエウシハジメマシタ（オ×ヨー）＊△　イクラナガクテモ＊△　オホミソカ（オ）

マケギラヒノカノジョハ（イ）＊（ウ）　ハッキリトシタタイド△　スコシバカリセイガヒクナッタ（ニ）＊△

クラヰ　カガハクサンノクヮンゼオンサマ＊△（カ）　トシノセ△

ケフフッタユキダケハトリノゾクヤウニ（キョー）（ウ）△（ヨー）　ヨウシャナク△（ウ）　シャウグヮツノミッカ（ジョー）＊

トコロドコロクナッテ（3）△　ミスボラシイスガタ＊　ミトドケタイモノダ（4）

ゲンヂュウニ　ゴハウビ（ホー）　ヨウゴザイマス（オ）＊△　オヒマヲイタダイテ

ゴロクシャク（5）　モウダイヂャウブダトオモッテヰルヤサキ（オ）（ジョー）　アイニク

ソノヨイチヤ（ら）　ザブトンホド　マア　ヨカッタ　マダクライウチ

オホキナオボン（オ）　ヤマノヤウニモッテ（ヨー）　イヒフクメテ（7×イ）△

ウタヲツクッテカミニシタタメ△　クビヲナガクシテ＊△　スッカリナクナッテ△

ザンネンガッテ＊　サクヤダレカイタヅラヲシタトミエテ△（8）　オメドホリ（オ）

オボンヲバウシノヤウニカブッテ（ホー）（ヨー）　ツタナクトモ△　ケンジャウ（ジョー）　アマリカチスギテ＊

ナントイッテモ　ミカド　デンジャウビト（ジョー）　タッタイマノイママデ

スッカリアカルク△　モッタイナクテ△　ムネガイッパイ＊（9）

【注　意】

（1）　數詞中の五は通鼻響を用ひずゴと發音する。但し十五夜丈は特に通鼻音を用ひジュウゴヤと發音する。＊

（2）　單獨には　ヨオシャ。

（3）　又　トコロドコロ（平）

（4）　單獨には　ミトドケ（平）

（5）　又　ゴロクシャク（平）

（6）　又　イチヤ（平）

（7）又　イイフクメテ（平）

（8）往々　メ|ムエテと發音し勝ちであるから注意を要する。

（9）數詞の場合は　イ|ッパイ。

文字語句

新出文字

暇（イトマとも讀むが、口語の場合はヒマと讀むが良い）　**獻**（献）

讀替文字

休　側　除　難（前出は卷六　ナン）

語句と其の解説

正暦五年十二月十日　第六十六代一條天皇の御宇。皇紀一千六百五十四年に相當する。國史では其の翌年藤原道長が右大臣と成つて活躍して居る。　**或日**　原據の枕草子には〝十二月（シハス）の十餘日（トヲカアマリ）の程に〟とある。此處もそれに據つたもので、十日過ぎの或日は十二日か十三日か其の邊は確かで無いが、十何日かの事で有つたと解すべきであらう。　**一條天皇**　御名は懐仁、圓融天皇の第一皇子、御母は東三條院藤原詮子。天元三年六月降誕、永觀二年八月華山天皇の皇太子と成らせ給ふ。寛和二年六月華山天皇が神器を捨てゝ宮外に出でさせ給うたので、外祖父兼家は參内

して急に讓位の議を行ひ、七月卽位し給うた。在位二十五年、寛弘八年六月位を三條天皇に讓り給ふ。尋いで太上天皇の尊號があり、間も無く一條院に崩御し給ふ。壽三十六、圓城寺に葬り奉る。

お后　一條天皇の皇后、御名は定子、關白藤原道隆の女、正暦元年御入内女御と成らせられ從四位下を授けらる。時に御年十五、一條天皇より長ずる正に四歳。同年十月立ちて中宮と成り、長保二年上東門院入つて中宮と成らせ給ふに及んで皇后と稱し給ふ。皇后は抑損して能く下に接し給うたが、晩年藤氏の軋轢に禍され悶々の日を送らせられ、遂に病を得て崩じ給ふ。時に御年廿五、鳥部山に葬り奉る。本課の正暦五年は御入内後五年、恰も御十九に渡らせられる。　**御休養**　休養の敬。勤を休んで保養すること。　**或御殿**　中宮が御所から下つた不斷お住ひになる常御殿であらう。　**清少納言**　清少納言と言ふのは清原氏の女の少納言と云ふ意味で、少納言は女官の階級的稱號である。名前は別に有つた筈であるが、其の名前は一向分らない。伊勢貞丈の清少納言抄には、女房名寄に清少納言は名を諸子（ナギコ）と言つたと書いてあるとの記述が見えるが、別に權威ある說ではない。彼女は何時生れて何時死んだと言ふ事も明かでない。又幾歳で初めて宮中へ參つたかと言ふ事も同じく不明である。然し皇后定子の入内は正暦元年十月廿二日、御年十五の時であり、其の崩御は長保三年十二月十六日、御年廿五の時であるから、之から推して行けば奉仕の年代も少納言の年齡も略見當が附かないものでもない。尙彼女の父と呼ばれる元輔の年齡を調べて見ると、元輔は正暦元年年八十三歳で歿して居る。して見ると假に六十歳の時の子であるとして、彼は正暦元年皇后入内の時に於いて二十四歳である。又或書には藤原行成卿窓中抄に少納言者下野守顯忠女、而元輔爲子云々とあるから、

實は顯忠の子であらうとの說が見える。若し之を眞なりとすれば非常な老人で有つた事になる。然し彼が元輔の子であると言ふ事は通說であるから信ずるに足らない。彼が宮仕中は頭中將齊信・頭辨行成・源中將宣方・修理亮則房等と親交があり、殊に實方中將とは關係が深かつた。一女を設けた事が勅撰作者部類及び新拾遺集十七釋敎の部の歌に依つて推察される。晩年は出家して都の近くに住み佛事に專念したらしいが、死去の場所は分明でない。

そなた　目下の人に用ひる對稱代名詞。おゝま。なんぢ。そのはう。そち。

動搖　亂れ騷ぐこと。騷動。騷擾。

大晦日　十二月の晦日。一年の最終日。大三十日に同じ。おほつもごり。おほみそか。おほとし。除日。

背が低く　せいはせ(背)の延。身のたけ。せだけ。

加賀白山の觀世音樣　枕草子春曙抄增補に〝加賀の白山はいつも雪消えぬ所なれば念じたるにや。古今集に『消果る時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける』白山明神は延喜式神名帳には加賀國石川郡白山比咩神とあるを泰澄法師は十一面觀音と言へるなるべし〟とある。彼は白山と何の緣故も無いが博識の彼女は恐らく古今集等を思ひ起しての事であらう。

年の瀨　月日を流れる水に喩へ、其の瀨戸際卽ち大晦日を譬喩的に言つたもの。

ようしやなく　ようしや(容赦)はひかへ目にすること。手加減すること。斟酌。假借。ようしやなくは其の否定。

お庭師　枕草子には〝こもりといふもの〟とある。こもりは木守、御庭木などを守る御庭師の事であらう。

お暇　休暇を下されること。賜暇。おいとま。

失望　望を失ふこと。あてがはづれること。

つたなくとも　出來映がまづくても。下手ながら。

獻上　物を奉ること。差上げること。獻納。

みかど　天皇の尊稱。本來は門の敬稱、特に皇居の門。直に其の御身を指さずに御居所に就いて申し上げる。閑院宮・伏見宮・有栖川宮等も之に同じい。

資料

原據

物のあはれ知らせ顏なるもの　(枕草子)

さて、十二月の十餘日の程に、雪いと高う降りたるを、女房どもなどして、物の蓋に入れつゝ、いと多く置くを、同じくは、庭に眞の山を作らせ侍らん迚、侍召して、仰事にて言へば、集まりて作るに、主殿司の人にて、御淸めに參りたるなども、皆、寄りて、いと高く作りなす。宮司など參り集まりて、言加へ、殊に作れば、所の衆三四人參りたる。主殿司の人も、二十人許になりにけり。里なる侍、召しに遣し等す。『今日、此の山作る人には、祿賜はすべし。雪山に參らざらん人には、同じからず止めん』等言へば、聞きつけたるは、惑ひ參るもあり。里遠きは、得告げやらず。作り果てつれば、宮司召して、絹二結取らせて、緣に投出づるを、一つ宛取りに寄りて、拜みつゝ腰に挿して、皆、罷出ぬ。袍など着たるは、傍去らで、狩衣にてぞある。『これ、何時までありなん』と、人々宣はするに、『十餘日はありなん。』唯、此の頃の程を、ある限り申せば、如何にと問はせ給へば、『正月の十五日迄候ひなん』と申すを、御前にも、得然はあらじと思すめり。女房などは、すべて年の內、晦日までもあらじとのみ申すに、餘り遠くも申してけるかな。實に、得しも然はあらざらん。朔日などぞ申すべかりけると、下には思へど、さばれ、然までなくと、言初めてん事はとて、固う、あらがひつ。

二十日の程に、雨など降れど、消ゆべくもなし。長ぞ少し劣りもて行く。『白山の觀音、これ消やさせ給ふな』と祈るも、物狂ほし。さて、其の山作りたる日、式部丞忠隆、御使にて參りたれば、梅差出し、物など云ふに、『今日の雪山作らせ給はぬ所なん無き。御前の坪にも、作らせ給へり。春宮、弘徽殿にも作らせ給へり。京極殿にも作らせ給へり。』など言へば、

こゝにのみ珍しと見る雪の山所々に降りにけるかな

と傍なる人して言はすれば、度々傾きて、『返しは得仕ふ奉り汚さじ。あざれたる御簾の前にて、人々にを、語り侍らん』とて、立ちにき。歌はいみじく好むと聞きしに、怪し。御前に聞こし召して、『いみじくよくとぞ、思ひつらん』とぞ宣はする。晦日方に、少し、小くなるやうなれど、猶、いと高くてあるに、盡つ方、緣に、人々出居などしたるに、常陸の介出で來たり。『など、いと久しく見えざりつる』と言へば、『何か、いと心憂き事の侍りしかば』といふに、『如何に、何事ぞ』と問ふに、『猶、斯く思ひ侍りしとなり。』とて、長やかに詠み出づ。

淡まし足もひかれずわたつ海の如何なるあまに物賜ふらん

となん思ひ侍りし』と言ふを、憎み笑ひて、人の、目も見入れねば、雪の山に登り、かゝづらひ歩きて、去ぬる後に、右近の内侍に、斯くなんと言遣りたれば、『などか、人添へて、此所には賜はせざりし。彼が、はしたなくて、雪の山まで、かゝり傳ひけんこそ、いと悲しけれ』とあるを、又、笑ふ。雪山は、つれなくて年も歸りぬ。

朝の日、又、雪多く降りたるを、嬉しくも降積みたる哉と思ふに、『これは、あいなし。初のをば置きて、

今のをば掻棄てよ』と仰せらる。上にて、局へ、いと疾う下るれば、侍の長なる者、柚葉の如くなる宿直衣の袖の上に、青き紙の、松につけたるを置きて、わなゝき出でたり。『そは何處のぞ』と問へば、『齋院より』と云ふに、ふと、めでたく覺えて、取りて參りぬ。未だ御殿籠もりたれば、母屋に當りたる御格子行はんなど、掻寄せて、一人念じて開くる、いと重し。片つ方なれば、犇めくに、驚かせ給ひて、『など、然はする』と宣はすれば、『齋院より、御文の候はんには、如何でか急ぎ開け侍らざらん』と申すに、『實に、いと疾かりけり』とて、起きさせ給へり。御文開けさせ給へれば、五寸許なる卯槌二つを、卯杖の樣に、頭包みなどして、山橘、女蘿、麥門冬など、美しげに飾りて、御文は無し。『唯なるやうあらんやは』とて御覽すれば、卯槌の頭包みたる小さき紙に

山とよむ斧の響を尋ぬれば祝の杖の音にぞありける

御返し書かせ給ふ程も、いとめでたし。齋院には、これより聞こえさせ給ふ。御返しも、猶、心殊に書汚し多く、御用意見えたる。御使に、白き織物の單衣、蘇枋なるは梅なめりかし。雪の降りしきたるに、かづきて參るも、をかしう見ゆ。此の度の御返事を、知らずなりにしこそ、口惜しかりしか。雪の山は、眞に越のにやあらんと見えて、消えげもなし。黑くなりて、見るかひも無き樣ぞしたる。勝ちぬる心地して、如何で十五日待ちつけさせんと念ずれど、『七日をだに得過ごさし』と猶言いへば、如何でこれ見果てんと、皆人思ふ程に、俄に三日、內裏へ入らせ給ふべし。いみじう口惜しく、此の山の果を知らずなりなん事と、まめやかに思ふ程に、人も『實にゆかしかりつるものを』など言ふ。御前にも仰せらる。同じくは言ひ當てゝ、御覽ぜさせんと思へるかひなければ、御物の具運び、いみじう騷がしきに合はせて、木守と云ふ者の、築土の程に

扉さして居たるを、縁の下近く呼寄せて、『此の雪の山、いみじく守りて、童部などに踏散らさせ、毀たせで十五日まで候はせよ。よく〳〵守りて、其の日に當らば、めでたき祿賜はせんとす。私にも、いみじき悦言はん』など語らひて、常に臺盤所の人、下司などに乞ひて、吳るゝ菓子や何やと、いと多く取らせたれば、打笑みて、『いと易き事、確に守り侍らん。童部などぞ登り侍らん』と言へば、『それを制して聞かざらん者は事の由を申せ』など言ひ聞かせて、入らせ給ひぬれば、七日まで候ひて出でぬ。其の程も、これが後めたきまゝに、公人、すまし、をさ女などして、絶えず戒めに遣り、七日の御節供の下しなどを遣りたれば、拜みつる事など、歸りては笑ひあへり。里にても、明くる即ち、これを大事にして、見せに遣る。十日の程には五六尺許ありと言へば、嬉しく思ふに、十三日の夜、雨いみじく降れば、これにぞ消えぬらんと、いみじう口惜し。今、一日も待ちつけでと、夜も起き居て歎けば、聞く人も、物狂ほしと笑ふ、人の起きて行くに、やがて起き出で、下司起こさするに、更に起きねば、憎み腹立たれて、起出でたるを、遣りて見すれば、『圓座ばかりに成りて侍る。木守いと賢う、童部も寄せで守りて、明日明後日までも候ひぬべし。祿賜はらんと申す』といへば、いみじく嬉しく、いつしか明日にならば、いと疾う歌詠みて、物に入れて參らせんと思ふも、いと心許なう佗しう、まだ暗きに、大なる折櫃など持たせて、『これに、白からん所、ひたもの入れて持て來。穢げならんは搔き捨てゝ』など、言ひくゝめて遣りたければ、いと疾く、持たせて遣りつる物引き提げて、『早う失せ侍りにけり』と云ふに、いとあさまし。をかしう詠み出でゝ、人にも語り傳へさせんと、うめき誦じつる歌も、いとあさましく、かひなく、『如何にしつるならん。昨日、然許ありけん物を、夜の程に消えぬらんこと』と言ひ屈すれば、『木守が申しつるは、昨日いと暗うなるまで侍りき。祿を賜はなんと思ひ

つるものを、賜はらずなりぬる事と、手をうちて申し侍りつる』と言ひ騒ぐに、内裏より仰事ありて、『扨雪は、今日まで在りつや』と宣はせたれば、いと妬く口惜しけれど、『年の内、朔日までだにあらじと、人々啓し給ひし。昨日の夕暮まで侍りしを、いとかしこしとなん思ひ給ふる。今日までは、餘りの事になん。夜の程に、人の憎がりて、取捨て侍るにやとなん、推量り侍る。と啓せさせ給へ』と聞こえさせつ。さて、二十日に參りたるにも、先づ、此の事を、御前にてもいふ、皆消えつとて、蓋の限引き提げて持て來りつる、帽子の樣にて、即ちまうで來たりつるが、あさましかりし事、物の蓋に、小山美しう作りて、白き紙に、歌いみじく書きて、參らせんとせし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、『斯う心に入れて思ひける事を、違へたれば罪得らん。實には、四日の夕さり、侍ども遣りて、取捨てさせしぞ。返事に言ひ當てたりしこそをかしかりしか。其の翁出で來て、いみじう手を摺りて言ひけれど、仰事ぞ、彼の寄り來らん人に、斯う聞かすな。然らば、屋打毀たせんと言ひて、左近の府の南の築土の外に、皆、取捨てし。いと高くて、多くなんありつと言ふなりしかば、實に二十日までも待ちつけて、ようせずば、今年の初雪にも、降り添ひなまし。上にも、聞こし召して、いと思ひ寄り難くあらがひたりと、殿上人などにも仰せられけり。さても、彼の歌を語れ、今は、斯く言ひ顯しつれば、同じ如勝ちたり。語れ』など、御前にも宣はせ、人々も宣へど、『何せんにか、然ばかりの事を承り乍ら、啓し侍らん』など、まめやかに憂く、心憂がれば、上も、渡らせ給ひて、『實に、年頃は、多くの人なんめりと見つるを、これにぞ怪しく思ひし』など仰せらるゝに、いとゞ辛く、うちも泣きぬべき心地ぞする。『いであはれ、いみじき世の中ぞかし。後に降り積みたりし雪を、嬉しと思ひしを、それはあいなしとて、搔捨てよと仰事侍りしか』と申せば、『實に、勝たせじ

と、思しけるならん』と、上も笑はせおはします。

指導精神

本課は國文學の至寶枕の草紙から採擇したもので、"物のあはれを知らせ顏なるもの"の條が其の出所である。（資料參照）君臣共樂の美しい場面を描き、義は君臣にして情は父子てふ國柄の麗しさ偲ばせて居る。

試に原文を逐字譯して見る。

十二月の十日過時分に、雪が大層高く降積つたのを、女官達に命じて色々な物の蓋の上へ澤山お置かせになるのを見て、同じ事ならお庭に本當の雪の山を作らせませうと申して、侍共を呼寄せ皇后樣（一條天皇の皇后、中關白道隆の御娘、定子と申す）の御命令だと言付けると、皆寄集つて作り出した。すると主殿寮の下役人でお庭の掃除に參つた者なども皆一緒に成つて、大層高く拵へる。皇后宮職の役人達も其處へ寄つて來て、色々指圖して特別に珍しく拵へると、藏人所の人達も三四人參り、主殿寮の人も二十人程に成つた。又一方では自宅に居る侍を呼びに遣つたりする。今日此の山を拵へる人には御褒美を下さる。それに引きかへて雪の山の工事に來ない人には、一切御褒美を沙汰止にする等と觸廻ると、聞付けた者は皆アタフタと駈付けたが、自宅の遠い者は知らせて遣樣が無かつた。山が出來上ると皇后職の役人をお召に成つて、絹を二束出して緣側へ投出すのを、皆が一つ宛取りに來ては拜禮して腰に差して退出した。然し袍などを着た人は、山の傍を去らないで狩衣姿で立つて居る。皇后樣が此の山は何時迄あるだらうと女官達に仰やると、十日餘は殘つて居りま

せうと大抵其の位の時日を見込んで、居合せた者が皆申上げる。お前は何うだとお尋ねになるから、正月の十五日まで御座いませうと申すのを、皇后樣もそんなにはあるまいと思召して居るやうである。他の女官達は大抵年内大晦日迄はあるまいと申すのに、餘り懸隔つた事を申したものだ。如何にも正月の十五日なんて、そんなに長くはあるまい。朔日とでも申上げる筈だつたと内心では思ふが、マヽよ、其の時分迄無ければ無いでもいゝ。一旦言出した事は取消すまいと思つて、固く前說を持して爭ふた。廿日頃に雨が降つたがいゝ鹽梅に消えさうにも無い。唯高さが少し宛減つて行く。南無白山の觀音、此の雪お消やし下さるなとお祈り申すのも氣違じみた話だ。さて其の山を拵へた日、式部丞忠隆が勅使として參つたから、敗物を出して話などし掛けると、今日は何處樣でも雪山をお拵へさせにならぬ所はありません。禁裏の御庭前にもお拵へさせに成りました。東宮（三條院、冷泉院第二皇子）や弘徽殿（一條院女御、閑院太政大臣公季の女、義子と申す）でもお拵へさせになりました。京極殿（藤原道長の家なるべしと言ふ）でもお作らせになりました、等と言ふので、

こゝにのみ珍しと見る雪の山
所々にふりにけるかな

と傍に居た人に讀上げさせると、忠隆は幾度も首を傾けて賞揚して、折角のお歌を汚すに忍びませんから、御返歌は能う申しません、もうスツカリ降參しました。風雅な御簾の前で、人々に御披露申しませうと言つて立つた。歌が大層好きだと聞いたのに、何うも變だ。皇后樣はそれをお聞きに成つて、餘程名歌だと感心したのだらうと仰せられる。斯くて十二月も下旬頃に成つた。雪の山は

少し小さく成つた樣だが、でも矢張大層高いナリで居る。其の時分の事、お書頃に緣側へ人々が出て居ると、其處へ常陸介が出て來た。何うしい隨分長らくの間來なかつたのと言ふと、何だつて貴女、ムシヤクシヤする事があつたもんですからと言ふ、何うしたつて、一體何んな事が氣に入らなかつたのと尋ねると、それはね、斯う思つたんですのと言つて、長々と何か歌ひ出した。

うらやまし足もひかれずわだつ海の
　　如何なるあまに物たまふらん

と存じましたと言ふのを、皆は嘲笑して目も呉れないので、雪の山へ上つて歩き廻つて歸つた。後で右近の内侍の所へ、斯う〳〵だと言つて遣つたら、まあ何うして人を附けて私の所へよこして下さらなかつたの、あの者が不都合千萬にも、雪の山まで上り掛けたとは、誠に歎かはしい事で御座いますと返事して來たので、又皆して笑ふ。

雪の山は其の後も依然として解けず、新年に成つた。所へ元日に又雪が澤山降つたので、まあ嬉しい、澤山積もつた事と思つて居ると、之は思ひ掛けない雪であるから、最初の雪は其の儘殘して今日降つた雪は皆掻いて捨てゝお了ひと皇后樣が仰せられる。其の晩はお次で寢て翌朝極早く部屋へ下ると、齋院の御使が柚の葉の樣な色の宿直着の袖の上に、青い紙を松の枝に附けたのを載せて懍へ乍ら出て來た。其のお手紙は何處から？と尋ねると、齋院（村上天皇の皇女、選子內親王）からだと言ふので、ふと珍しく思ひ受取つて皇后樣の所へ參つた。まだ御やすめに成つて居たから、正殿に向つた御格子を上げようと思ひ、引寄せて一人で我慢して開けかゝると、大層重い。殊に片

手業だからギシ〳〵戸が軋むので、皇后樣は其の音でお目ざめに成り、何うしてそんな事をするのだと仰やる。齋院樣からのお手紙で御座いますもの、何うして急いで開けないで置けませうと申上げると、如何にも大層早かつたねと仰やつてお起きに成つた。皇后樣がお手紙を開けて御覽になると、五寸程の卯槌（桃の木にて作る。長さ六七寸）二つを卯杖（正月卯日以二桃杖一作二剛卯杖一厭レ鬼云々とある）のやうに頭を包んだりして、山橘・女蘿（ひかげ）・麥門冬（やまのを）等の花を綺麗に飾附けて、お手紙の文句は別に無い。何んにも無いと言ふ事はあるまいと方々御覽になると、卯槌の頭を包んである小さい紙に、

山とよむ斧の響を尋ぬれば
　　祝の杖の音にぞありける

皇后樣がお返事をお書きに成つて居る御樣子も、大層御優雅である。齋院へは此の時から初めて御文通遊ばされる。お返事の文句を一層念入に何度もお書直に成つて、周到な御用意が見えた。お使には白い織物の單衣と、其の外に蘇枋色をしたのは紅梅の五衣を賜つたものらしい。雪が盛に降つて居る中を、其のお使が賜はつた當座の御褒美を被いで參るのも面白い眺めである。其時の御返事に何んな事が書いてあつたか知らないで了つたのは殘念であつた。

彼の雪の山は、本當に越後の國の雪山かと見えて、消えさうにもない。黑く汚なく成つて、見るかげも無い樣に成つて居た。勝つたぞと思つて、何うかして十五日まで消えさせずに置かうと祈つて居るが、七日迄だつて持ちますまいと矢張人々がさう言ふので、何うかして此の勝負を最後迄見

て居ようと皆思つて居るうちに、皇后樣は急に三日の日宮中へお歸りに成ると言ふ事に成つた。それでは此の山が何う成るか其の結果を見ないで了ふのか、何うも非常に殘念な事だと眞面目に考へて居ると、外の人達もホントに樂みにして居ましたのに等と言ふ。皇后樣にもさう仰せられる。同じ事なら言ひ當てゝお目に掛けようと思つて居た甲斐も無いので、お道具を運んだり大騷動をして居る最中に、お植木番と言ふ者が、土塀の傍に假小屋を拵へて居たのを緣側迄呼寄せて、此の雪の山を十分大切に番をして、子供なんかに踏散らさせたり、毀させたりせずに、十五日迄ある樣にしてお呉れ。能く〳〵番をして、其の當日迄持たせたら、結構な御褒美を皇后樣から下される。私からも十分お禮を言ひませう等と言含めて、何時もお臺所の人々や下人達なんかに賴んで持つて來て呉れるお菓子や何んかを澤山遣つた所が、ニコ〳〵して極くお易い事で御座います、確に番をして居りませう。子供なんかが上るかも知れませんからと言つたから、若しお前が止めても聞かない者があつたら、其の事を私迄言ふやうに等と言つて聞かせて、皇后樣がお歸りに成つたから御一緒にお供をして、七日の日迄お傍に居て退出した。其の間もあの雪の山が氣に成るので、禁中の奉公人やお掃除番や衣裳方なんかに言付けて、絶えず注意させて遣り、七日のお節供のお下りなどをお植木番に持たせて遣つた所が、喜んで拜んだと言ふ事などを使の者が歸つて來て笑ひ合つて居た。自宅へ下つてからも夜が明けると直ぐ雪の山を一大事に思つて見せに遣る。十日時分には五六尺程も殘つて居ると言ふ事なので、嬉しく思つて居ると、十三日の晩、雨がひどく降つたので、これで消えて了ふだらうと非常に殘念だつた。せめてもう一日だけでも殘つて居て呉れないかと、夜も寢な

いで溜息をついて居ると、それを見たり聞いたりする人も、氣違ひじみて居ると言つて笑ふ。人が起きて行くので、直ぐ自分も起きて下女を起させたが、中々起きないから憎らしさに腹が立つて、外の起きて居る者を見せに遣ると、圓座程に成りました。お植木番が誠に感心に、子供も寄せ附けず大切に番をして、明日明後日頃迄も御座いませう、何うで御褒美を戴き度いものですと申して居りますと言ふから、非常に嬉しくつて早く明日に成つたら、早速歌を詠んで、何かに其の殘つた雪を入れて差上げよう、とさう思つて居る間も待遠しく氣に成るので、まだ暗いうちに大きな折箱なんか持たせて、これへ白さうな所をドッサリ入れて持つて歸つておいで、汚ならしいのは捨てゝ了つて等と言ひ含めて遣つた所が、案外早く其の持たせて遣つた物をブラ下げて歸つて、もう無く成つて居ましたと言ふので、隨分驚いた。面白く詠んで天晴後世の人にも語り傳へさせようと思つて、ウン〳〵言つて作つた歌も心外千萬にも無駄に成つたので、何うしたんだらう、昨日は現在それ程有つたのに、晩の内に消えて了つたなんてとフサギ込んで居ると、お植木番が申しましたのには、昨日隨分暗く成る時分まで御座いました。御褒美を戴かうと思つて居たのに、アテガ外れたと手を叩いて申して居りましたと人々もやかましく騷いで居る。すると其處へ皇后樣からの仰せだとあつて、さて雪の山は今日まであつたかと仰られたから、誠に殘念で口惜しいが年内には消える、元日迄は殘つて居まいと人々が申されましたのに、現に昨日の夕暮まで御座いましたから、旨く中つたと存じます。今日迄あつては餘り當り過ぎます。夜の間に人が憎らしがつて取捨てたのだらうと推量して居りますと申上げて下さいと申させた。さて二十日の日、宮中へ參つた時にも、一番に此の

雪山の事を皇后様の御前でも人々が言つた。雪を取りに遣つた時皆消えて了ひましたと言つて、蓋だけをブラ下げて持つて歸つて來たが、其の時蓋を帽子のやうに頭へ載せて、直ぐ歸つて來たのを見てガツカリした事、何かの蓋に其の雪の小山を美しく拵へて、眞白い紙に歌を面白く書いて、皇后様へ差上げようと思つて居た事などを申上げると、皇后様は大層お笑ひに成る、すると其時御前に居た人々も一緒に成つて笑ふので、そんなに一心籠めて思つて居た事を無駄にしたのだから、罪障に成るかも知れない。本當は十四日の夕方、侍達を遣つて雪を捨てさせたのよ。それを返事に言當てゝあつたのは面白かつた。其のお前が番に附けて置いたと言ふ老人が出て來て、ひどく揉手をして頼んだけれども、御命令で捨てるのだ。だから其の出て來る人にも、今日我々が雪を捨てた事を言ふんぢやないぞ、若し言つたが最後お前の小屋を叩きこはさせて了ふぞと言つて、左近衞の詰所の南にある土塀の外へ皆取捨てゝ了つたさうだ。隨分高く澤山殘つて居たと言ふ事だつたから、捨てゝ置いたら實際二十日頃迄も殘つて居て、惡くすると其の上に初雪が又積もつたかも知れない。主上も此の事をお聞きに成つて、實に人の意表に出でゝ爭ふたものだと殿上人などにも仰やつた。それにしても其の歌と言ふのをお聞かせ、もう斯うして打明けた以上は、勝つたも同じ事だから言つてお聞かせなどゝ皇后様も仰せられるし、人々も言つたが、それ丈の事を承はつた以上は、申上げたつて何に成りませうなどゝ眞面目にガツカリして居ると、主上もお越しに成つて、實際これまでは世間並の人間だと思つて居たが、今度の事が有つたのでお前の奇才が分つたなど仰せられるので、一層悲しく泣出さん計りの心持がした。いやもうひどい世の中で座います。山が出來てから又

雪が積もつたので嬉しいと思つて居りましたら、それは思ひがけない雪だからつて、拵捨てゝ了へとの仰せが御座いましんですものと申上げると、實際お前に勝たすまいと思召したのだらうと主上もお笑ひ遊ばしてお出でに成る。

何と和かなさうして麗しい場面であらう。君臣一如の姿が眼前に躍如とする。國史を通じて顯著な事實は、皇室對臣民の家族關係である。所謂義は君臣で、情は父子の關係である。然もそれは理窟の上から割出したものでは無く、事實の上から生じた國體の精華である。冷かな論理を捏ねて造り出したもので無く、溫かな情に依り熱き血に依つて發露した生きた事實である、本課指導の着眼も此の點を外にしては有り得ない。

尙出典の枕の草紙は清少納言が其の見聞や感想を秩序無く書留めたもので。其の內容は彼女の心象に映ずるが儘を寫したもので有るから、千變萬化端脫すべからざるものがある。時には公卿・宮媛の擧止を批判し、時には彼一個の趣味を語り、或は單に自然の美を寫し、或は殿上の生活を描く。凡てが奇警な省察と縱橫の才筆を以て思ふが儘感ずるが儘を無遠慮に吐露して居る。從つて自己を赤裸々に打出すと共に他人をも嘲罵して憚らない。奔放にして快活、才氣煥發の彼女の面目は卷中に躍如として居る。當代隨筆の精華として散文學の源氏物語と竝稱され、我が國文學の大宗と仰がれるのも所以無き事ではない。

• 作者清少納言の素性に就いては正史に傳ふる所も明瞭で無いが、北村季吟の枕草子春曙抄に、

枕の草紙は清少納言の筆作也。少納言は清原元輔のむすめなれば、其姓をもちゐて清少納言といへり。父の元輔は後撰集梨壺の五人のひとりなり。

清原氏系圖

天武天皇――舍人親王（日本一覽）――貞代王――有雄――通雄（勝清原姓）――海雄（筑前守）――房則（豐前守）

深養父（内院殿人所預）――顯忠（下野守）――元輔（肥後守）――清少納言

玄旨法印（細川幽齋）の御說に、清少納言は一條院の皇宮の女房とみえ、此の皇后宮と申侍るは、中關白道隆公の御むすめ、定子と申し侍りし。此の草紙の所々に宮のおまへと侍る是也。然るに榮花物語に三條院の女御淑景舍道隆公女定子妹の御もとに宮仕せしよし見えたり。愚案ずるに此の草紙に淑景舍の御事は所々に出たれど、此の局に宮づかへせし事は見え侍らず。但し此の草紙にあらはせる人々の官などを勘へ侍れば、一條院の長德年中長保元年二年などの事ども にて、其の後の事見えざるにや。彼の皇后宮の長德二年十二月十五日にかくれさせ給へり。淑景舍は三條院の東宮にておはしましけるほどにまゐり給ひて、四年ばかりや宮づかへし給へりけん。さて長保四年八月廿日にかくれ給へれど、猶皇后宮よりは六とせいきのこり給ひければ、かの皇后宮隱れ給ひてのち、はらからの御かたなれば、もし清少納言もまゐりかよひたるにや。然らば榮花物語に赤染衞門のしるせる所は、此の草紙かける後の事にや侍らん可尋之。

新古今集に云、元輔がむかしすみ侍りける家のかたはらに清少納言すみける頃、雪いみじうふりて、へだての垣もたふれ侍りければ、申しつかはしける。

跡もなく雪ふる里は荒れにけり

いづれ昔の垣ねなるらん

又玄旨法印百人一首抄に云、清少納言老後には四國のかたにおちぶれたる物と云々。愚案ずるに一條の御代のはじめに通隆公關白し給ひ、定子皇后宮に立給ひて、御威光もめでたかりしに、清少納言もかの皇后宮にめしまつはされて、上臈の次にてまじらひ、其の才いみじかりければ、内侍になすべき沙汰などの事此の草紙に見えたり。しかるに中關白殿（道隆）かくれさせ給ひて、御兄弟ながら御中よりからざりし御堂殿關白し給ひて、上東門院入内ありて中宮にたゝせ給ひなどして、後には伊周公隆家卿など遠流の事ありき。皇后宮は女みこ男みこなどうませ給ひけれど、ほどなくかくれさせ給ひ、御いもうとの淑景舍もうちつゞきてうせ給へれば、かの御かたの人は時をうしなひて、成出べきやうもなくなりゆきしに、清少納言もさるあれたる所にすみ、四國にもさまよひ給ひしにこそ。此の草紙にも其の昔をしたふ思ひをのべて、此の皇后宮の御威勢ありしほどの事を所々に書きあらはし、我が身の世にほめはやされし事ども數多くかゝれ侍りしにや。或說に清少納言誓願寺にて出家して帝の御かへり見をかうふり、いみしき往生をとげて、彼寺に墓も有りと緣起に見ゆ。時代にあはで一旦はおちぶれしかども、終焉のさまはいみじかりけん事、才有りし人のしるしめでたく侍るにや。云々

とある。

指導形態

指導上の認識點

1　堂々十五頁に亘る本卷第一の長篇、觀點は一條天皇のお后が至つて平民的で、下々の者をお友達の樣に御可愛がりになる御仁慈の程を拜察させると共に、淸少納言のてきはきした態度に共感させ、所謂義は君臣にして情は父子の我が國體精神を具象化した點にある。其處には平安朝時代の雲深き宮廷生活が繪卷物の樣に展開され、優美典雅な大宮人が錦繪のやうに美しく描き出されて居る。指導者は先づ此の和かな雰圍氣に浸つて敎材精神を發揚する心構が肝要である。

2　構想は大體七つの過程を踏んで表現されて居るが、或は長く或は短く形の上からも內容の文學的香氣を一層高めて居る。相互關聯的に長篇學習の興味と愈悅を十二分に滿喫させ度いものである。

3　本課は大體七時間見當で指導を完了するやう立案し欲しい。

第一次指導

1　題目の指導。
　▽挿畫と照合して讀心を唆り直に通讀に移るが良い。

2　長篇讀破の心構を話合ふ。
　▽雜誌や文藝物を讀む態度で極く樂な氣持で讀むこと、一場面宛あせらずに讀み深めて行くこと等。

3　新出文字の處置。
　▽手引を謄寫又は印刷して配付し、前途に横はる讀みの障碍を取除けて置く。

　休　側　除　暇　獻（献）　難

4　全課の通讀。
　▽十分時間を與へて自由に讀破させる。
　▽印象其の他は記帳させて置く。

5　全篇の荒筋を摑ませる。
　▽頭に殘つた話の大體を言はせて見る。

6　指名讀。
　▽（一）（二）の順を追ひ、輪讀式に。

7　題目の再吟味。
　▽何處から題が出たか、それを何う思ふか等話合。

8　▽讀後の印象を中心に。

9　輪讀。
　▽一場面づゝ、座席順に。

10　場面別に話の大要を言はせて見る。
　▽時は何時頃？　登場人物は？　話の中心は何處？　等。

11　低音讀。
　▽筋を頭に描いて。

12　ノートを整理し提出させる。

第二次指導

1　指名讀。
　▽全課を場面に分けて、輪讀式に。

2　不明の箇所を質問させる。
　▽重立つたものは此方から指摘して確める。
　　正曆元年　一條天皇　お后　御休養　宮中　官女　淸少納言　お側近く　一座動搖　大晦日　負けぎらひ　態度

3　通讀練習。
　▽個別に自由讀を交へて。

4　輪讀。
　▽敎師も參加して。

5　一場面づゝ逐次に精査する。
　▽頃合を見て板書で纏める。

時　正曆五年十二月十日過ぎの或日
所　京都の或御殿
人　一條天皇のお后
　　淸少納言

官女　五六人
男達　大勢

背景　大雪（庭には雪の山が拵へてある）

お后
↓
此の雪の山は何時頃まで

官女たち
『十二三日ぐらゐは……』
『其のくらゐと、私も……』
『私もさう　……』
『そんなに長く……』
『いくら長くても……』
『さうですとも……』

清少納言
『正月の十五日までは……』
『私はどうしても……』
『少し言方が大きかつたかしら。』
負けぎらひ
はつきりとした態度

6　書取。
▽板書事項を適宜に取捨させて。
7　指名讀。
▽(二)を指名して。
8　不明の箇所を質問させる。
▽重立つたものは此方から指摘して確める。

時　十二月の二十日近い或日
所　御殿
人　清少納言

思つた程小さくはならない
←
清少納言
→
加賀白山の觀世音様
↓
一心に
→
とう〳〵年の瀬を越して

9　通讀練習。　加賀の白山　觀世音様　年の瀬
▽個讀に自由讀を交へて。
10　逐次研究。
▽教師は板書で纏める。

11　書取。
▽板書の文圖を書取らせる。
12　指名讀。
▽(三)を指名して。
13　逐次研究。
▽板書で纏める。

14 通讀練習。

15 指名讀。

▽(四)を指名して。

時　正月三日
所　御殿のお庭
人　清少納言
　　官女たち
　　お庭師
背景　雪の山

16 逐次研究。

▽板書で纏める。

時　正暦二年正月元日
所　御殿のお庭
人　清少納言
　　男たち　數多
背景　雪の山

17 通讀練習。

18 指名讀。

▽(五)を指名して。

時　正月十三日の夜
所　清少納言の家
人　清少納言
　　使の者
背景　大雨

19 逐次研究。

▽板書で纏める。

20 通讀練習。

21 指名讀。

▽(六)を指名して。

時　正月十五日の朝
所　清少納言の家
人　清少納言
　　使の者

22 逐次研究。

▽板書で纏める。

背景 夜明

23 通讀練習。
24 指名讀。
▽(七)を指名して。
25 不明の箇所を質問させる。
▽懇談的に。

時 正月二十日
所 宮中
人 お后
清少納言
官女たち
背景 御殿

お后

お目通 **折角** **獻上** **みかど** **殿上人**
つたない **胸が一ぱい**

26 逐次研究。
▽板書で纏める。

清少納言

(正月の二十日、お后にお目通をして)
『折角使をやりましたのに……**殘念**でございました。お盆に白い雪を盛つて …私の歌をそへ…

(お后もお笑ひになりました。官女たちも皆…)
『それ程、そなたが思ひ込んでゐたのに …實は… 雪を取捨させたのです。**餘り勝過ぎて**、人にうらまれては…』
『しかし、何と言つてもそなたがりつぱに**勝つた**のです。みかどが …おほめになつて…。さあ、そなたの其の歌といふのが聞きたいものですね。』
(官女たちも言ひました。
『ぜひ、其の歌をお聞かせ下さいませ。』)

獻上したいと存じてをりましのに。』

たつた今の今まで殘念とばかり……すつかり明るく……それどころか、自分のやうなものをこれ

程にまで……もつたいなくて、泣きたいやう……。

『今さら、どうして……。どうぞ、それだけはお許し下さいませ。』

清少納言は、たゞ有難いと思ふ心で胸が一ぱいでした。

1 通讀練習。
▽全課を一氣に。
2 範讀。
▽徐々に追讀させる。
3 指名讀。
▽中・劣生を主として。
4 會讀。
▽グループ（學習團）に分れて、文意や觀點を互に講究させる。
5 輪讀。
▽教師も參加して、和かに。

第三次指導

21 輪讀。
▽一場面づゝ、座席順に。
24 追範讀。
▽語感に注意させて。
25 全課の文意を摑ませる。
▽ゆつくり默讀させて。
26 話合。
▽文意を中心に。
27 ノートを纏めて提出させる。

6 構想の吟味。
▽思想關係を辿らせて。
7 話方練習。
▽劇的に。
8 全級總掛りで脚本化させる。
▽教師も參加して。
9 劇化實演。
▽背景其の他は工夫させて。
10 話合。
▽讀後感を懇談的に。
11 朗讀練習。
12 視寫・聽寫練習。
13 新出文字の書取。
14 語句の應用練習。
15 テスト。

テスト問題

一、次の文を讀んで後の問に答へなさい。

（二）の全文。　（文略）

（1）十二月二十日近くなつた時雪はどうなつて居たか。

（2）清少納言が喜んだわけ。

（3）なぜ白山の觀音樣に御祈りしたか。

（4）大晦日近くに雪がどれくらゐ殘つて居たか。

（5）年の瀨も無事に越した時清少納言はどう思つたか。

二、次の反對語を書きなさい。

1 かなり降つた　2 休養　3 大勢　4 かき集め
5 顔を見合せる　6 消える　7 負けぎらひ　8 少しばかり
9 取除く　10 みすぼらしい　11 大丈夫　12 夜が明ける
13 はつきりとした　14 殘念　15 つたない

三、次の假名を出來るだけ漢字に直しなさい。

1 おほみそかぢかくなると、だいぶんちいさくなりましたが、それでもゆきのやまは、とう〳〵としのせをぶじにこしてしまひました。

2 このゆきをけさないやうに、ひとがふみちらしたりしないやうに、げんじゆうにばんをしてください。じふごんちまでゆきがきえないでゐたら、きつとごはうびをあげますから。

3 せいせうなどんのこゝろは、すつかりあかるくなりました。それどころか、じぶんのやうなものをこれほどにまでおもつていたゞけるとおもふと、もつたいなくて、なきたいやうなきさへしました。

第十八　南極海に鯨を追ふ

最近建造された我が大洋捕鯨株式會社所屬の新鋭捕鯨母船日新丸の活躍で、題目の〝南極海に鯨を追ふ〟が既に兒童の心を躍らせる。此の新鋭を誇る日新丸は專ら南極海を漁場として活躍する捕鯨母船で、總噸數一萬六千七百噸の堂々たる威容を備へ、之が神戸の川崎造船所で建造された際、僅々七ケ月の短日月を以て竣工し、世界の造船界をアッと言はせたものである。此の母船に附隨する捕鯨船が八隻、其の總噸數二百七十一噸、颯爽と南極海に向つて神戸を船出したのは昨昭和十一年六月六日、六千二百海里の海波を蹴破り氷山浮ぶ極海の漁場に到着したのが十一月十三日の朝であつた。

それから先の活躍振りは本課の領分であるが、本年三月十七日の未明、漁場を切上げる迄の捕獲頭數無慮一千百二十頭、勿論捕つた片端から母船の日新丸で料理し、肉は肉、骨は骨、脂肪は脂肪と超スピードに始末して、或は鯨油の精製に、又は鯨肉・鯨皮・尾鰭の鹽漬と目覺しい作業を續け、引上げる時には尾鰭の鹽漬丈でも三萬五千貫、鯨油が一萬五千二百八十噸、歸途オランダのロッテルダムで是等の全收獲を陸揚して大儲したのは言ふ迄もなく、序にパナマ運河を經てアメリカの西海岸へ廻り、其處で重油一萬九千噸を買込み、之を土產に悠々此の六月六日に横須賀へ入港、母國に凱旋したのはホンの先頃の事で有つた。大膽極まる大仕掛では有るが、遣る事が一々敏速で流石にスピード時代に相應しく、話を聞いた丈でも胸が透く樣である。

本課は其の活躍振りを叙しもので、萬里の波濤を蹴破り巨大な氷山を分けて、無盡藏の寶庫に入り鯨群を

追撃する雄々しさ勇ましさ、全篇血湧き肉躍る活文字に滿ちて居る。其處には爽快な職業戰線の使命が暗示され、產業日本・海國日本の目覺しい飛躍の程が窺はれる。勿論我が遠洋漁業は南極海に鯨を追ふ計りでは無い。日新丸が南極に鯨を追へば、結城丸を始め數隻の漁獵船は北極海に活躍して居る。農林省水產局の最近統計に依ると、遠洋漁業と名の附く我が船舶數實に八千九百餘隻、主としてクヂラ・イワシ・マグロ・カツヲ・サバ・タラ・フカ・タヒ・カレイ・エビ・カニ・ヒラメ・サハラ・サンマ・珊瑚・眞珠等、年產額無慮一億圓に垂んとする巨額で有ると言ふ。

南極海に鯨を追ひ、メキシコの海にトロールの網を引き、小笠原の沖合に鮪の大群を漁る、海國日本に與へられた天地は廣い。然もそれ程命掛の働きをして捕らねばならぬ程、我々は魚を食ふのであらうか？　之は恐らく單純な兒童の疑問と成るで有らう。勿論一億に近い國民の糧食とする魚類の需用も莫大で有らうが、それよりも近代科學の原料として盛に用ひられる事を知らねばならぬ。一々科學成分を擧げる逞は無いが、例へば鰯から化粧品のクリームや火藥等が取れると聞いたら、全く意外の感に打たれるで有らう。序に鯨油の用途を簡單に附加へて置く。鯨油は皮下の脂肉から取る計りで無く、舌・臓肉・骨等から採油される。長須鯨の如きは一頭の採油無慮百餘噸に達する。精製された鯨油は人造バタ・石鹸原料・燈油・製革用・黃麻及び大麻纖維の注油・鋼鐵の燒入・減摩用・硬化油等、其の用途は極めて廣い。

挿畫の印象と其の說明

百十四頁の寫眞版は太洋捕鯨會社が南極海に派遣した捕鯨母船日新丸（一七六〇〇噸）所屬の捕鯨船（キヤ

ツチヤーボート）で噸數は二百六十トン、今母船を離れて極海に鯨を追ふ雄委である。日新丸には之と同じキヤツチヤーボートが八隻附屬して一捕鯨船隊を形成して居る。乘員は各二十人、母船から食糧や燃料等の供給を受け、捕獲した鯨は母船に任せて次から次へと獲物を追ひ極海を縱横に活躍する。船首に突き出て居るのが捕鯨砲で、前後の檣を繫ぐ針金は無線電信のアンテナである。畫面は晴々とした平和な極海であるが、斯んな一波も無い平穩な日は滅多に見られない。多くは曇天で空も海もどんよりした灰色ださうである。水平線の彼方に白い雲の樣に見えるのは極海に漂ふ氷山で、不斷は之が航海の目標に成るが、一度荒れると魔物の本性を現すので危險極まる難物ださうだ。

百十七頁は轟然一發、捕鯨砲を放つた壯快な瞬間を撮影したもの。見事命中したらしく鯨はサツと水煙を立てゝ海中を荒狂つて居る。捕鯨砲を操る砲手の右向ふに今一頭の鯨の背が見える。砲手は更に第二彈で、之を射止めるに違ひない。砲身は左右上下に動き精密な距離計が取附けて有るから、殆ど百發百中徒矢は無いさうだ。

百十九頁は射止めた鯨の處置で、今一頭の白長須が送氣管で腹を脹らし、仰向けに成つて浮いて居る。水面に見えるのは全體の四分の一位で、水中に沒した部分の方がずつと大きい。母船の收容に便宜な樣に、會社のマークを附けた赤い旗が翩翻と飜つて居る。捕鯨船は無電で鯨の位置を母船に知らせ、後を親船に任かせて他の獲物を追躡する。母船には三吋半位のワイヤーが準備され、鯨を括つて尻の方から船尾の解剖甲板へ引揚げる。

發音アクセント

ダイジュウハチ　ナンキョクカイニクヂラヲオフ(ウ)

ハヒイロノユキグモ(イ)*　オソラク　△チヘイセン(エ)　ダイセウサマザマノヒョウザン(ショー×ー)

ホセン　ホゲイセン(ヤ)*(エ)　カハルガハルセナヲダシテ△(ワ)*(ワ)　シロナガスクヂラ*

トリカヂ　スキフチャウ(ヨー)　ダシュ　ニゲミチ*　イノジナリ　ハウシュ(ホー)

ホゲイハウノアンゼンカギ*(エ×ホー)*　イッパイ——イッパイ　ガゼン　ソクリョクヲダセ

フクシャウスルダシュノカホ△(ショー)　ハッパウスルキクワイ△(カ)　ミヅケムリ(メ)

デタリシヅンダリ　ヒョウザンノカゲ(オ)　ゼンソクリョクヲダシテ△　ヨウイ(オ)

ホゲイハウヲシタハラノアタリニカマヘテ△(エ×ホー)(ヤ)　ナマリイロノスキメン(イ)

イヅミノヤウニモリアガリ(メ)(ヨー)*　スサマジイヒビキ　モリ　メイチュウ(エ)

ブスリト　バクダン　グングンノビテ　ムセンツウシンシ△(ツー)　ソウドウキン(オ)(イ)

ウッブセ　クワンコノコエ(カ)　ソウフウクワン(カ)　メジルシノハタ

クヂラノユクヘ(エ)

【注　意】

（1）又　サマザマ。

（2）又　ホゲエセン（平）*

（3）單獨には　スイフ。

（4）又　シタッパラ。△

文字語句

新出文字

舵（カジ）　構（カマヘ）　巨（キョ）　瞬（シュン）　綱（ツナ）　裂（レツ）　準（ジュン）　獣（ケモノ）

讀替文字

氷（ヒョウ）　舵（タ）　行方（ユクヘ）

語句と其の解説

南極海（ナンキョクカイ）　南極圏内に在る海洋の總稱。もと南氷洋と稱し、南極探檢以前は太平・大西・印度洋に續く南極地方の大洋と想像されて居たが、探檢の結果、氷で蔽はれた一大陸塊たる事が知られ、想像され

た樣な大洋では無く、太平・大西・印度各大洋の南部の一部分と見做すを至當とし、南氷洋と呼ばず南極海と稱するに至つた。南極圈は南緯六十六度五分の緯圈を言ひ、圈内は卽ち南寒帶で夏季の一定期間は太陽が全く地平線上に現れない。

鯨を追ふ　南極大陸の探檢に伴うて生じた南極海の調査は、遂に捕鯨業の發達を促すに至つた。卽ち一九〇四年ノルウェー捕鯨界の第一人者ラルセンは、先づサウスジョージャ島近海に於いて捕鯨を行ひ、逐年成績の見るべきものが有つた。其の結果次第に南方へと進出を試み、一九二四年には遂に極南ロッス海に進入して良好の成績を收めた。斯くて一九二六年にはギェルトゼンが捕鯨工船の魁ニールゼン・アロンゾ號を指揮して、ロッス海を縱横に航海、捕鯨を行ひ頗る好成績を收め、爾來一萬トン乃至二萬トン級の捕鯨工船(母船)が各數隻の捕鯨船を伴ひ、所謂捕鯨船隊を組織して、年々南極海の眞夏たる十二月・一月・二月の三箇月間をロッス海に活躍する盛觀を呈し、今や我が國も亦其の爭覇戰に加はり、大洋捕鯨株式會社の新造捕鯨船日新丸(一六、七〇〇トン)は昨秋(昭和十一年)十月七日神戸を出帆、南極の氷山を渡る烈風に翻翻と日章旗を飜へし、國際捕鯨戰に天晴初陣の功名を立てた。

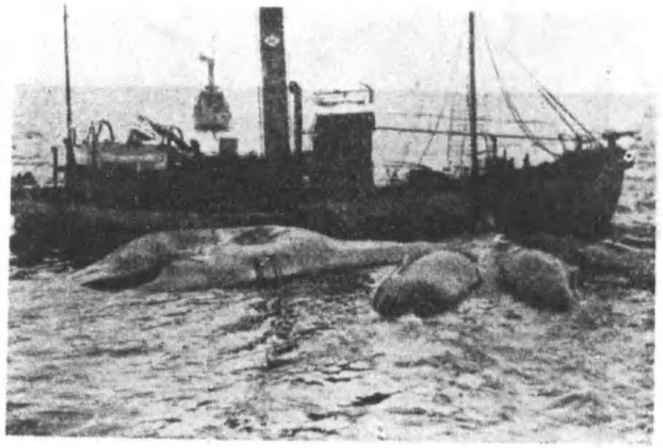
南極に海氷ふ漂

大小樣々の氷山　氷山は寒冷な高緯度地方に於いて、氷河の下端が落下して海面に浮游するもの。氷山は往々海面上に百米内外の高度を示

すものがある。氷山の海面上に現れた部分は約九分の一で九分の八は海面下に在る。從つて此の氷山が航海者に取つてどれ程恐れられ厄介がられて居るかは言ふ迄も無いであらう。然し朝日・夕日に輝く氷山の美觀は形容すべくも無い。南極海の天地に於いて、氷河は氷山を生んで海は之を運び、吹雪と嵐は氷山を蝕んで其の壽命を縮める。自然は玆にも創造と破壞の神祕境を展開させて居る。

母船　おやぶね。鯨工船(クヂラコウセン)を言ふ。鯨工船は又捕鯨工船とも言ひ、一九〇四年ノルウェー人ラルセンが南米沖合サウスジョージア島を根據として初めて南極海に捕鯨を試みた際、鯨は澤山に居るが之を捕獲した場合に、其の處理を行ふには是非陸上に工場を設備する根據地が必要である。然るに此の島と漁場とは相當遠距離で有るのみで無く、南極海は一箇年中大半は荒天と言ふ時化續きで有るから、遠い漁場から巨鯨を曳航する事は容易で無い。剩へ陸上に根據地を選び、工場設備を施すと成ると、其の陸地の歸屬する外國政府の許可を得ねばならぬ煩雜がある。卽ち南極海上の島嶼は殆ど英領であり、且つ英國はノルウェー人が南極海に迄も進出せんとして居るのを快しとせず、南極海上に點在する島嶼に捕鯨根據地を設ける者には英本國政府の許可を受く可しとの法律を發布するに至つたので、ラルセンは遂に工場設備を有する大工船を造り、之に二百噸級の捕鯨船數隻を隨伴させ、所謂捕鯨隊を形成して之に當る必要を痛感した。斯くて一九二五年に至り資本家メルソムが捕鯨工船ランシングを建造し、ラルセンを之が長として南極海へ派遣したのが捕鯨工船出現の濫觴である。翌一九二六年にはニールセン、アロンゾと稱する一萬五千噸の巨大な汽船が捕鯨船に改造され、時速十乃至十一ノットの捕鯨船四隻が之に隨伴して南極海へ出漁し好成績を收めた。爾來捕

鯨工船の出現著しく、現在では巨大なものは數萬噸に及び、其の數はノルウェーのみで二十有餘隻、之に蘭・英・米・露を合算すると優に四十二隻（昭和九年三月現在）を算する盛況を呈した。是等の工船は各其の一隻毎に二百噸乃至三百噸級の捕鯨船四五隻を隨伴する。最新式の捕鯨工船では船内に飛行機數臺を收容し得る格納庫を有し、漁場に出でゝは之を活動させ廣く鯨群を搜索し、無線電信を利用して捕鯨船に通報し漁獲能率を增進せしめて居る。捕鯨工船の共通の特殊設備としては、船尾に大きい舷門を有し、捕鯨船が捕獲した鯨を曳航して來た時、此の舷門を開き、水平板が後方に出で上甲板からは俯角約六十度の滑走臺が斜後方に出で、水平板と相連接し、上甲板の强大なウィンチから太い鋼索が其の末端に附けた鈎と共に滑走臺上で滑つて後方に繰出され、鯨體に射込まれた銛と此の鈎とで鯨體を確保し、ウィンチの運轉に依り滑走臺を介して甲板上に引揚げる仕掛で、之は我が日新丸も同じである。**捕鯨船**（ホゲイセン）　普通キャッチャー・ボートと言ふ。一母船に四五隻のキャッチャー・ボートが附隨して居る、現在南極海に活動して居る捕鯨



母船に捕鯨船を旋回する

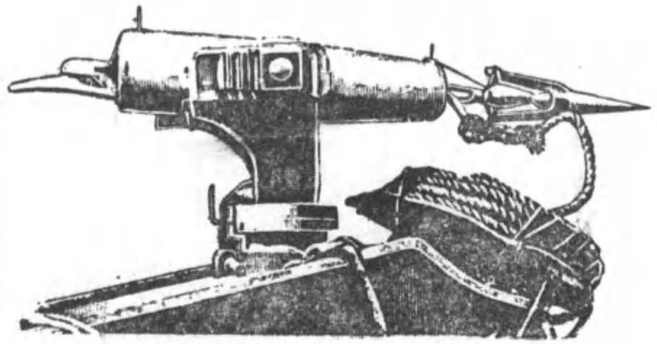
母船は二十八隻（昨秋出漁したもの）之に附隨するキャッチャー・ボートが約百八十隻と言はれて居る。

（別項參照）　**白長須鯨**（シロナガスクヂラ）　鯨の一種。體長普通二十二三米前後、最大三十米に達する。分布は頗る廣く、我が國近海ではオホツク海・日本海・黃海・支那東海岸及び太平洋側に產し、夏期は北海道東北區に、冬期は南海及び朝鮮近海に多く捕獲される。南極海には殊に多い。鯨は哺乳動物・鯨目に屬する獸類で、體は水中生活に適する樣に魚形を成す。魚類と異り溫血、肺で空氣を呼吸し、胎生した幼仔は乳で育てる。種類多くセミクヂラ（脊美鯨）・ナガスクヂラ（長須鯨）・イワシクヂラ（鰮鯨）・ザトウクヂラ（座頭鯨）・コククヂラ（克鯨）・マツカウクヂラ（抹香鯨）・ツチクヂラ（槌鯨）等がある。白長須鯨は長須鯨の一種である。是等の鯨類は陸上の牛と同じく其の體の總ては一つとして利用されぬものは無い。卽ち鬚は提燈の柄・コルセット・椅子・卓・ステッキ等の製作材料と成り、齒は印材又は彫刻用材と成り、腸・肉・皮は食用と成り、脂肪層からは採油し機械油に用ひ、精製して硬化し人造バタを製し、血液は血粉、骨骼は骨粉を製して藥用とし、或は肥料に用ひる。南極海で捕獲した鯨は多く鯨油を製し尾を鹽漬にする。**取舵**（トリカヂ）　船首を左へ向けんとする時の舵のとりかた。右へ向けるおもかぢ（面舵）の對。**舵手**（ダシュ）　船の方向を掌る人。かぢとり。**捕鯨砲**（ホゲイハウ）　銛（モリ）を仕込んだ捕鯨用の砲。銛に附屬した破裂矢は體中で爆發し、鯨を斃死させる。遠洋捕鯨の方法にはアメリカ式とノルウェー式の二つがある。アメリカ式は數百トンの帆船又は補助機關附帆船を母船として、之に首尾共に同形の所謂捕鯨ボート數隻を搭載し、漁場に於いて是等のボートを海面に派し、鯨に近接して銛を打込むと、銛に附屬した破裂矢は體中で爆發し鯨を斃死せしめる。捕獲した鯨は母船の舷側に繫ぎ、海上に於いて之を截割し、頭部及び脂肪層から採油を行ひ、次から次へと鯨を追うて海洋を移動する。ノルウ

ー式は百數十トンから二百數十トンの速力迅速なる鋼鐵製汽船を使用し、船首に大きな銛の尖端に破裂矢を裝置したものを打出し得る大砲を据附け、鯨を搜索し之に近接發射して打止める。最近ノルウェーでは前にも言ふ工船式捕鯨法が創案され、一萬噸級乃至二萬噸級の大汽船を母船とし、甲板には强力なウィンチや巨大な鯨體を運び得る滑走盤を設備し、船尾舷を開いて海面から巨大な鯨を此の盤上に載せて船内に取入れ、割截して脂肪層からは採油し、骨骸は採油後骨粉とし、肉は肉粉に製し、血液からは血粉を製する設備を整へ、更に大規模の母船に在つては、鯨の搜索上飛行機を搭載するものもある。母船は必ず之にノルウェー式捕鯨船數隻を隨伴して、所謂捕鯨船隊を形成し、南極海の夏季に出漁し、捕鯨船は適當の港灣に殘留せしめ、母船は遠く北歐の商港に歸港し、漁獲物を陸揚げ又は處分して再び漁場へ赴くと言ふ大仕掛の捕鯨を行ふに至つた。我が國も亦此の最新式捕鯨法を採用し世界爭覇の壯擧を企てゝ居るが、本課は即ち其實況を叙したものである。

安全かぎ　平生は危險の無い樣に鍵を掛けて置く。必要の場合は其の鍵を外す。砲の安全裝置である。

傳聲管　隔つた室に聲を傳へる裝置。



砲　鯨　捕

復唱　正確を保つ爲同じ事を繰返して言ふこと。

砲手　火砲を操縱する人。大砲を發射する事をつかさどる者。

總動員　總てを動員すること。全員が一つの事に當ること。總掛り。動員は軍隊等で軍隊を平時の姿勢から戰時の姿勢に移すこと。即ち出戰の準備を爲すこと。

歡呼の聲　歡呼はよろこび叫ぶこと。嬉しさの餘りどつと聲を上げること。

送氣管　空氣を送り込むくだ。ポンプ仕掛の送風機で空氣を送ると、送氣管を通じて鯨の體内に送り込まれる。鯨の巨體は此の充滿した空氣の力で海中に浮び、母船の後始末を容易にする。捕鯨船は目印の旗を立て更に新しい獲物を追うて活躍する。

資料

參考

日新丸船上座談會（雜誌『話』昭和十二年八月號）

極光輝く南氷洋の國際的捕鯨戰に乘り出し、天晴初陣の勝名乘を上げて故國に凱旋した捕鯨工船日新丸（一七六〇〇トン）が、南極の獵奇と冒險とローマンスに滿ち足りて今横濱港外に靜かに息づいて居る。記者は其の壯烈な思出話と海の男の氣焰を聞かんものとランチを急がせる。歐洲航路米國航路の巨船の間を縫ふやうにして港外に出れば、一種異樣な日新丸の巨大な船體が浮城の樣に横はつて居る。危い足取りでタラップを上り甲板に立てば、たゞ廣々として小學校の雨天體操場の四つか五つはたつぶりある作業場だ。此處で鯨を處分するのであるから、言はゞ甲板と云ふより大きな俎の樣なものである。まだ脂肪の異臭が殘つて居てかすかに鼻を衝く。直に船長室に導かれて

岡元船長を中心に船上座談會を開いた。

出席者

船長　岡元管太郎
一等運轉士　小島保好
二等運轉士　是本賢一
通信士　稻垣善一
製油監督　高橋昇
第二日新丸一等運轉士　横木政榮
PCL撮影所技師　太田芳太郎

捕鯨船隊の編成

記者　どうも大變お忙しいところ、とんだ御迷惑なお願ひを早速聞き届けて下さつて有難うございました。我々陸上に居る者の迚も想像のつかないやうな壯快なお話だとか、又、非常にお苦しみになつて來たお話だとか、鯨や氷山やオーロラのお話など、色々承りたいと思ひます。

岡元　捕鯨といふ事は、我國でも、日本近海では從來からやつて居りますけれども、南氷洋迄出てやるといふ事は、近々三年間の昭和九年に、日本捕鯨株式會社が圖南丸といふ船を仕立てゝやつたのが、日本としては初めてです。ノールウエーでは、十年も前からやつて居ります。日本でもそれは以前からやりたかつたのはやりたかつたのであるけれども、兎に角、大資本がかゝるものですから遲れて居ました。ところが、機運熟して一昨年、圖南丸の出航を見、それから太洋捕鯨會社も亦、昨年初めて日新丸を以て乘り出したといふ譯です。それについて、玆でお話するのもよろしいが、何しろ實際と、此の靜かな灣内とでは、餘りに掛け離れて居ますからね。向うで我々が働いて居るところは、氷山があり、霧があり、非常な危險を冒してやつて居るのだけれども、此所でそのお話をしても、危險もなし、氷山も見えず、それは繪でも見乍ら話せば、少しは氣分も出るかも知れませんが、それもないから實感が出にくいですよ。

記者　我々は充分にそれを心に描いて伺ひませう。

岡元　それから又捕鯨船とは申しましても、實は此方はその取つた鯨をば料理する所であつて、本當の捕鯨といふ方はキヤツチヤー・ボートがやつて居る譯ですから、實はキヤツチヤー・ボートが如何に活動して居るかといふ事は我々は實際知らないのです。實際活動して居る者は、さだめし色々な困難と闘つて居るのでせう。尤も太田さんは二十日程撮影の爲にキヤツチヤー・ボートに乘込まれましたが何れにしてもさういふ實際を詳しく知らないので、さういふ點も甚だ遺憾な所です。

記者　キヤツチヤー・ボートはどの位の大きさなのですか。

岡元　此の日新丸捕鯨船隊と云へば、工船日新丸一艘、捕鯨船八艘から成る一船隊をいふのです。その捕鯨船なるものは二百六十噸。それが八艘あつて、一艘に廿人宛乘つてゐるのです。それ等は皆、獨自の航海をして本船について向ふ迄一緒に行つた譯です。途中の航海中、本船は、向ふの必要品の食糧とか、燃料とか、水等を供給してやり乍ら、赤道を横切り、南印度洋に出て、西濠洲のフリマントル

に着きました。ところがそのフリマントルに於て、大變悲しむべき事が起つた。それは事業部長の志野德助さんが遂にお亡くなりになつた事です。その日――十月廿一日ですが――志野さんは私達幹部と一緒に上陸して、西濠の首府とされてゐるパースへ行き、動物園を見物した後、夜は映畫を見て機嫌よく寢に就かれたのだが、その夜遲くもういけなかつたのです。一同は之を非常に悲しみ、又、これから先の事を思つては、一時は困り果てたのですが、幸ひにも、事業部長として適當な方が他に乘つて居られ、皆も、引き續き先に進んで、大いに仕事をしようとハリきつて居りましたので、その儘向ふへ行く事が出來ました。それから約十日ばかり航海を續けて、やつと氷のある所迄行つた。

氷山見ゆ、探鯨準備

記者　それはどの邊ですか？

関元　南緯六十度附近です。

太田　確か十四日目に流氷に出逢つたのです。それ迄は吹雪があつたりして、殆ど曇天でしたが、初めて快晴だつたので、どんどん寫眞を取りましたよ。南氷洋は一體に曇日が多く、空も海もどんよりとした灰色で、寫眞の實に取りにくい處でした。

関元　それ迄は航海準備であつたのが、其所で初めて今度は捕鯨準備として、銛だとか、彈藥とか、食糧等を渡し、愈々探鯨に取り掛つた。鯨を探して、居つたら取るのです。その取つたのは、なるべく早く本船に持つて來る。工船はそれを受取つて、甲板に引き揚げて解剖する。解剖して油を取る工作にかゝる譯です。そしてその鯨を取るには、なるべく大きなのを取る。大きいのは油が多い。主に白長

須といふのを目的として居るが、今迄の捕鯨といふものは、白長須をよう取らなかつた。もつと小さいのを取つて居つたが、大砲でもつて撃ち取るといふ事が發明されまして、それからは白長須を取る事になりました。その白長須の大きな奴を本船にもつて來て料理するのですが、一番大きなのは九十一尺もありました。鯨の重さは一尺一噸ですから、九十尺あれば九十噸といふ譯だけれども、實際は百噸位あるね。高橋さん。――

高橋　肥つて居りますから、子持ちの鯨など、三割以上多いですね。

神秘に包まれた南氷洋

関元　我々が初めて向ふへ到着したのは十一月の半頃でした。その頃は丁度向ふの春です。仕事をするのは向ふの夏が良いのです。夏といふのは、向ふでは、十二月・一月・二月ですが、その十二月・一月になるといふと、日中が非常に長いのです。朝は我々の行つて居る間で、一番早かつた時など、二時位にもう太陽が出る。さうして夜の十一時頃迄明るいのです。十時頃まあ漸く日が暮れるのですが、太陽が入つたからと云つて、決して此方のやうに暗くならない。所謂薄明ですな。うす明るいんです。さうかうして居る中には又、太陽が出て了ふ。だから仕事をするのは大變都合が好い。

記者　寢るのにお困りでせう？

関元　ところが、皆な精一杯働いてヘトヘトに草臥れて居ますからね。結構よく休めますよ。休めなかつたら病人です。

記者　溫度などどの位ですか？

関元　最高四十四度、最低二十六度です。だから、最高の場合に、東京の冬の服裝で恰度いゝ譯です。

是本　今年は非常に溫かつたです。例年に比して……。今迄は三十一度になつたら皆、キャツチャー・ボートのリギングが凍つて非常に工合が惡かつたと言ひますけれども、今年はリギングの凍るやうな事は全然ありませんでした。その爲に、例年よりも約半月、操業が延びました。

関元　つまり話を聽いて見ますと、二月一杯操業は難しいといふ事だつたのです。二月の末になると、寒くなつて凍つて、捕鯨船が今お話した通り、リギングが凍つて了ふ、オン・デツキも凍る。從つて大砲も凍つて仕事が出來ないといふ話でしたが、本年は、リギングも凍る迄行きませんでした。然し、十二月の半過ぎてからは……

是本　殆ど時化でした。

関元　一ヶ月の中、半分です。仕事が出來るのは……。

是本　三月は半分無かつたでせう。向ふは時化が多いです。

肥田　時化つてどの程度の時化ですか？

関元　十二月の初めにあつた時化なんかは、どうしても船を流して置く譯に行かなかつた。十二月一日の夕方から十二月三日と、まる二晝夜、氷山を避けて歩いて居りました。とまつたら氷山に當つて了ふから危險なんです。本當に危險でしたね。それに明瞭に晴れて居ないので、展望が充分でないから、近くへ行つて、あつ、彼處にも氷山があるぞ、と云つてそれから避けて行くといふ工合ですから、是本さんなんか、隨分心配したねえ。

高橋　したですな。實は、我々航海者にとつて、一番苦勞し、危險と感じますものは、時化・ガス、それから吹雪なんです。氷山が四つも五つもあつて、うつかりしたらそれにぶつかつて了ふのですが、その上で視界が利かないやうになりますから、氷山が無かつたら、視界は利かなくても問題はありませんけれども、氷山が見えないのですから危いんです。ですから我々航海者は、非常に注意して、心配してやつた譯です。

関元　實際ガスあり、氷山あり、さうして薄明が過ぎると暗夜でせう？　殊に南氷洋の闇夜と言つたら、月があれども暗夜が多いのです。晴天でない暗夜は特に暗いです。之は內地で見るよりも一層暗い。

高橋　暗いとなつたら眞つ暗ですからね。驚いちやつたですね。あれが本當の眞の闇つていふんでせうね。まるで墨を流したやうだ。

稻垣　ズーツと統計取つて見ましたが、あれは一週間位の週期で參つたですね。

関元　他の海には、本當の闇夜はありません。ところが、南氷洋の海と來たら物凄く暗い。其所へもつて來て是本君の當番は夜の十二時から四時迄です。そりやもうとても是本君は苦しんで居るのですよ。八時——十二時は、同じ樣に苦しむにしても、まだ明るかつたといふ觀念があるでせう？　やゝ馴れて狀態が分つて居るけれども、十二時から起きて、暗い所へ飛び出すのぢや、周圍の事情が分りやしません。その間は實際、眞つ暗なのですから。——

是本　然し、一寸話しますと如何にも恐る可きやうなものでありますけれども、細心の注意さへ拂へば、さう心配したものでもないと思ひます。

関元 幸ひに天氣の好い時は……だが、今お話した通り、非常に苦しむ事があるのです。

記者 氷山なんか流れて來るのは、豫め察知出來るのでせうか？

墨本 我々がブリッヂで當直をしますね。さうした場合に、船と氷山の關係位置を取るんです。それで、潮と風、船の流れる方向は大抵分りますから、風上の氷山はどの位あつて、距離はどの位の處に在るから、何時間の後には流れて來るといふ見當がつきますので、それが近付いた時は、充分の餘裕をとつて、氷山を交して行くのです。

関元 向ふへ行つてからはもう、何時も危險狀態にありますから、エンヂンは何時も用意して置きます。フリマントルを出てからフリマントルに歸る迄、エンヂンは何時も、オール・レディです。だから——此所にはエンヂニヤは居ないけれども——エンヂニヤも隨分草臥れる譯です。

餌を追つて南へ南へ

記者 フリマントルといふ處へは、各國の捕鯨船が集まるのですか？

関元 いや、さういふ譯ぢやないのです。濠洲の西海岸に在るたつた一つの港です。

記者 南氷洋の方は、鯨が澤山居るので出て行くのですか、鯨のタチが良いのですか？

関元 それは、つまり、南氷洋の夏、卽ち十二月・一月、その時には、鯨が皆、南へ南へ行くのです。何しに行くかといふと、餌を喰べに行くのです。では鯨の餌は何かといふと、小さいあみのやうな海老です。その海老を大變澤山喰べる。鯨の餌をうんと喰べた奴を解剖して、胃を裁ち割つて見ると、もう、溢り一面一杯の海老が出て來ます。だから、その海老が澤山居るところには、鯨も亦居る譯です。

つまり、その海老の澤山居る處を探して行く譯なのです。その海老がどうして發生するかと云へば、海水と清水との混合から、一種のプランクトンといふバクテリアが發生して、其所から出來るのですが、それを鯨が喜んで喰べる譯です。併し、どうして鯨がそれを知つて居るか、といふ事は分らぬさうです。鯨の目は小さいし、耳は鋭敏ださうですが、それにしても、何千哩先の事をどうして知つて居るのか、鯨のインスピレーションといふ事について色々研究して居るさうですが……。子供を產む時には、温かい處へ行くらしい。さうして今度は餌を喰べさせに、母子が海老の居る所へ來るらしいですな。

鯨油になるまで

記者 鯨を取つてから、どういふ工程でそれを處分するのですか？

横木 先刻お話しました捕鯨船でもつて先づ鯨を本船へ持つて來るのですが、それもいきなり持つて來るのではなくて、本船へ到着します前には、無線電信がありますから、それでもつて約一時間後に着くとか、二時間後に着くとか言つて來ます。又本船の方でもブリッヂに居る者が、それ〴〵捕鯨船の方向を計つたり何かして居ます。捕鯨船の方でも速度を測定したりしてお互に無電で打合せは充分に出來ますから、その中愈々、二十分・三十分後には着くといふ事になると、本船の方では引揚げの準備をします。さうして愈々本船の船尾の方へ持つて來ますと、本船には、三吋半位のワイヤーがありますから、それを準備をして居る者が向ふへ投げてやりまして、向ふの鯨を括つてあるワイヤーと繋ぎ合せる譯です。それで一旦、船尾の二十尺位の處迄引き揚げまして、それから、クローと申しまして

吊柄がありますから、それで鯨の尻尾の方を挾みます。私は初め、頭の方から揚げるものとばかり思つて居ましたが、實際はさうぢやなくて、尻の方から揚げるんです。その挾みには、五吋餘りの大きなワイヤーが二本ついてゐて、四十噸の力あるウインチで引き揚げて來ます。さうして、船尾の解剖甲板迄引揚げて來ますと、解剖斧と言ひまして、薙刀みたいな恰好をして居る庖丁でもつて、順々に皮を剝いで行く譯です。その皮は、約二尺位の長さに切りまして、ハータマン・ボイラーと言ひますが、其所に拋り込みます。骨は、之も矢張り油が出ますので、船尾から船首の方へウヰンチで引いて來まして、鋸ボンソートと言ひますが、それで骨を切りまして、プレス・ボイラーで處理します。

記者　ボイラーで直ぐ出來るのですか？　加熱するのですか？

高橋　發溫ボイラーに四氣壓の氣壓を入れて、その中に入れます。さうして穴のあいた鐵板の中に皮を拋り込み、蒸氣を通しますと、その蒸氣で油が搾り出される譯です。皮でしたら七十パーセント位搾れます。ところがその他に、骨とか、肉も入りますから、さういふ奴も混ぜて計りますと、四十五パーセントか五十パーセント位です。その搾つた油は、一時間に七噸半位出來ますね。その肉をやる方のハートマンボイラーは六臺あります。それから骨をやるプレスボイラーの方は、六十封度の蒸氣で、十八時間か二十時間蒸して油を搾ります。プレス・ボイラーは二十六臺ありますが、その後、油は他のタンクへ移るやうになつて居ります。

横木　本船は、出來た油は、下の方に二萬噸近くの容積のあるタンクがありますが、之は全部で四十五に分れて居りますが、それに出來た油は自然に流れ込む事になつて居る。さうして持つて行きました燃

料と鯨油とを積み變へる事になります。持つて行つた燃料は、捕鯨船の方でどん〳〵使ひますから、その後へ鯨油が入つて行く譯です。ですから何時も殆ど滿船狀態にあるといふ譯です。さうして途中で、伸積船と言ひまして、鯨油を積取りに來る船がありますから、それに積み渡して、外國へ一回積み出しました。さうしてその後を又拵へて、アメリカを經由して歸つて來た譯です。

內地よりも迅速な通信

記者　通信は無電だけですか？

岡元　さうです。向ふでの唯一の通信機關は無線電信だけなのです。それで捕鯨船との間も聯絡するし、內地とも毎晩通信する。新聞電報も毎晩受取ります。だから內地との距離は非常に近い。實際に於て五千哩も離れて居るのですけれども、然しその電報の無線電信があるものだから、所謂短波の通信であれば、內地に居るよりも遙かに早く聞ける程です。

是本　何時だつたか、伊豆地方にあつた地震など、あちらでは直ぐ知つたが、歸つて來て、其の事が話題になると、誰も知つてゐないと云ふ有樣でしたよ。

記者　重大なニュースは大概入るのですか？

智垣　毎日ありますから、勿論入ります。

高橋　それを船中新聞といふので出すんです。

岡元　だからその點は非常に良いのですが、陸が無し、陸が無いから自然、植物も無し、目に見るものとては只白い氷山、氷塊ばかりなものですから……

愛嬌のあるペンギン島

是本　ペンギンも居ましたね。

記者　氷山に居るのですか？

是本　パック・アイス、フローティング・アイス等の上に居ますよ。

高橋　一度なんか、隨分高い氷山の上に居つたね。

岡元　それから海豹。――

記者　さういふものはお取りにならぬのですか？

岡元　ペンギンは取つたけれども……

横木　私等濠洲から歸つて來た時、ペンギンを持つて來ましたけれども、とてもよく人に馴れまして、名前を呼んだり何かするとついて來る程でした。可愛いもんですよ。下關で駄目になつて了つたが……

最初は何も喰べないので、半分程に痩せましたが、無理に鯨肉を胃袋の中へ突込んだら、慣れて、餌を喰べる樣になつて、また太つて來たのです。

是本　私は又、彼處で鹽漬にしたかと思つてた。――（笑聲）

岡元　本船にも大きい帝王ペンギンが居つてよくなついて居たが、結局死にました。

記者　今の鯨油といふのは、主にどういふ方面に使ふのですか？

岡元　マガリン・人造バタ・食物の油とか、主に食料ですな。それから石鹼材料。さういふものに使ふのです。

記者　値段は高いのですか？

岡元　相場は、マーケット・プライスといふものがあつて高低がある譯です。非常に廉かつた時もあれば非常に高かつた時もある。本年邊りは、二十磅から二十二、三磅の間といふ事ですな。一噸について……。

記者　さうすると、今回、どの位の總收入を上げたのですか？

岡元　それは分らんですな。商寶の方は店でして居るのですから……。此方は只、材料があつて、それを造つて來ただけでしてねえ。はは……。

記者　毎日多い時はどの位料理しますか？

高橋　一日に三十九頭取りました、二頭見えなくして三十七頭あつた事がありました。

岡元　然しそんな事はたつた一回だけで、天氣が惡い時は、二日でも三日でも、一週間でも、一頭も無い事もあるんですよ。太田さん、捕鯨の實際は如何でした。

血潮の海に振り廻はされる捕鯨船

太田　キャツチャー・ボートの船首に裝塡された銛が、あの巨大な海獸の體内深くぶち込まれる譯ですが、一發では駄目で、大抵二三發、時としては五六發打込む事があります。最初、鯨を發見すると、徐々に船首を獲物の方に向けて、「よし」となれば射手が砲を打つのですが、閃光と共にバーンと海上に爆音がこだまして、銛の穗についた綱が空中に弧を描いて飛んで行くのです。命中すれば、あの巨體で暴ばれ廻るのですが、六ノット位の速力で船が引つ張られます。今にもひつくり返されるかと思ふ程

の勢ですが、段々弱つて來ると、綱をウインチで捲くのですが、ドス黒い血のうねつてゐる波を分けて鯨が近づいて來ます。その時に、もう一發打つて止めをさすのです。擊ち止めた獲物は、直ぐポンプで腹に空氣を入れて、會社の旗を突立ててその儘流して置くのです、一々母船に運んでゐては、その間に他の鯨が逃げて仕舞ふからです。

是本　それを後で一頭づつ拾つて屆けて來るのですが、時には見失ふ事もありますよ。何しろ目標がないのですからね。その代り外國の捕鯨船から、何處其處に浮いてゐたと敎へられる事もありますよ。

富樫　キャッチヤー・ボートから、一度に持つて來られても、解剖作業が間に合ひませんから、そんな時は船尾に縛りつけて置くんです。漁の最盛期に次の漁場へ移る時など十數頭の大きな奴を曳きずつた儘で航進するのです。

記者　キャッチヤー・ボートは、本船を離れて幾日も探して歩いて居るのですか？

是本　さういふ事になりますけれども、無線を頼りにやるのです。何故かと言ひますと、御承知の通り、彼方は南極に近くなりますので、コンパスが一寸工合が惡くなるのです。傾斜を持ち、或は回轉を生ずるやうになつて來ますから　…。然し、本船の方にはサイズ・コンパスがありますから、それを基準にして、それから無線を使ふのです。さうして歸つて來る時は歸つて來ますし、行く時も、本船よりどの方向に、或は何哩の所に居るといふ事は凡そ分りますから、向ふの航海は、殆ど行き戻りは、本船のサイズを基準としてやつて居る譯です。コンパスはどうも工合惡いですな。

問元　マグネティック・コンパスは不可んですな。ステッディに行かない。

問本　水平力が少くなる譯です。コンパスを維持さす力が減つて來る譯です。

記者　キャッチヤー・ボートなんかで破損したり、氷山にぶつかつたりした事はないのですか？

問元　幸ひにさういふ事はなかつたです。

記者　他の國なんかはよくあるのですか？　犧牲者なんか出るやうな事は……

問元　さういふ事はあつたかも知れませんが、聞いて居りません。

是本　非常に注意を拂つて居ますから、屢ゝ起りさうな氣がするが、却々起らないんです。とても眞劍ですからね。皆な命懸けですよ。

太田　此の船では事故が一件あつた譯ですね。

問元　えゝ、殘念でしたが　……

時化の時は港にもなる氷山

是本　氷山々々と言ひますけれども、素晴しい大きなのがありますよ、ね、キャプテン！　此方の氷山の端から向ふの氷山の端迄拔けるのに、約一時間かゝつた事がありましたね。スピードを十一哩位出してさうなんです。さうしますと、あの氷山なんか、淡路島より一寸大きくはなかつたんぢやないかと思ひますね。そんな事を言つたら内地の人は、そんな大きなのがありますか、と本當にしない。全く嘘のやうだけれども、事實、とても大きいのです。普通は細いけれども、大きなのがチョイ〳〵あるんです。

記者　よく本などに、青白いと書いてありますが　…

品本　あれは固い奴です。海に流れて來て潮波に揉まれて洗はれたのが青いのですよ。

橋本　然し面白い事に、母船の方では氷山を非常に厄介として居るけれども、捕鯨船の方から言はせれば大變いゝ場合があるんです。何故なら、例へば、大きな時化などのある場合、氷山には、此方で言ふ島と同じやうなのがありますから、その蔭に行つて隱れて居るのです。蔭で隱れるのには、大きな氷山はもつて來いだ。

稻垣　あれがあるから沖に出て居る樣な氣がしない。何だか島の中に居るやうな氣がして……。（笑聲）

高橋　時化が來たら、一所懸命氷山の處へ行くさうです。

太田　それも早く行かないと防波堤に利用出來る處を先に取られて仕舞ふ事があるのです。一度、立寄つた氷山には既に先客としてノールウェーの捕鯨船隊がづらりと竝んでゐるので、次の氷山を捜しに行つた事がありましたよ。

品本　本船はそれと反對に逃げるのです。氷山の上に出て居る高さの約八倍から、海水に入つて居るのですからね。

記者　それぢやほんの少しきり出てない奴もある譯ですか？

品本　さういふのはフローテイング・テイスと言ふ。フローテイング・アイスの固まつた奴がパック・アイス、それにアイス・バーグといふ三種類があります。その他にも種類はあるかも知れませんけれども、我々の知つて居るのは此の三種類です。

稻垣　彼處の氷山はテーブル型ですな。

高橋　キャプテンは氷山の割れたのを御覽になりましたか？　テーブル型の奴にはうつかり傍へ行かれないさうです。

關元　氷山の罅が入つて居るのを、あ、今に割れさうだな、と思つて見て居たが、その割れる時の色といふものは實際綺麗でしたね。

航海中の娯樂

記者　よく繪なんかに鯨が汐を噴いて居るのがございますね。矢つ張りあゝいふ風に見えるのですか。

稻垣　あの噴水の樣になるのは背美鯨ですよ。

高橋　背美鯨は二つ穴がありますから、噴く事は噴きますが、繪にあるみたいに、あんな風にはありませんよ。

稻垣　普通の長須鯨は幕を立てた樣です。

高橋　よく罐詰のレッテルなんかにありますね。見事な噴水のやうなのが……。實際はとてもあゝいふ樣にはなりませんよ。背美鯨は穴が二つあるから二本噴いて居る譯ですけれども、遠くから見ると一本に見えるから、あんな風に書くのでせう。

記者　船の中の娯樂機關なんかありますか？

高橋　さうたんとありませんね。蓄音機に碁、將棋それから本――。

橋本　向ふへ行きますと忙しいですから、さういふ事をやつて居る時が無いです。はは……。

太田　キャッチャー・ボートでは、望樓に登つて鯨を發見する事が一つの娯樂らしいですね。發見して、

捕獲出來れば發見した者が七圓貰へるので、それが樂しみなのでせうけれど。

是本　ペンギンや海豹を捕へるのも矢張り娯樂でせうね。

月光を極光と間違へる

記者　最後にフリマントルを出て、それからはもうずつと陸地は御覽にならないのですか？

横木　えゝ、見えないです。約五ヶ月といふもの見ませんでした。ですから向ふに行きますと、氷山はテーブル型をなして居ますが、時に島のやうな恰好の氷山があると、非常に懐しいです。……（笑聲）

宮橋　先刻是本君が言つて居た大きな氷山、あれは陸だとばかり思つて居たね。

岡本　（記者達に――）氷山といふのは澤山あるのですよ。一寸見ても五つや六つ、視界の中にあるのですからね。

是本　いや、一寸見て百位ある事がありますよ。船を何處へ停めていゝか迷つた事がある。直ぐに流れて來るのですからね。船が一寸でも當れば、エンヂンには觸れなくても、もう工合が惡くなりますから恐しいです。本船がスピードをもつて接觸したりしますと、大きな鐵板も直ぐ剝げて了ふんですからね。タイタニック號でもさうですよ。あれは氷山に非常な勢ひで接觸して、綺麗に片側がやられて了つたのです。さういふのもありますし、又、ぶつからないにしても、海面に少し許り出つ張つて、下に潜つて居る事がある。それに本船が乘つて、波の爲に氷が動搖したりして居る中に、コロッと引つくり返されるといふ恐れがあります。ですから絶對に、ハーフ・マイル以上近づいたらいかんですな。

横木　まあ、恐いものとしてあるのでいゝのですね。接近しようとすると危險です。私等、初めて氷山を

見た時分には、とても、何と言つて形容していゝか分らぬ、夢の國へ行つたといふのは、かういふ事を言ふのかと思ひましたよ。

高橋　あの時は天氣が好かつたですな。

稲垣　實際初めて氷山を見た時の氣持は、崇嚴な氣持ですな。何とも言へませんね。

記者　オーロラは？

是本　最初、見たい〳〵と言つて居りましたが、却々見られませんでした。さうして居る中に、愈々引き揚げるといふ頃になりましてから、天氣の好い晩は、毎晩の樣に出る樣になりました。

横木　最初の中は、皆なオーロラだ〳〵と言ふので見るとお月さんだつたり何かして　。（笑聲）我々が見たのはオーロラと言つては居りますが、皆なが言ふ樣な放射線には出ませんでしたね。青い色だつた。

是本　探照燈を薄くした樣な恰好ですな。

横木　始終動いて居ますね。雲みたいだ。

宮橋　何處からともなく探照燈を照して居るみたいな、それが動くと、さあつと形が崩れてひろがつて幕の樣になる。

懐しい出逢ひ

記者　他の國の船なんかとお逢ひになりましたか？

是本　三、四回逢ひました。岡南丸にも逢ひました。外國のは、英國船に一回、ノールウェー船に二回。

横木　我々が合圖したのはイギリス船だつたね。

長本　カムチヤツカの方は澤山居ますね。各國入り交つてやつて居ますよ。

稲垣　百方に操作しますから……。

記者　その場合に、船から船へ遊びに行つたり何かは？

長本　それは出來ないです。

高橋　ノールウエーのキヤツチヤー・ボートが、此の本船をグルーツと一廻りして、それから又、傍に居て取つて居た事がある。矢つ張り懐しいらしいんですね。此方のキヤツチヤー・ボートも亦、向ふへ行つてさうしてるんですよ。

横木　矢つ張り懐しいですからね。

長本　大分他の船にも逢ひましたが、本船程綺麗な大きなのはありませんね。之は去年新造した許りですから良いのですな。向ふのは、大きい事は大きくても、古い船を改造したやうなのがありましたよ。

記者　皆な、船尾に穴が開いて居るあゝいふ恰好ですか？

横木　どれか一艘は、頭の方に穴が開いて居るのがあるさうです。何處の船か知らないが――。

記者　家族の人の手紙なんかはどうですか？

横木　それはフリマントルへ歸つて來る迄、まあ見られませんな。

記者　フリマントルで初めてお受取りになるんですね？

高橋　さうです。然し、電報は毎日打つて居ます。

長本　八十錢で行きますからね。今打つたのが直ぐ内地へ行くのですから、陸と聯絡するには、何にも變りありませんよ。

横木　長崎の無電で悲鳴擧げて居るさうです。岡南丸と私の方とで、あんまりヂヤンヂヤン打つものだから……。來年は餘計擧げるだらうな。これ(稲垣氏)も悲鳴擧げた組だが……。

稲垣　いや到頭悲鳴を擧げちやひましたよ。年賀狀なんか、今迄に無い樣なレコードだらうと思ひましたね。

しい荒騒圖

記者　此方から南極の方へ參る時に、非常に海の荒れる場所があるさうですね。

小島　ローリング・フオーティス、或はローアリング・フイフティス、これは「唸る五十度」といふ譯ですね。それから又何といふか、ローリング・フイウリヤス・フオーティスとも言ひますが、兎に角、何方も、凄い荒れ方を言つたんですな。で、今度此の船が三月の十七日でしたがね、彼方を出帆して濠洲のフリマントルへ向つて北上した來た時に、三月の二十四、五日頃出會した荒れ方は、あれはもう實に酷かつたです。私が此の左舷のブリッヂに立つて居る際に――此の船は相當に大きな船で、日本の現在の總噸數に於ては最大ですが――その左舷と波の高さが同じでした。さうして、キヤツチヤー・ボートのマストだけが漸く見えて居て、船體は波に隱れて全然見えなかつた。私は三十年、船乘りをして居ますけれども、こんな大きな波は見た事が無い。四十度、五十度の間です。

記者　常にさういふ風ですか？

小島　常にでもないのです。前航の際はさうでもありませんでした。けれども、今度の戻る時は、特に大きいと感じました。

是本　我々は彼所を普通「荒騒圏」と言つて居ます。時化ですよ。彼處は常に時化て居ますが、大きいのは低氣壓が加つて來るのです。それが大きい。又、時季によつて、冬分は非常に時化るのです。ですから我々も、行く時は丁度、春、夏に向つて行つたので、時季が良いので時化が小さかつたのですが、歸る時は、夏が過ぎて居たので、非常に大きな時化だつたのです。

小島　僕が一番恐しいと感じて居るのは、鯨を本船へ引き揚げたのです。ところがそれはどうしても動搖を免れないので、うねりの爲にどうしても或る程度の動搖を受けますから、鯨をクローで繫ぎまして、艦はエプロンでおさへて居つたんですよ。ところがそのエプロンが、約十四、五尺も入つて居ればさうでもないのですけれども、五、六尺の所へ行くと、うねりがある度に、船のローリングと一緒に、デッキが油ぎつて居るので、鯨が遊動するのです。そいつが恐しかつたですな。實に恐しいです。それが若しもエプロンが外れゝば、九十尺、七十尺といふ鯨が暴れ廻るのですからね。はたくのですから此奴が恐しかつた。

恐るべき産業日本

記者　全部で何頭お取りになりましたか？

小島　千百十六頭です。油は一萬五千二百八十噸。

記者　各國でも矢つ張り、その位づゝ取つて居る譯ですか？

小島　大抵矢張り、一萬噸以上取つて居ますね。先づ此の船は、可成りな成績です。各國の競爭場裡に於て、一番ではないけれども——。

是本　好い成績だと思ひますね。私は——。

小島　ロッテルダムの話では、コスモスの油よりもまだ質が良いといふ話です。要するに油の製造は、高橋さんが擔任してやつで居るのですから、良い油を拵へた譯ですな。

高橋　然し、初めての年でなかつたらさうでもございませんけれども、何しろ初めての年ですから神經を使ひましたよ。

小島　來年はプレミアム附きだらうと言はれて居ますよ。（笑聲）恐る可き日本といふ事は、一遍で現はれた。

記者　今度は何時お發ちになります？

高橋　九月廿七日です。

小島　今度の航海は、三萬六千哩の豫定です。

智恵　滿九ケ月ですね。

記者　それでは大變お忙しいところ、色々と有益なお話を承りまして洵に有難うございました。御成功を祈ります。

指導精神

之も最新、然も昨秋十月七日神戸を出港、國際捕鯨爭覇戰に南氷洋の極海へ初出漁して、滿九ヶ月振り此の六月六日午後、初陣の勝鬨勇しく故國の地を踏んだ計りの大洋捕鯨會社所屬捕鯨母船日新丸が、極海に鯨を追ふ活潑々地の活教材である。同船は千百二十頭の鯨を捕獲し鯨油一萬五千二百餘トン、尾(鹽漬)三千三百貫を得、初の首途に輝しい凱歌を擧げ、歸途オランダのロッテルダムで鯨油を陸揚し、アメリカで重油約二萬トンを積込み、出港以來茲に滿九ヶ月振りで六日午後四時過に軍港横須賀沖に颯爽たる姿を現し、同五十分第五ブイに繫留、會社役員を始め家族等の出迎を受け、乘員は目出度上陸した。凱旋の狀況は當日の東日紙上に次の如く報道されて居る。南極の氷山を渡る烈風に翩翻と日章旗を飜し、國際捕鯨戰に天晴初陣の功名を立てた大洋捕鯨株式會社の新造捕鯨母船日新丸（一六、七〇〇トン）は九ヶ月の間亘鯨を追つた戰歷を船腹一面にひつ著いた螟に物語り乍ら、六日午後四時五十分綠の故國横須賀軍港に歸着した。入港に先立ちランチを驅つて我等が『海の子』を港外に訪ふ。空は快晴、海面は凉しい。『海の幸』五百萬圓を射止めて來た日新丸は、其の巨大な船體を先づ横須賀海堡沖に現し、午後四時五十分潛水母艦『大鯨』と並んで港外第五番ブイに繫船を濟した。白堊のマストには船名旗高く、漆黑の船體は苦鬪に錆びて居る。『船長さん居るか！』と呼掛けると『居るぞ、皆元氣だ。』『お目出度う、大漁ださうだね。』『鯨のホルモンを澤山持つて來たぞ。』と景氣の好い聲が飛んで來る。檢疫と稅關の濟む間を錆びた日新丸の船腹にランチを着け乍ら待つ。腹一杯の鯨油を賣つて、買つて來た重油の音がドカンと響いた。

檢疫・稅關檢査の終るのを待つて、デッキに駈け上つた。脚立のやうにデッキを跨いだ。メーンマストの下は唯廣々として小學校の雨天體操場の四つ分は十分にある。茲で百尺に近い南極の肥えた鯨を料理したのだ。何處か脂肪の異臭が殘つてる間を通つて、船長室に岡元管太郎船長(六一)を訪ねた。溫顏にイタリーのバルボ前空相のやうな豐かな頸鬚を蓄へ、鬢に霜を置いた岡元さんは矮軀乍ら如何にも落着いた海の古强者、スパニッシュな派手な女の油繪の掛つて居る木の香新しい室で、

『太平洋を一直線に今歸つて來たのです。勇壯とか何とかお褒めの言葉を頂戴致しますが、私共は悲壯な氣持で戰ひ、悲壯な氣持で歸つて來たのです。それは御社(東日)に打電しました通り、事業部長として捕鯨作業一切の指揮の爲乘組まれた本社（大洋捕鯨會社）の重役志野德助氏が航海中昨年十一月一日腦震盪で亡くなられ、其の遺骸を濠洲のフリマントル港で化學的に防腐劑で固め、これまで使はれて居た自室に生けるが如く安置し、同十一月十三日正午愈々南極近く南緯六十度、東經百八十度の地點から捕鯨を開始して、本年三月最後の大きな九十一尺の白長須鯨を射止めて大漁を納める迄、毎日々々志野さんの遺骸に其の日の戰績を報告し、本事業の爲生命を賭された故人の冥福を祈り續けて來ました。』

と傍の小島一等運轉士を顧み乍ら、極地の此の荒武者の眼にも露が光つた。

『ホルモンの研究に學者が乘組まれたとか聞きましたが……』

と話題を換へると、小島さんは膝を乘出して、

『えゝ、大阪帝大の化學研究室の竹内定次氏が途中迄便乘し、船尾から引上げて解剖する鯨のお腹から大きな卵巢やホルモン腺を摘出して研究して居られました。殺風景な此の船に似合はない話題と言へば竹内さんのホルモン研究でせう。其の利用ですか？　こいつは何うも竹内さんがロッテルダ

ムで下船されたので聞き洩しましたが、鯨が背中にモリを打込まれたまゝ凍へるやうな氷山の間を荒狂つて逃げるあの物凄さから考へると、大に利くのかも知れませんよ。』

と笑つた。

『捕獲した千百十二頭は白長須が主で、大きいのは九十一尺もあつた。大體鯨體一尺が油にして一トンと言はれて居るが、八九十尺位に成ると一尺が一トン以上と成つて居る。キャッチャー・ボートでは第三玉丸が最優秀で、百八十頭を引揚げた。各國の捕鯨船には餘り出會はなかつたが、母船二十八隻、キャッチャー・ボート百八十隻とを傳へられて居る。』

と岡元船長は國際捕鯨制覇の勇士とも見えぬ物靜かさを見せつゝ語つた。と、尙同船は横須賀で荷役の後横濱に廻航、ドックに入つて再び威容を整へ、目下建造中の第二日新丸と共に今多の南極捕鯨國際戰に參加するさうである。

指導形態

指導上の認識點

1　本課の指導標的は南極海で鯨を追ふ勇壯極まる奮鬪振に血を湧かせ、勇往邁進の氣風を振作するにある事勿論であるが、同時に遠き海洋に思を馳せ、未蹈の極地に覇を爭ふ世界的態度を馴致する事も國民の氣宇を大ならしめる上から言つて、見逃し難き觀點の一つであらねばならぬ。

2　尙國勢伸長の上から見て、捕鯨の世界的大勢と我が國の現況、並に其の將來性や、國富貿易等の關係をも多少補說し、產業方面の認識を深める事も大切である。

3　形式方面に於ては、瞬間の感激を描寫する文の迫力に味到させ、文學性を培ふと共に綴方との關聯を保持する事を忘れてはならぬ。

4　本課は大體五時間見當で指導を終るやう立案して欲しい。

第一次指導

1　題目の指導。
▽挿畫を一瞥させ題目の迫力性に讀心を唆つてから直に讀に入るが良い。

2　投渡して一氣に讀破させる。
▽讀後の第一印象を記帳させて置く。

3　ノート學習。
▽机間を巡視して自學の方法やノートの記載法等を具體的に指導する。

4　質疑應答。
▽新出文字は板書して一齊に指導する。

氷山　舟船　捕
舵　舵　構　巨　瞬　綱　裂　準
勸　行方

▽難語句は前後の關係から類推させる。

灰色　雪雲　大小樣々　氷山　舟船　捕
鯨船　全速力　白長須鯨　取舵　見張
船橋　舵手　イの字なり　砲手　安全か
ぎ　身構　俄然　機關室　傳聲管　復唱
發砲の機會　蹈張り　鉛色　巨體　瞬間
もり　命中　鳴りをひそめる　爆彈　破
裂　船首　無線通信士　行手　指揮　二
番もり　歡呼の聲　送氣管　行方

5　範讀。
▽素讀の徹底を期して。

6　低音讀。
▽文の迫力に注意させて。

7　指名讀。
▽適宜に句切つて、何人かに。

8　挿畫と文とを照合させる。
▽何處を撮影したものか、本に何う出て居るか等。

9　文の觀點を言はせて見る。

10　通讀讀破。
▽全課を一氣に。

11 ノートを纏めて提出させる。

第二次指導

1 自由音讀。
2 問題學習。
▽先づ研究問題を拾はせる。
3 問題討議
▽問題を中心に各自の意見を交換させる。
4 構想の吟味
▽文脈を辿つて思想關係を吟味する。

捕鯨船（母船を離れ）
全速力
取舵（イの字なり）
鯨（白長須鯨）『一ばい、一ばい』
發砲の機會近づく
『用意』（すさまじい響）
發砲
命中『ぶすり』
爆彈破裂（もりを附けた綱）

灰色の雪雲（低くたれて）
地平線の上だけが明かるい（恐らく遠い所は晴れてゐるのであらう）

大小様々の氷山（あちらこちら）
總動員（船長も舵手も）
二番もり（歡呼の聲）
鯨の巨體（目じるしの旗）
再び全速力（鯨の行方）

5 書取。
▽板書の文圖を書取らせる。
6 指名讀。
▽中・劣生を主として。
7 輪讀。
▽座席順に。
8 話合。
▽文意を中心に。
9 範讀。
▽文の氣迫を聲音化して。
10 追範讀。
11 低音讀。
12 ノートを整理し提出させる。

第三次指導

1 通讀練習。
▽個讀に自由讀を交へて。
2 感想の發表
▽讀後感を自由に。
3 文意の檢證。
▽表現面に即して例證させる。
4 默讀。